和田湖上を發動機船で巡航した時も、風は風いだが、小雨はまだ降つてゐた。湖上の景色も私どもの想像したやうに雄大なものではない。千丈幕にしてからが、房州の鋸山の方がさう云ふ點では一層雄大でもあれば、奇峭である。が、美しい箱庭的の景色があゝ澤山一つ所に集まつてゐるのは珍らしい。(尤も、この夏永く滯在した野上君夫妻の話しに據れば、その日の天氣模樣で朝と午と夕方とで、湖上の景色と云ふよりも水の色に非常な變化がある。それが壯觀ださうな。或ひはさうかも知れない。)

午後五時半休屋の旅館を出發して、その日の間に二たび古間木まで降つて來た。停車場へ着いたのは十時三十二分、もう三分で汽車が出ると云ふ所であつた。その汽車で尻内まで出て、夜の一時半と云ふのに、後から來る急行のかねて賴んで置いた寢臺車に乘り込んで、始めてほつと息を吐いた。

私は歸京後更に房總方面へ出かけた。が、近頃は何處へ行つても田舍はない、田舍へ來たやうな氣がしない。本當に田舍へ旅行したやうな氣のするためには、東北も陸中以北へ

出掛けなければ駄目だ。私はさう云ふ印象を今度の旅行から享けた。

(大正十五年十月「隨筆」)

四日の旅

一

展墓のために、親子五人連れ、久し振りで濃尾地方に出掛けた。鎌倉を立つたのは、八月二十日の朝八時半、蒸し暑い日だ。子供連れとて、汽車は勿論三等、人息れに、すつかり茹つてしまつて、岐阜まで行くところを、午後の四時頃名古屋で下車、一臺の自動車に鮨詰めとなつて、志那忠本店の隣の大松に着く。

大松は三年程前アルスの兒童文庫講演會に引張り出されて、二晩ばかり泊つた緣故もあるが、それよりも私には隣の志那忠なぞへ這入り込むのが、何となく氣が退けて怖ろしいのだ。他の土地なら何も旅館なぞに恐れをなす程のうぶな年頃でもないのだが、岐阜と名

古屋は私の生れ故郷だ。小さい時からえらい方々や金持ちのお泊りになる所と聞いてゐただけに、その癖がまだ脱けないのか、何となく氣後れがしてこちらを撰んだわけである。

大松の奥座敷に鞄を預けると、その足で子供にせがまれて金の鯱を見に行く、大手御門を這入つた頃から夕立ち。そこに居合せた車夫のすゝめるまゝに、自分と家内と末の子だけ二臺の人力車に分乘、十二と九つの男の子は徒歩、車夫さんが「こゝが御本丸のあと、こゝが清水さまの屋敷跡、これは東京の馬場先門をそつくり持つて來たもの」といふやうに一々説明してくれる。まるでお上りさんだ。好生館前のお濠の角で、型の如く遠眼鏡を覗いて歸らうとしたが、車夫にやる小錢がない。止むを得ず大松まで引張つて行つてくれと云つたが、一臺八十錢づゝ呉れといふ。名古屋の物價にしちや高いとは思つたが、陽に燒けて貧乏寳れのした老車夫の顏に免じて、そのまゝ承諾する。今度は二人の子供を載せて私はてくつて歸ることにした。

大松で宿帳を持つて來た時、主人年齢四十九歳、妻つね四十一歳、子供長良十二歳、節

男九歳、寛丸六歳と書いて渡さうとしたら、傍に見てゐた上の兒が「阿父さんは何時でも一つづゝ年を少く書くんだよ」と云ひ出した。「いゝぢやないか、阿父さんはまだ本當は四十九だよ」と云ふと、「ぢや西洋流だね、そんなら僕のことも何故十歳と書かないのだ」と詰問されたのには困つた。女中が「阿父さんも敵ひませんね、オホヽ」と笑つて逃げ出して行つた。一體大松といふ家は表の見かけはあまり好くないが、奥が袋のやうに廣くなつてゐて、座敷にも庭にも落ち着きがあつて中々好い。お内儀さんの仕込みが好いのか、女中も丁寧で愛想が好い。それに泊り賃の廉いのが就中好い。私がこの旅行記を書く氣になつたのも、一つは大松の禮讃をしてやらうと思つたからである。

女中と云へば、私はちびり〳〵晩酌をしながら、妻に向つて「この女中さんを見い、これが名古屋美人の型だよ。眼と眉毛との間が廣くて、顏が陽の目を見ないやうに蒼黄色く、それでゐて、何處か垢ぬけがしてゐるだらう」といつたら、美人と云はれるのは悪い氣持ちもしないと見えて、別に反對もしなかつたが、戯談を云ひ返すやうな眞似は愼しんでゐ

るらしい。仕方がないから「東京美人の型はあれだよ」と、色の黒い顏の寸の詰つた細君を指して見せたら、女中さんも初めて笑つてくれた。

夜分になると、三年程前から自宅に置いて、逗子中學を卒業させてやつた私の從弟が訊ねて來たので、明日の朝鄕里の鷲山から長良の鵜飼見物に連れて行つてやる約束をして、一同寢に就く。

二

明くる日は日本晴れ、朝から暑くて堪らない。今日は岐阜に向ふ日だが、鄕里には、私の家も屋敷もない。それから親類もない。(序ながら、私の鄕里でたま〳〵文通してゐるのは、立ち寄れば困るやうな貧乏人ばかりで、どうかかうかしてゐるのは三十年來音信不通だ。)で、岐阜へ行つても泊る家がないから、大松の内儀さんを喚んで、「岐阜の宿は何處が好いかね」と訊いて見た。まあ玉井屋だといふ。玉井屋なら私も知つてゐる。しかし志那

忠を恐れたと同じ意味において、何だか怖いやうな氣がする。が、大松の内儀さんは、「知らない所を御案内しても、もし不都合があつては、私の方で迷惑いたしますから敎へられない」といふのだ。まゝよ、玉井屋へ行かうと覺悟する。

午前十時岐阜驛着、すぐに驛前の自動車に乘らうとしたが、夫婦と子供三人乘ると、もう一杯で、例の從弟は運轉手臺に載せようとしたが、運轉手が頑張つて、そこへ乘つてはいけないといふ。「なに、名古屋で載せたものが、岐阜では載せないのか」と反問して見たが、「警察が八釜しいからいけない」といふ。騎虎の勢ひ、「ぢや降りやう」といつて、一同降りてしまつた。ところが、驛前の自動車はみんなぐるだ。一つ嗔嘩したらもう他の自動車には乘れない。やむを得ず、人力車に乘つたら、玉井屋まで四五丁のところを四臺で二圓取られた。自動車なら二臺でも一圓四十錢で濟むさうな。後で運轉手どもは阿呆だと思つて見て居たらうが、世の中にはかういふ阿呆もあるといふことを知らないから、先方の方が餘程阿呆だ。

だが、鄕里へ着くが早いか、いきなり嗔嘩をしたので、むしやくしやしてゐると、妻が傍から「貴方はお故國へ歸つたから、少しは好くしてくれさうなもの位に思つていらつしやるだらうが、先方ぢや何處の者だか知りませんよ」とたしなめた。「そりやさうだ。岐阜のことなら、一本の樹から一つの石まで知つてゐる積りだ。馬鹿にされて堪るけぇ」と云つたが、考へて見ると、私の顏には何處にも岐阜生れとは書いてない。十五の年に故國を出て、三十年このかた御無沙汰してゐるのだ。やつぱり此方が惡いのかなと諦めることにした。

玉井屋の奧二階に鞄を拋り込んで、夕方戻つて鵜飼を見る約束をして置いたまゝ、すぐに自動車を賴んで貰つて、鄕里鷺山村に向ふことにした。が、すぐに又氣が着いて、女中を呼び返して、「運轉手臺に一人乘せて貰へるかい」と訊いた。入れ代つて番頭が出て來て「大丈夫でございます」と返辭をした。それを聞くと又腹が立つた。驛前から乘ると、運轉手臺には乘せない。宿屋から乘ると乘せる。岐阜の警察署はこんな依估の沙汰をしてゐ

るのかと、ぶん〳〵蔭で怒つて見たが、乘せて貰はないと困るから表沙汰にはしないことにした。人間は得手勝手なものである。

岐阜の上手を縱横に走つて間もなく長良橋にかゝる。川の下手に低い禿山が見える。それが私の生れた鷺山村の西手に立つてゐる山だ。何となく涙ぐましい氣持ちになつて、「おい、あれが鷺山だよ、鷺山だよ」と云つた。初めて見る妻も子供も一生懸命に見てゐた。間もなく橋を渡つて、長良の町に入ると、九つになる男の兒が「あゝ兄ちやんの町だ、兄ちやんの町だ」と云ひ出した。長良といふ名を附けられた上の兒は、どこやら氣まりの惡さうにしてゐた。妙なものだ。

長良川の土手を通り抜けて、三四丁行つた所から、左に折れて桑畑と田圃の中に入る。刑務所の門が見える。監獄が生まれた村の近くへ移つたとは、かね〳〵聞いてゐたが、えらいものを引き請けたなと思つた。脫獄囚が一人者の寡婦の家を訪ねる。それが私の故鄕に殘した母親？　私はいつかデイケンズの「大きな期待（グレートエキスペクテーション）」のことを考へてゐた。

三

村に這入つて、ちき籔陰の法光寺の門前に着く。決して大きな寺ではないが、山門は比較的立派だ。その昔私の家の本家が潰れた時、親爺がすゝめて寄進させたものだと聞いてゐる。もう影も形もなくなつてゐはせぬかと思つたら、六十年の風雨に曝されながら、私が子供のときに見たのと同じやうな姿で立つてゐた。一寸舊知に會つたやうな氣がした。私は氣が着かなかつたが、「瓦に一つづゝ家の紋が附いてゐましたよ」と、後で妻が云つてゐた。

妻子を本堂に上げて置いて、私は一人庫裡へ行つて見た。庫裡には一人鶴のやうに痩せた白髯の老僧が座つてゐた。鶴のやうに痩せてはゐるが、別段鶴のやうな仙僧ではない。たゞのこの寺の先住だ。十年程前東京の私の家へも來てくれたことがあるので、私はすぐにそれと覺つた。が、先方では、あまりに思ひ掛けないのか、何んだか一寸分らないやう

な顔をしてゐた。それでも名を告げると、非常に喜んで迎へてくれた。すぐに本堂に續く客座敷へ招ぜられ、現住職も梵妻も出て來て挨拶をした。私は早速來意を告げて、佛前で讀經に預かりたいと頼んだ上、時分どきで他に物を喰べさせてくれるやうな家も近くにないし、一飯の齋に預かりたいと申入れた。老僧は早速承知してくれたが、それからそれへと話し續けて、中々讀經にかゝつてくれない。子供達はしびれを切らして、本堂へ立ち歸り從弟を相手に、須彌壇の裏や、高座の蔭で隱れん坊をして遊んでゐた。

現住職といふのは、私より二つか三つ年下の男で、子供の時分は弱蟲で時々遊び仲間から泣かせられたものだ。長らく鄕里を出て收稅吏をしてゐたが、一昨年寺へ戻つて得度式を擧げたのだといふ。關東の震災の時は兩國橋の稅務署に居たとやらで、一としきり大震火災の話が出る。それに續いて、老僧が死んだ親爺や阿母の話をいろ〳〵聞かせてくれた。本堂は私の生れる一兩年前丁度明治十二年から十三年へかけて親爺が總元締めとなつて再建したものださうな。建築費總額千三百圓餘りといふから廉いものだ。それでもその金子

を使ひ込まうとする惡い奴なぞがあつて、「あんたの阿父さんがなけりや、この寺は出來せなんだのぢや」などと、久し振りで會つただけに老僧中々お世辭がいゝ。老僧から聞いた話の中で私の耳に殘つたのが二つある。私は年寄つ子で、私が生れた時は、親爺はもういい加減の老人であつたが、何かの機會に横文字のペーパかなんぞを見て、これからの世の中は横文字を知らなけりや、人間にはなれない。俺が若けりや自分でやるんだが、さうもならぬから、伜にでもさせようと云つたさうな。箴言空しからず、その伜は今や横文字で飯を食つてゐる。たゞし私立大學の英語の先生では、一向親爺の大を成すに足らないのを憾みとするばかりだ。

もう一つは阿母の在世中この寺へ遊びに來て、夏蠶が飼つてあるのを、「わしも手傳つてやろか」といふから、「何卒手傳つておくんさい」と云ふと、すぐに籠を提げて桑畑へ出て行つたが、間もなく籠一杯積んで戻つて來た。あんまり早いので、あとで行つて見ると桑の葉がみんな逆もぎにして、來年は芽の出ぬやうにしてあつたさうな。それがいかにも、

私の知つてゐる阿母らしい。一度なぞ私が長良の川祭りに出掛けようとして、着て行く着物が氣に入らぬか何かで駄々をこねてゐると、「そんなら待つとれ」と云ひさま、箪笥から浴衣の反物を出して來て、ヂヨキ〳〵と切り放つや、一人でせつせと縫ひにかゝつた。そして、一時間も經たぬ中に、「さ、これを着て行きんさい」と投げ出してくれたことがある。かういふ頓狂な阿母と、村の多少の先覺者とでも云はれさうな親爺との間に出來た子だから私のやうな變な人間が出來上つたのであらうと思ふと、何といふこともなくほくそ笑まれる。

四

あまり老僧の話に際限がないので、私達は中座して、御堂の裏手にあたるお墓へお詣りに行つた。狹い墓地の中央に、一基の小さな苔蒸した墓石があつて、表に釋慈敎、釋智德と父母の名を並べて刻んで、横に明治二十四年五月森田米松建立としてあるのがそれだ。

妻は岐阜から持つて來た花を供へて、石塔の頭から柄杓で水をかけた。私達は順々にその前に額づいた。それから本堂へ戻つて來ると、やつと老僧が法衣を更へて、須彌壇の前で讀經にかゝつてくれた。それが濟んで一同客座敷へ引返したが、時計を見るともう一時過ぎだ。子供達はそろ〳〵空腹を訴へて、それとはいはぬが、めい〳〵詰らなさうな顏をしてゐるのに、膳は中々出さうにもない。お豆腐の冷奴でいゝからと賴んで置いたのに、何をしてゐるのだらう？田舍者の悠長さにも困る。こんな位なら岐阜へ引返して喰べる事にすればよかつたと後悔したが、もう追着かない。是非なく神妙に待つてゐると、やつと梵妻が六人前の膳を運んで來てくれた。見れば、それ〴〵鰻の蒲燒が附いて、お椀に瓜揉みに燒茄子と、すつかり膳の上が田舍向きに揃つてゐる。こいつは思はぬ散財をかけたものだ。聞いて見ると、魚は長良の町まで使を出して取り寄せたものださうな。時間が經るのも無理はない。內心少々不平であつたが、子供達が喜んで喰べたので、まづ安心した。それから酒が出る。少し位いけるロではあるが、日中の暑さ盛りの酒事は少々閉口しない

でもない。が、御馳走振りに對して辭退もならぬから、數献重ねた。やつとそれがしまひになつて、食後の水瓜が出てから、早々布施を置いて退散することにした。歸り際に老僧が一枚の借用證書を取り出して來て、私に返してくれた。だん〳〵聞いてみると、これは私の母がこの村の家をしまつて、東京へ出る時、他へ用立てた金子を寺へ喜捨するといつて、借用證書を渡して來たものださうだが、貸主が土地に居なくなつてから、そんな金子を眞當に返すやうな正直者はまづない。寺では催促も出來ぬからお返しするといふのだ。貸金の證文を寄附する奴も前代未聞だとは思つたが、かうして返されて見ると、私が代つて現金を喜捨しなければならぬかもしれない。といつて、それも二十年前の古證文だけに、考へると馬鹿々々しいやうな氣がする。まあ後でどうにでもならうと、そのまゝ懐中して寺を出た。

塀の外は私の村の裏街道にあたる。右へ折れて一丁程行けば、そこに私の處女作「煤煙」の中へ出て來るお粂の家がある。お粂には若い時分いろ〳〵世話になつた上に、小說の中

では副主人公として大分迷惑をかけてゐる。で、私もその後自分の村へ歸る時には、何處へ寄らんでもお粂にだけは會つて歸ることにしてゐた。處が、今日は暑さに散々茹つてゐる上に、日中酒を飲んでヂカ〳〵照りの中へ出たから堪らない。立つてゐると、眼がくらくらとするやうな氣持ちだ。それに、お粂に會つて話しこまれでもしたら、夕方の鵜飼の間に合はない。五六年會はぬから、さぞ年も老つたらう。會つてやりたいとは思ひながら、とう〳〵割愛することにした。

裏街道の外れに鷺山の禿山が見える。山といふよりも丘だ。丘の中腹に私が子供の時分に通つた小學校が見える。そこへ子供達を連れて行つてやる豫定であつたが、何しろこの暑さでは堪らない。村の中程から田圃の中の小溝について左へ折れた。何も知らぬ妻や子供達は默つて後から隨いて來た。村の家作りは痕形も留めない程一新して、立派になつてゐるが、鍵の手になつた溝の形は昔ながらに變らない。小さな板橋の上まで來た時、私は不意に立ち止つて妻を顧ながら、

「おい、これから先が俺の生れた家の屋敷跡だよ」と云ひながら、溝に沿うた桑畑を指さした。

妻は吃驚したやうに默つて眼を見張つてゐた。

五

私達は溝に沿うた小徑について土手へ上つた。土手の下には矢張りその小溝が流れてゐる。この鍵の手に流れる溝と村道とに圍まれた千坪足らずの桑畑が、五十年前に私の生れた家の屋敷跡だ。今は桑畑になつてゐるが、その頃は大部分竹藪であつた。西北の隅が元本家のあつた所で、その東南土手に沿うた所へ新家を出したものらしい。私の生れた家は新家の方だ。その時分はもう本家は潰れてなかつた。その新家も、私の代に屋敷を賣り拂つて、今ではもう他人のものである。他人のものだが、私が小さい時によく木登りをした四五本の柿の木は、元のまゝに生ひ茂つて、折から柿の實もたわゝに結んでゐる。見ると

土手の下の板橋を渡つて這入るやうになつてゐた入口の榧の木も、青々と茂つてゐるではないか。人異なれども山河易らずの感が今更のやうに深い。

一體私の村には元から大地主といふやうなものはなかつた。けれども、子息を中學へ入れたやうな家は大抵潰れるか、田地を賣り拂つて町へ出てしまつた。子息に大學を卒業させた私の家がその範を示したといつてもいゝ。子供を學校へなぞ遣らないで、營々農業や養蠶にいそしんでゐた家は、大抵身代を仕出して、今では皆立派な家屋敷を構へてゐる。この村へ這入つて一番さきに眼につくのは屋臺骨の大きな、棟の高い瓦屋根の家が立ち並んでゐることだ。妻なぞは「あれはお寺ですか」と聞いた位だ。事程左樣に宏壯なもので、私の住んでゐる鎌倉の借家なぞは比べものにもならない。友人の中にも、內閣書記官長になつて官舍にでも入つた奴の外には、內部は兎に角あの位外見の立派な家に住んでゐるものは一人もない。聞いて見ると、あれは皆養蠶をするために、あんな棟の高い家を拵へるのだといふことだが、それにしても、あれだけ立派な家を建てられるのはえらい。二十年

前絶えず長良川の氾濫に惱まされてゐた一寒村のことを考へると、眞個隔世の感がある。農村の疲弊なぞ何處を吹いてゐると聞いて見たい位のものだ。それが高利貸をして儲けた金でもなければ、權利株でせしめたものでもない。たゞ養蠶の機運に伴れて、粒々辛苦の餘を積み上げたものだからえらいものである。その代り所有慾は旺盛に相違ない。大地主がないから小作爭議も起らなからうが、共產主義にでもなつたら、眞先に反對の火の手をあげるのはこの村の百姓であらうと思はれる。

「俺が村へ歸りたがらないのも無理はなからう」と、私は妻を顧ていつた。「この村で尊まれるには、第一には金子を持つてゐなければならない。第二には官位だ。俺はその二つとも持つてゐないからな。」

初めて見る妻子のためにこんな所へ廻つて來たものゝ、人手に渡つた屋敷跡を見て感慨に耽るのはどうも五十男に似合はしくない。私は早々土手傳ひを長良に向つて歸らうとした。眞正面に金華山が眞黑に金字形をして聳えてゐる。私は毎日この山を見て育つたもの

だ。この山だけが昔ながらの氣持ちで私を迎へてくれるやうな氣がしてならない。

村端れの土手下に茅屋があつてその一軒から六十餘りの皺くちやの婆さんが菅笠を被つて竹籠を手にして出て來た。さうして私達と後になり前になりして歩いてゐたが、とうとう立ち止つて「あんた方何處から見えたな?」「私はこの村のもんぢや」と、わざと田舍訛りで返辭をして見せた、「お前さんな榮吉さの內儀さんぢやらう?」婆さんはきよとんとして私の顏を見返してゐたが、「まあ、米さぢやないかな。さつきからどうも村の衆のやうな話工合に聞いて居つたが、矢張りさうかな。小さい時から肥つて見えたが、今でも肥つちよりんさるなも」と、婆さんはしきりにその爛れた眼を押し拭つた。

六

私の家にはもと竹、藤三、榮吉といふ三人の男が代る〳〵野菜畑の世話をしに來てくれた。その中でも榮吉といふのは一番正直者で永く出入りをしてゐた。この婆さんはその榮

吉のお内儀さんである。私どもが木蔭に足を駐めて、長良通ひの乗合自動車を待つてゐる間、婆さんもそこにしやがんで、ぽつり〳〵自分の家の話をしながら、私の顔を見上げては眼を押し拭つてゐた。榮吉さはもうとうに死んで、息子の代になつてゐるといふこと。親子揃つて正直者だけに他家では軒並みにお寺のやうな家を建てゝも、この家ばかりは相變らずの水呑百姓で一向うだつが上らぬらしい。親子二代眞黒になつて稼いで、それで水だけしか呑めないやうでは、世の中に問題が起るのも無理はない。

いくら待つても乗合が來ないので、近くの家で聞いてみると、二時間おきに通るといふのだ。それぢや待つても仕方がないと諦めて長良まで歩いて歸ることにする。暑さに閉口垂れて崇福寺も、「煤煙」の中へ出て來る齋藤道三の墓も見せて遣れなかつた。

長良から一路電車で今小町の玉井屋まで歸つた。もう五時だ。一風呂あびて、すぐに自動車で鵜飼に出かけることにする。同勢六人他に女中が一人重詰めを持つて隨いて來た。船は卯の花丸、船頭が水の中へ入つて淺瀬を押して上ると子供たちはもう大はしやぎだ。

隅田川のどぶ泥のやうな水ばかり見て育つた妻も、底の小石まで數へられた長良川の水の清冽なのには眼を見張つて驚いてゐた。「俺は子供の時分、毎日この水で泳いだものだ。だから今でも色が白いのだ。鎌倉の海水浴とは少し違ふよ」と云ふと、海水浴で眞黒になつてゐた子供達が「さうかい、川の水は黒くならないのかい」と驚いて聞き返した。「でも、船頭さんは黒いよ。」「うん、あれは何だ。あれはこの間海から歸つて來たのだよ。」

金華山が逆さに川の水へ影を落すあたりの淺瀬に船を着けて、鵜船が下つて來るのを待つことになつた。もう七八杯も前から遊山船が着いてゐる。それがあとから〳〵と增して來る。夕暗みの迫るにつれて子供花火がぽん〳〵打ち揚げられる。山の中の納涼臺にも火が點く。私達の子供の時分とは長良も納涼地として隨分發展したものだ。それに伴れて、かなり俗惡にもなつたが、賑やかだから子供達は大喜びだ。私は一人ビールの盞を傾けながら子供達が川の水に花火を流すのを見守つてゐた。遊山船は多いが、割合に絃歌の聲の湧き立たないのは、これも世界的不景氣のせゐかも知れない。が、私達には却つて都合が

よかつた。

「おい、俺達もいよ〳〵年を老つたら、こんな所に家でも建てゝ暮すかな」と云つて見たが、妻は生返辭をしてゐた。

寫眞屋が來て勸めるまゝに、一家揃つて船縁へ出て寫眞を撮つて貰つたが、その頃から「早くして下さい、早くして下さい、鵜船が下つて來ますよ」と、船頭が急き立てた。下つて來るのではない。すぐ其處から篝火を點けて漕ぎ出すのだ。鵜飼のことは皆さん御承知だから事細かに書くまでもあるまい。たゞ私の小さい時分とは鮎も少くなつたと見えて、鵜の魚を咬へて來る事も極めて稀れになつた。それでも鵜船をめぐつて、多くの遊山船がわれ勝ちに客に見せようと漕ぎ廻るところは、壯觀といふよりも寧ろ凄まじい。が、それも一刻、船が長良橋の下へ着く時分には、舷を打つ船頭の懸聲も稀になつて、提灯の火も消え〳〵になつた。そして船から上つた時は、もう川面が森としてゐた。

時間はまだ九時前後だ。自動車が稻葉神社の下へさしかゝつた時、私は五六年前に一寸

遣つて來て、一週間ばかり滯在したことのある或お料理やの内儀さんに會つて行く積りで、一人で自動車を降りた。

七

處が、私の宛てにしたお茶屋は一向見當らない。水琴亭の下から這入つた山の下の小路だとは覺えてゐるが、そこらをうろつき廻つても、一向見當らない。人に尋ねるのも何となく氣が退ける。私はとう〳〵諦めて電車通りへ出て來た。

その時寺の老僧から聞いた話が私の心に思ひ浮んだ。それは零落した本家の一人息子が名古屋で小僧を仕上げた結果、今では柳ケ瀬の本通りに洋服店を開いて、盛大に商賣をしてゐるといふ話だ。その息子といふのは知らないが、親爺が東京から戻つて來て八間道の角で甘酒屋をしてゐた見窄らしい風態は子供の時分ちよい〳〵見懸けた。それが息子のお蔭で氣樂な隱居の身分になつてゐるとは何より耳寄りな話だ。一つ見舞つてやらうといふ

氣になつて、すぐに電車に乘つて出掛けた。行つて見ると、成程五間間口の相應な店つきだ。夜分のこととて、內儀さんらしい若い女が一人店番をしてゐたが、やがて息子も出て來た。それから他所へ涼みに出かけてゐた親爺も呼んで來てくれた。一と通り挨拶が濟むと、私はすぐに「自宅の佛壇もこの家で守りをしてゐて貰へるさうだが――」といひ出してみた。これはそんな話を老僧から聞いたので、私の家は新家だから、どうせその佛壇を本家から貰つて出たものに相違ない、元へ還れば結構だと思つたからだ。處が、佛壇のことをいひ出すや、爺さんは妙にいやな顏をして「あれは國さが二十兩で質に置いて、流れるといふので俺が受け出して置いたのだ」といふ挨拶だ。國さといふのは、一生貧乏をして死んだ私の庶兄で、阿母が故鄕を出る時、佛壇を賣るわけにも行かぬから、そこへ呉れてやつたものらしい。處が、貧乏をしてゐるから、すぐに又それを質に置いたのだ。爺さんがそれを受け出したに間違ひはなからうが、私は今それを取り戻しに來たのではない。そんなことをいはれると、門徒の佛壇だけに、あれは今新しく買へば時價千兩もする。古くても三四百兩はするだらうといはれた老僧の言葉を思ひ出さずにはゐられない。田舍者はこれだからいやだと、私も一寸いやな氣持ちになつた。で、「あんたの家で守りをして貰へれば、結構だ、結構だ」といひながら、そのまゝ立ち上つて、其處を出てしまつた。

もう何處へも行くあてもない。私は町の中をぐる〳〵廻つて、十一時過ぎに宿へ戻つて來た。一と寢入りして眼を覺すと、末の兒の腹加減が惡いといつて、妻が心配さうにしてゐた。旅先で病氣になられては堪らない。夜も白々明けになつてゐたから、早速帳場へ電話をかけて、近所の醫者に來て貰ふことにした。醫者は寢卷きの上に羽織を引掛けてやつて來てくれた。一度浣腸をすると、大分元氣が出て來た。この分ならといふので午前九時岐阜發の列車で、高山線の太田に向ふことにする。が、その前に手紙を二本書いて、死んだ榮吉とお糸の阿母とに香典を送ることにした。前者は二圓、後者は五圓である。實はその五倍も送つてやりたいのだが、決して遣らなかつた。それでゐて同額以上の金子を宿の茶代と女中とに置いた。五圓の茶代は決して見得を張る男の置く茶代ではない。私は

生れつきしみつたれだ。それでゐながら、遣りたい所へは遣らないでも、見得のためにはそれだけ拂はなければならない。人間は窮屈なものだ。

汽車の時間に遲れるといふので、爲替は宿へ賴んで置いて、すぐに自動車に乘つて出かけた。從弟は昨宵の中に歸つたから、今朝は五人づれだ。玉井屋の建築はあの頃のものとしては中々立派だ。たゞ女中が浴衣にメリンスの帶を締めてゐたり男衆が尻切れのじんべを着て、客の前へ出るのは、地味を旨とする心懸けは心懸けとして、今時一流の宿屋としては一寸變に思はれた。

汽車が鵜沼に着く頃、私は小高い丘の上の建物を指さして、「あれが犬山城だよ」と敎へてゐたら、傍の人が親切に「犬山城は向ふに見えるあれです。こちらは料理屋ですよ」と敎へてくれた。

八

白帝城と料理屋とを間違へては先祖の成瀨隼人正正成に濟まない、私の先祖ではない、お城の先祖だ。成程少し離れた小山の上に城らしいものが霞んで見える。この方が餘つ程恰好が好い、「あれだ〳〵」と云つてゐる間に汽車は犬山を出てしまつた。その時分から汽車は木曾川緣りに沿うて進んだ。兩岸の岩と岩とが迫つて、時には急潭を成してゐるところもある。その上を川舟が辷るやうに下つて行く。「あれに乘るんだよ」などと話してゐる間に、汽車は間もなく太田に着いた。

すぐにボロ自動車に乘つて河原に向つた。河原には天幕を張つて下り船の發着所が設けてある。私どもは早速一艘雇ふことにして、子供達のために清水を一杯藥罐に汲んで船の中へ入れて貰つた。船の中で小便がしたくなつては適はんといふので、私は河原で立小便をした。すると子供が三人それに倣つた。で、用意が出來ると、二人の船頭が乘り込んですぐに船を出してくれた。「この間船が引くり返つたことがあるさうぢやないか、しつかりやつてくれ」と注意すると、「へえ、あれは定員以上に乘り込んでもゐたし、それに水も

平日(ふだん)よりは出てゐたでなもし」と、年老つた方の船頭が辯解がましく云つた。しばらくして又「船頭もつらいわな、三百兩もする船の道具を流した上に、あの船頭は過失致死とやらで三箇月(みつき)懲役に行きましたでなも」と附け加へた。「何んでもいゝ、この船さへ引くり返らなければ不足はいはない」といつてる間にも、船はどん〳〵早瀨を下つて行く。あれは何とかの瀨、これは何とかの岩、と一々名前が附けてある。名前をつけんと名所にならないものと見える。中にはお富與三郎の女夫岩といふのもあつた。二人は木更津からいつの間にかこんな所へ廻つて來て死んだものらしい。いつそロオレライの岩に因んだ傳說でも揑造したら、日本ラインの名に應はしからうに、智慧のない話だ。獅子岩といふのが本當によく獅子の形に似てゐたので、子供達は大きに喜んだ。兎に角、夏の川の上を早船で下るのはいゝ心持ちだ。私はパテーベビーのカメラを取出して、そこ〳〵の岩や早瀨を撮つて置いた。處が後になつて開けて見ると、フイルムがうまく廻轉しないで、一つも映つてゐなかつたのには驚いた。對岸に桃太郎屋敷といふ幟が何本も立つてゐる。ライン下りが有

名になると、桃太郎のお伽噺までこゝで獨占する氣だから怖ろしい。

そこを越した頃から、水の流れがだん〳〵平になつて、犬山の白い鐵橋が見え出した。此處まで來ると、中の島の上に立つてゐるお茶屋と橋の下の小山の上に立つてゐる白帝城との區別がはつきりと附いた。城の形は水の上から見るのが一番好いらしい。いづれにしても、一日の清遊には不足のない所だ。

船から上つて、橋の袂の田中屋といふので畫飯を喰つた。が、何しろ尾濃の平野の暑いには閉口した。いくら暑くても、今日の中に舞坂か蒲郡まで行つて置かぬと、明日鎌倉へは着かれない。畫飯が濟むと、すぐに又電車に乘つて名古屋に向つた。後から乘り込んで來た二人の背廣服の青年紳士が入口で何やらこそ〳〵話してゐたが、急に私の前へ來てぴよこんと頭を下げた。見ると、なに、私の學校の卒業生だ。「こんな所でお目にかゝつて實際惡いことは出來ませんな」と頻りに汗を拭く。何か惡いことをしてゐたものらしい。

終點へ着いた時、名古屋驛はほんの四五丁だが、荷物があるから自動車を賴まなければ

ならない。自動車の中で私の前に乘つてゐた六つの子がしきりに「熱い！熱い！」といひ出した。日が射して暑いのだらう位に思つて、「どうした、え、どうした？」と聞いてゐるうちに、その子の背中がボーッと燃え上つた。私は吃驚して、素手でその服を揉み消した。幸ひ子供に怪我はなかつたが、私はお蔭で掌に火傷した。煙草を吸つたマッチの燃えさしから火をよんだものらしい。とんだカチ〳〵山だと大笑ひをしたが、子供がいつ迄も泣き止まんのには閉口した。私の掌もひり〳〵する。

九

驛の待合所で妻が子供に服を着かへさした。が、びつくりした子供はまだ泣きやまない。仕方がないから食堂へ連れて行つて、アイスクリームで御機嫌を取つて、やつと泣きやんで貰つた。そのために汽車に乘りおくれて、漸く四時半の靜岡行に乘り込んだ。蒲郡で五時半、舞坂へ行けば七時過ぎだ。子供に夕飯を急き立てられても困ると思つたから、とう

とう蒲郡で下車することにした。降りて見ると、驛前に「常磐館滿室」といふ建札がしてある。こいつは弱つたと思つたが、もう仕方がない。運轉手の勸めるまゝに、常磐館へ電話をかけて見ると、支配人の三村さんが出て來て「どうぞすぐに入らして下さい」といふ。喜んですぐに乘りつけた。

宿では一番の部屋を明けて置いてくれた。海には面しないが、山に向つた角の部屋で、廻り縁になつてゐて、中々居心地が好い。汗ふきのタオルを持つて來ると同時に、アイスクリームを出してくれるのも氣が利いてゐる。それよりも、子供達は庭が廣いので喜んだ。鎌倉を出てから、まだ一度も飛んだり跳ねたりすることの出來るやうな、廣い庭のある宿屋に泊つたことがない。庭に續いて養魚場もある。私はくたびれて廊下の安樂椅子に腰を落したまゝ動かなかつたが、子供達は日が暮れてしまふまで庭を飛び廻つてゐた。夕飯の膳が出ても中々歸つて來ない。珍しいことだ。膳の上には一々ナフキンがかけてある。これが文化式といふのであらう。「こゝの家ぢや覆物（おほひもの）をしないでは何一つ持つて來ませんの

ね。アイスクリームにも、菓子鉢にも薄絹の素蓋がしてありますよ」と妻が感心してゐた。久し振りにゆつくりした氣持になつて、私はビール三本を平げてしまつた。

子供達が寢ついてから、私達は二人で庭のベンチへ出て、しばらく涼んでゐた。向ふに中の島が黑くこんもりと盛り上つて見える。足下には、鎌倉なぞの寄せては返す大波とちがつて、ちやぶ〳〵と渚の砂を舐めるやうな海の水が囁いてゐる。他の泊り客も早寢をして、四邊には誰も出てゐない。私達はすつかり靑年時代に戻つたやうな氣持ちになつて、長い間押し默つたまゝ、そこに腰かけてゐた。

明くる朝は、日の出る頃からもう子供達が起きて騷いでゐた。私は子供達にせがまれて山の上の動物園から馬場のあたりを見に行つた。大弓場があつたので、三四日弓を持たぬ懷かしさに、上の子供と一緒に引いて見た。十五本引いてやつと三本當つた。まあ、この位の手の內だから仕方がない。折柄けたゝましい爆音がするので仰いで見ると、水上飛行機が飛んでゐる。「飛行機だ、飛行機だ」といふので、私達は又養魚場の上から海岸へ下りて見た。一たん着水した飛行機は、すぐに又宿の前から水の上を滑走して、向ふに見える二つの島の上へ飛んで行く。それが又宿の上を一廻りすると、すぐに着水する。間もなく又滑走して飛び上る。初めて見た子供達は大喜びだ。どうやらこの宿で、子供達の慰みに飛ばせてゐるものらしい。その他にテニスコートもあれば、球突きも樂燒も演舞場もあるさうな。眞個至れり盡せりだ。

十時の汽車で歸らうとすると、三村さんが挨拶に來て「午後になつたら船を仕立てゝ島廻りに御案內でもしようと思つてゐたのに、それは殘念な」と頻りに殘念がつてくれた。私は宿の設備をほめた上「たゞ一つこの宿の名物料理がないのが殘念ですね。朝の蜆汁では酒の肴になりませんよ」と遠慮のないところをいつたら「え〻それもいづれそのうちに」と、三村さんは笑つてゐた。何よりもこの宿の宿料の安いのがうれしい。食費の外に部屋代を取るが、茶代を取らないから、結局この宿が今度の旅では一番安値に上つた。

三村さんは驛まで若いものをつけてよこして、乘車の世話をさせてくれた。一路無事。

私達は午後四時半親子つゝがなく鎌倉の家に戻つた。

圖迂々々しい滑稽と間の抜けた滑稽

上

私がはじめて法政大學の豫科の英語の教師になつた時分のことである。同僚の一人――この男は私より年は若いが、永い間陸軍の教官を勤めて、教師としてはずつと古狸であつた――が側へ寄つて來て、にや〳〵笑ひながら、

「あなたは教場で間違ひを教へて來て、それと氣がついたとき、次の時間にそれを訂正しますか」と訊ねたものだ。

この突然の質問には私も少々面喰つた。が、「そりや訂正しますね、まさか間違ひと知つてそのまゝにもして置かれないから」と、正直に答へて置いた。

「それはあなたが新米の教師だからですよ」と、その男はいよ〳〵落着き拂つていつた。

「あなたが教師としての良心を重んじて、恥を忍んで、先に犯した間違ひを生徒の前に訂正した處で、それは決して生徒のためになるものではありません。生徒は、あなたが何ういふ間違ひを何ういふ風に訂正したかといふ、肝腎の點は決しておぼえてくれるものではない。おぼえるのはたゞ『あの先生は間違ひを敎へて後から訂正した』といふ事實だけです。さういふ事實が度々重なれば、何ういふ印象を生徒の頭に殘すと思ひます？　それは決して訓育上香ばしいことではありませんよ。だから善良な敎師はいくら間違へても、決して後から敎場へ出て訂正するものではない。何うです、お分りになりましたか。」私もこれには一本參つた。聞いてゐると、何うやらこの男の說が正しいやうな氣もする。すると、相手はいよ〳〵得意になつて言葉をつゞけた。いはく、

「そも〳〵生徒にウソを敎へて、それが直ちに生徒の害になるなどと考へるのは、單に間違つてゐるばかりでなく、さういふ考へ方そのものからして甚だしい自惚れだ。一體生徒

といふものは、正しいことを敎へた處で、決して正直におぼえてくれるものでない。いはんやウソをや、間違ひをやだ。だから何んな嘘を敎へた處で、無益にして且無害である。これが私の多年の經驗から割り出した結論ですよ。さう思へば、どんなウソを敎場で敎へて來ても、悔いるにも及ばなければ訂正するにも及ばない。まあ試みに、あなた自身の過去を振返つて御覽なさい。小學校から大學を出るまでにはあなたも諸先生から幾多のウソを敎はつて來たことでせう。それが今日些少でもあなたの身に害を與へてゐますか、ゐないでせう！」と。

「成程その通りだ！」と、私は溜息と共に答へざるを得なかつた。「それ御覽なさい」と、相手はしづかにいつた。「あなた自身が諸先生のウソによつて害を受けなかつたとすれば、あなたのウソによつて生徒に害を與へることもないと見るのが正當でせう。それを自分が一つ誤りを敎へたからといつて、直ちにそれが生徒に害を與へるやうに考へるのは、全く認識不足の敎師が何でも自分のいふことは一々生徒がおぼえてくれるやうに思ふ自惚れか

ら來てゐるんですよ。」

私はすつかり當てられて、閉口頓首、唯々として同僚の前を引退つた。

處で、讀者はこの話を讀んで何ら考へられるであらうか。勿論、私の同僚のいつたことは詭辯である。詭辯とは元來不合理であることを恰も合理的であるかの如く聞かせるものに外ならない。しかもこの場合その不合理であることは聞く方にも分つてゐるから、そこに一種の滑稽が湧く。私はなほそれについて考へて見たい。

中

前回、私は相手のいふ言葉の不合理であることが聞く方にも分つてゐるから、そこに一種の滑稽味が湧くといつた。が、分つてはゐるが、一寸まごつかせられる。そのまごつかせられる論理（ロジック）の正體は、「一體生徒といふものは、正しいことを教へても決して正直におぼえてくれるものでない、況んやウソをや、間違ひをや」といふ一句にある。

成程、生徒は正しいことでもおぼえてくれないかも知れない。しかし決してとはいはれない。決しては唯はせものである。從しんばこの前提を承認したにしても、「況んや正しからざることをや」とはいはれない。正しからざることでも正しきかの如く教へられたら、少なくとも生徒のそれをおぼえる率は正しいことと同樣なはずだから。つまり決してや況んやで胡麻化されて、一寸まごつきはするが、反省すれば、その不合理であることは分り切つてゐる。それだからそこに一種の可笑しみを生ずるものである。

もう一つこの滑稽味には圖迂々々しいといふ特徴がある。「だから、何んな嘘を教へても無益にして無害である。」何んな嘘を教へてもの反面には、「何んな正しいことを教へても」があることはいふまでもない。それ位なら教師なぞ罷めた方がいゝのだが、さうはしないで、教師はウソを教へても構はないといふ結論に達したのはずるい。かういふ例はまだ他にいくらもある。

或學校に一先生があつた。先生始終大酒を呑んで、時々失策も演ずる。で、最初は生徒

の評判も好かつたが、だん〳〵排斥されるやうになつた。友人がそれを心配して、「君は酒さへ呑まなけりや好い先生になれるのだから、少し酒を慎んだら好からう」と忠告した。すると、その先生のいはく、「何をいふんだ。僕は酒を呑むために、教師をしてゐるんだ。教師をするために酒をやめて何うするもんか」だと。これは詭辯といふよりも、むしろ厚顏無恥を曝け出した露悪家である。が、第三者から見れば、その圖迂々々しさの中にも一種の可笑しみは感じられよう。

もう一つ、年中困つてゐる男が或人に泣きついて、やつと幾許かの金を手に入れた。で、その歸路に、早速或美味しいと評判のある洋食屋へ飛び込んで一杯やつてゐた。折悪しくそこへ今別れたばかりの貸主がやつて來て、他人から金を借りる分際で洋食など食べるのは贅澤だと責めた。すると、その男のいはく、「私は日頃金がないからとても洋食など喰べられん。今日たま〳〵金を手に入れたから喰べようとすると、それは成らぬと仰しやる。一體私は何時洋食を喰べたらいゝのです?」

相手は勿論その男が洋食を喰べることを咎めたのではない。たゞ人の恵みを受ける分際では美食する資格のないことを注意したまでである。それを知らない振りして、わざと洋食を喰ふ方面ばかり强調したところに、この男の圖迂々々しさがある。が、前の先生の如く、大びらに自分の無恥を曝け出してゐない所に、いさゝか相違があるといへばいはれる。そして、そこが詭辯の詭辯たる所以でもある。

圖迂々々しさの伴ふ可笑しみ、つまり詭辯が滑稽になるためには、相手がそれを許さなければならない。相手が許さなければ喧嘩になるばかりだ。が、こゝにもう一つ最初から相手の許してゐる滑稽がある。それは愚鈍、もしくは間の抜けたところから生ずる可笑しみで、例へば、落語家がよくやる、あの酒の粕を喰べて醉拂つた與太郎の話のやうなものである。

下

與太郎が酒の粕を喰べて醉拂つてゐた。或人がそれを見て、「與太郎、景氣がいゝな、どこで酒を御馳走になつた？」と訊くと、「うゝむ、さうぢやない、酒の粕を三枚貰つて喰つたんだ。」「馬鹿、酒の粕だなんて、人聞きの惡いことをいふな。今度他人に訊かれたら酒の三合も飲んだといつとけ」と敎へられた。で、次の人に會つた時、「與太郎、豐日中赤い顏をして酒の粕でも舐めたか。」「違ふ、お酒を呑んだんでえ。」「お酒を呑んだ、そいつは豪儀だな。いくら飲んだ？」「うむ、三枚飲んだ。」これは落語家が高座でよくやる話の枕だが、勿論與太郎の愚鈍から生ずる滑稽だから、前の圖迂々々しさとは違つて、相手を許すも許さぬもない、むしろ可愛らしい位のものだ。

次に愚鈍とまでは行かないまでも、間の抜けたところから生ずる滑稽がある。健忘性から出た失策の多くはそれだ。私の知つてゐる男が偕樂園で友人と會食して、一番しまひに支那の饅頭が出た時、その一つを頰張りながら、その小皿の色合ひが氣に入つたのか、手に持つて、頻りにひねくり廻してゐた。すると、友人達が側から、

「そんなに氣に入つたら、その儘持つて歸つたら好からう。なに、かういふ所ぢや、盃なぞ持つて歸られるのを却つて喜んでるものだよ」と嗾しかけた。「ぢや、さうするかな」と、その男もその氣になつたものか、殘つた一つの饅頭と一緒にくる〳〵と半巾に包んで卓の下へ入れて置いた。それから一時間餘りも雜談を交した後、いざお立ちとなつて、一同どやどやと玄關へ出て一町餘りも歩いて來た。その時例の男は「やあ、しまつた！」とばかり舗道の上に立ち留つた。「何うした〳〵？」「うむ、折角包んで置いた皿を卓の下に忘れて來た。」「いゝぢやないか、そこが君の善良なところだ。泥棒をしつけない奴が、たまに泥棒なぞしようとするからだよ。」「いや、それだけならいゝが、あの半巾は一度洗濯にやつたもので、俺の姓が赤い絲で縫取りしてあるんだ。」それを聞いて、一同「わーッ！」と歡聲を上げた。こんなのは、當人に泥棒する意志はあつても、泥棒するだけの用意の周到さ、つまり泥棒の資格を缺いてゐたのだから憎めない。

最後にこれは間が抜けたといふよりも性格の鷹揚さを示すものだが、最近の例だから揭

げることにする。七月の下旬、私は學長のお供をして、山口縣の宇部市まで法政大學の宣傳講演に出掛けた。その往きの汽車の中の出來事である。德山の驛へ着いたとき、一人の參謀章を附けた大尉がつか〳〵と車内へ這入つて來て、いきなり私達の向ふに座席を拵へた。つゞいて一人のべた金の將官が佩劍をがちやつかせながら這入つて來たが、學長の顏を見ると「秋山さんぢやありませんか」とばかり、そこに立ち止つて、軍人らしく擧手の禮をした。肩章に二つの星がある。こゝら邊で陸軍中將といへば、廣島の師團長のほかあるまいと思ひながら、側にゐた私はぼんやり樣子を見守つてゐた。すると、秋山學長は怪訝さうに片手を上げて相手を見返しながら「何誰ぢやつたかな、わしや知らんが……」といひ出した。「官房にゐた二宮です」といひながら、將軍は帽子を脱いで、學長の前に腰を卸した。「あゝ、さうぢやつたけんのう」と、秋山學長ははじめて分つたやうな顏をして、それから二人で急に話し出した。將軍は三田尻で下車した。その後で隨行の關マネージャーが學長を捕へて、「學長は學校の宣傳に來られたんぢやないか。それならそのやうに、その

土地へ來ては、知らない人に會つても知つてゐるやうな顏をするもんですよ」と、ぼん〳〵攻擊した。學長はほんたうに惡いことでもしたやうに默つて俯向いてゐられたが、私が見兼ねて、「なに、あれでいゝんだ。あれでこそ秋山先生ぢや」と辯護して上げると、初めて顏を上げて、「そりや本當に知らんのぢやけんのう。わしが陸軍省の顧問をしてゐた時分は、向ふはまだ大尉位ぢやつたで覺えとるはずがない。帽子を脱いだら額に痣があつたので、はじめてそれと分つた。ふゝゝ。」

これだけの話である。これは秋山學長の平常を知らぬ人にはさのみ面白くあるまい。滑稽がどうかすると樂屋落ちになりたがる所以である。が、洒落と樂屋落ちとの關係についてはまた他日を期することにしたい。

舞臺の上の反語

野球々々と騒ぎますが、一體野球のどこが面白い、たかが單なる球はふりではありませんか。處が、この球はふり中々面白い。ぢや何故面白い？　これも一つのゲームで、どつちが勝つか負けるか分らないからで御座います。どつちが勝つか負けるか分らないといふサスペンスの狀態――不安の狀態から、そこに一種の緊張味を生じて、見物は片唾を呑んで見てゐる。つまりこの緊張味を味はふために、何萬といふ大衆が神宮球場へ押掛けるのでございます。その證據に今度來朝したアメリカ軍との戰ひのやうに、兩軍のスコアの差が著しく、到底相手の得點を奪ひ返すことが出來ないと極つてしまふと、試合は最初からダレて、一向面白くないものになつてしまひます。これに反して、一點位の差で九回の表まで押して行つて、この裏で慶應の得點がなかつたら法政の勝ちになる、一點入れゝば延

長戰になつて、いよ〳〵どつちが勝つか分らない、二點入れゝば慶應が勝ちだと云ふやうな接戰になりますと、そこに息詰るやうな緊張味を生じて、見物はたゞもう醉へるが如く、眼ばかりになつて、投手の指を離れる一球一球を見守るのでございます。まあ云つて見れば、野球の見物は求めて不安と焦燥の感を味はひに行くやうなものだとも申されませう。

この自ら求めて不安と焦燥の感を味ひに行く點は、芝居の見物も野球の見物と同樣でございます。折角のお化粧を豪なしにして、わざ〳〵木戸錢を拂つて貰ひ泣きに行く。これがお芝居の見物衆の常套で、昔も今も變りはありませぬ。處で、野球にひゐきのティームがないと面白くないやうに、芝居にも最眞がないと面白くない。尤も、ひゐきと申しましても、こゝでは最眞役者のことを云ふのでございません、最眞の役柄、例へば「忠臣藏」の勘平とか、シェークスピヤのハムレットとかを云ふのでございます。この最眞の役柄といふものは、どんな初めて見る芝居でもすぐ出來ますもので、默阿彌物の泥棒芝居なぞを見てゐましても、見てゐる間は、あゝ、今にあの辨天小僧や松島仙太が捕まりやアしないか

と、良家の子女が、あられもない、泥坊を最員にして、はら〳〵しながら見物する位のものでございます。況してやその外の所謂二枚目ドコの役柄、例へば前申上げましたやうな「忠臣蔵」の勘平とかハムレットとかになりますと、こいつは何うしても最員にせずにはゐられない。その最員の役柄と一喜一憂を共にして、はら〳〵しながら見物する所に野球と同じやうな、或ひは野球以上に複雑な緊張味を生ずる——これがお芝居の何時迄たつても面白い所でございます。但し野球の面白いのは、どつちが勝つか負けるか分らないといふ、つまり結果の分らない處から緊張して來ますが、お芝居の方は結果が分つてゐるために却て緊張する、結果が分らないと一向緊張を感じないと云ふやうなことが往々にしてございます。勿論、結果が分らないために緊張する場合もございます。が、舞臺に並んでゐる役者には結果が分らなくとも、少なくとも見物にだけは結果の豫め分つてゐる方が緊張味を起させ易い。これは實例を申上げますと、何でもないことで、例へば或勤王の士が暗討に逢ふとする。すると、先づ覆面をした新選組の侍が五六人ばた〳〵と舞臺へ駈け出

して來て、何やらしめし合せながら、拔足差足藪蔭へ隱れる。そこへ當の勤王の士が何にも知らずにほろ醉ひ機嫌で、謠でも唄ひながら花道から舞臺へ差しかゝる。見物は、や、今にやられるぞと片唾を呑んで見てゐるうちに、案の定闇の中から白刃が閃くから緊張する。これが前に覆面の士を出さないで、いきなり闇の中から躍り出して通りかゝつた勤王の士に斬りつけたとしますれば、——事實はその方が寫實で、自分達が隱れる所を見物に見られるやうぢや暗討にも何にもなりませんが、——それでは見物に片唾を呑ませるわけには行かないから、芝居にはならない。もう一つ例を擧げますれば、妹を伴れた敵討の侍が峠の茶屋か何かに休んでゐます。兄は前の宿場に忘れ物でもして來て、妹をそこに置いたまゝ、遽てゝ元來た道へ取つて返す。そこへ敵の片割が出て來て、妹に顏を見知られぬを幸ひ、巧い事を云つて相手を誘拐しようとする。この場合見物を緊張させるためには、豫めそれが敵の片割れであることを明白に知つて置いて貰はなければならない。それを知つてゐればこそ、妹には親切な言葉だとしか思はれないことでも、見物には、なに、あん

な事云つて瞞してやがるんだと、ちやんと結果の見透しが附いて不安を感ずる。その不安から緊張が生れるのでございます。かうして舞臺の役者には親切な方だとしか思はれない言葉でも、見物には誘拐と解釋されると云つたやうに、同じ言葉が二重の意味に解釋されることを稱して、舞臺上の反語 theatrical irony と申します。本來反語と申しますものは、一つのことを云つてそれとは全然反對のことを意味するもの、例へばお前は悧巧だよと云つて、その實馬鹿だよを意味するものでございますから、舞臺上の反語も一種のアイロニイには相違ないので御座います。

處で、何うしてこのやうな舞臺上の反語といふやうなものが出來るかと申しますと、それは芝居では舞臺の上に展開される世界と、見物席の世界と、丸で違つた二つの世界が存在してゐるからで御座います。見物席の世界は昭和六年の日本の東京の世界であつても、舞臺の世界は元祿十四年の江戸の世界でもあり得る、紀元前何百年のローマの世界でもあり得る。さう云ふことは野球にはございません。スタンドの見物席の世界も、試合の行は

れるフイールドの世界も同じ昭和六年度の東京の世界でございます。世界が同じであればこそ、見物席に應援團といふやうなものが頑張つてゐて、盛んに選手を應援したり激勵したりいたします。あんな事は芝居にはございません。强ひて見物席から應援なぞすれば、舞臺の芝居はメチヤ〳〵に壞れてしまふだけでございます。勿論、時には見物席から高島屋！とか、播磨屋！とかいふやうな聲も懸りますが、あれは自分と同じ時代に生きてゐる俳優市川左團次乃至中村吉右衞門を褒めてゐるので、決して舞臺の上の由良之助だの定九郎だのを褒めてゐるわけでは御座いません。いや、どうも甚だ分り切つたことばかり申上げるやうで、恐縮でございますが、兎に角芝居の見物といふものは、薄暗い座席に腰掛けて、さま〳〵な照明に映し出された世界、自分達の住んでゐる世界とは時代に於ても場所に於ても遙かに懸け離れた世界を覗いてゐるので、舞臺で云はれる白の一語々々が、舞臺に並んでゐる役者同志の間に通ずるとは別の意味に聞き取られる、時には全然反對の意味にも聞き取られるのでございます。それなればこそ、舞臺の役者が瞞されたり、うまう

まと係蹄に懸けられるやうな場合にも、見物は決してそんな係蹄に懸らないばかりでなく、ちやんとその裏を見透してゐて、何にも知らぬ舞臺の役者が身に振りかゝる難儀があるとも知らないでゐる間に、その結果を豫想して氣を揉んだり、反對の場合には喜んだりしながら、始終緊張して見てゐるもので御座います。

しかし見物がちやんとその裏を見透してゐると申しましても、神樣ぢやないから、それにはそのやうに、脚本の作者が豫めその裏を見透すことの出來るやうに脚本を仕組んで置いてくれないと、いくら見物と雖も、そんな魔法使ひのやうな眞似が出來るものではございません。それに芝居といふものは始終目先の變つて行くものですから、小說の讀者のやうに後を振返つて讀み直して見たり、考へて見たりしてゐる暇はございません。その場で立ち所にその裏を見拔いて結果が豫想されるやうに出來てゐないと困ります。こゝが小說の作者と脚本の作者と心得の違ふ所で、小說の作者は讀者を向うへ廻して、讀者に對した心持で書きつゞけますが、脚本の作者はそれではいけない。絕えず見物を自分の側へ引附

けて置いて、舞臺の役者だけを向うへ廻して書くやうにいたします。で、舞臺の役者には分らなくとも、見物にだけはちやんとその裏面の分るやうにして置く心得が肝要でございます。よく話の落ちが分つては話は面白くない、小說もその通りで、最初から結果が分つてしまつてゐては面白くないと云ひます。一概にさうとも申されませんが、探偵小說などは正にその通りで、初めから犯人は誰と讀者に目星が附くやうでは探偵小說にはなりません。芝居はこの探偵小說のウラを行くものだと思つて頂けば宜しい。

もう一度忠臣藏の勘平腹切りの場を例に引かせて貰ひますが、御承知の通り忠臣藏には名高い切腹の場が二つございます。一つは判官樣の切腹の場で、一つは勘平腹切りの場であります。判官樣の切腹は、こりやもうお上のお仕置でどうにも仕方がない。いかにもお氣の毒ではありますが、しかし見物にはら〳〵させるやうな不安と緊張味は感じさせません。あの場で見物をはら〳〵させるものがあるとしますれば、それは判官樣の息のあるうちに、城代大星由良之助の上京が間に合ふかどうかでございます。こいつは舞臺の役者に

分つてゐないと同じやうに見物にも分つてゐません。いや、俺には分つてゐると仰しやる方があるかも知れませんが、それは何度もあの芝居を御覽になつたから分つてゐるので、始めて見たら誰にも分る筈がありません。分らないながらに、見物は判官樣の胸中を汲んで大いに緊張します。だから、私は前にも見物に結果が分らないで緊張する場合もあると申して置きました。これはその一例でございます。が、それに反して、六段目勘平腹切りの場では、勘平は寃罪だ、寃罪で腹を切れば後で後悔しても追着かぬぞといふことが、五段目を見た見物にはちやんと分つてゐます。私に云はせれば、五段目はたゞ六段目の底を割るために、見物に裏面の事實を握らせるために、わざ〳〵作者が設けた場面としか思はれません。五段目そのものは何の變哲もない、たゞ追剝が出たり、猪子と間違へてその追剝を鐵砲で打ち殺したり、芝居としては一向面白くないものでございます。故人名優仲助が定九郎の一役を振られて、大いに不平だつたといふ名高い逸話もございますが、仲助が不平であつたのも無理はございません。その仲助が仕生かした定九郎の役と申しますのも、

たゞ身を持ち崩した御家人風の百日かづら、七つ下りになつた黒羽二重の小袖に白博多の帶ですか、細身の兩刀を落し差しにした、足も腕も眞白に塗つた男が、破れた蛇の目の傘をつぼめて差したまゝ、とつとつとつと花道から駈け出して來て、舞臺の眞中の稻村の前まで來ると、傘のしづくを切つて、正面を向いて一つ見得をしたまゝ、何にも云はずに稻村の蔭へ隱れます。その後へ與一兵衞が小田原提灯を下げてとぼ〳〵遣つて來て、丁度定九郎の隱れた前に腰を掛けて、默つてりやいゝのに、「娘を賣つた五十兩　この金が婿の出世の緒口、早く婿殿や嫁アに見せて喜ばせたい。あら有難や〳〵」なぞと餘計なことを云ふものですから、定九郎のために背後から芋刺しにされて、大切の金を奪はれてしまひます。今度は定九郎の番で、折角與一兵衞から金を奪つたはいゝが、財布の中へ手を突込んで勘定しながら、にやりと笑つて、「五十兩！」と云つたが最後、その途端にズドンと來た勘平の猪子打つ二の丸にかゝつて、これも敢ない最期を遂げます。定九郎の仕所としては、この血反吐を吐いて死ぬ、むごたらしい死にさまが、目先が變つてゐて面白いと云ふのでせ

うが、たゞそれだけのことで、何の變哲もない役柄でございます。その後へ又勘平が火縄の火をたよりに、鐵砲の臺尻で探り〳〵出て來まして、定九郎の死骸につまづく。それから方々撫で廻して、懐中の財布に手がかゝると、「こりや人！」と吃驚して二歩三歩遁げにかゝりますが、花道の附根まで來ると又考へ直しますね。そして「天より吾に與ふる所」と、自分で自分に辯解しながら、今度は勘平が泥棒になつて、誰とも知らぬ旅人から五十兩の金を奪つてしまひます。勘平を泥棒と云つたんぢや承知しない方があるかも知れませんが、兎に角事實はさうです。要するに、この山崎街道の場は、五十兩の財布が三度人から人の手に轉ずるだけの場面で、脚本としては何の手柄もございません。併しこの五段目も五段目そのものとしては一向面白くないものですが、六段目の裏を豫め見物に呑み込ませて置くといふ意味で、無くてならぬ場になつてゐます。私ども見物はこの五段目があるために、舅與一兵衛を殺したものは、たとひ誤つて殺したにしても勘平ではない、正に定九郎だ。勘平は自分でもそれとは知らず、偶然ではあるが、舅の敵を討つたものだといふ

事實を敎へられます。この事實を知つてゐればこそ、六段目を見て、はら〳〵しながら緊張するのでございます。しかもさう云ふ事實を知るのは人から聞いた位ではいけない、人から聞いた事には間違ひといふこともある、少しでも疑ひがあるやうではもう駄目ですから、どうしても目の當り事實を見せて置かなければならない。昔の作者といふものは、そんなに深く考へたわけでもあるまいが、好くこの間のコツを呑み込んでゐて、西洋のドラマツルギイにも適ふやうに、ちやんと事實として五段目を見物の前に演じさせます。五段目がなければ、六段目の興味は全然空に歸すると云つても宜しい。今日では五段目をヌキにして六段目だけ出すこともないではありませんが、それは忠臣藏が芝居の獨蔘湯と云はれる位、どなたも先刻御承知の狂言であるから、そんな無理な事も出來ますので、もし始めて出されるものだとすれば、五段目なしでは六段目は斷じて芝居として成立たないのでございます。では五段目が勘平腹切の場に影響する上にどんな大きな力を持つてゐますか、一つ事實について檢べて御覽に入れませう。

六段目の幕が明きますと、姑とおかやと娘のお輕とが留守居をしながら、夫勘平親與一兵衛の歸りを待ち詫びてゐます。二人ともどこかしほ〳〵としてゐるのは、お輕が夫のために身を賣ると極つたからで、未だ與一兵衛が殺されたとはお輕もおかやも夢にも知らない、見物だけがそれを知つてゐます。だからお輕やおかやが、最初から可哀さうに見えます。いや、お輕やおかやが自分で考へてゐる以上に可哀相に思はれます。こゝが肝心な點でございます。處が、待つてゐる勘平も與一兵衛も歸らないで、待ちもせぬ一文字屋の內儀が女衒の善六をつれて、お輕の身柄を受取りに參ります。與一兵衛は未だ歸らないが、與一兵衛に渡した身代金の受取證文を持つて來てゐるから是非がない。せめて夫勘平の歸るまで待つてくれと賴んでも、金を渡せばこつちの身體だ。奉公人を遊ばせて置くわけに行かないと急き立てられるので、已むなくお輕が駕籠に乘せられて出て行く。花道の眞中で、折よく歸つて來た勘平にばつたり出喰はします。「勘平さんか」「そちやお輕ぢやないか」と云ふやうなわけで、御承知の駕籠の棒鼻を捕まへての押返しになります。で、一旦家

へ連れ戻つたものゝ、それから一文字屋の內儀の詰め開きになりますと、半金五十兩を受取つた判は親與一兵衛のものに相違ない。それだけなら宜しいが、內儀が確に金を渡した證據にといふので、與一兵衛は自分が今締めてゐるこの前垂と同じ切れで拵へた縞の財布に五十兩の金を入れて戻らしやつたと云ひ出します。聞いて勘平は思はずぎよつとする。こゝら邊りから見物の眼は舞臺へ吸ひ附けられたやうになつて、寸刻も離れなくなります。何故か。見物は既にその縞の財布の出所を知つてゐるからであります。

勘平はかう云ふ工合に片手に煙管を取上げて、おかややお輕に曝すやうにしながら、そつと懷から昨夜旅人から奪つた縞の財布を取り出して、一文字屋の內儀が外してそこに放り出した前垂れと比べて見ます。まがふ方なき同じ縞目！　勘平は見てゐるうちにわなわなと顫へ出して、煙管も取落せば、お輕の差出した湯呑みのお茶も引繰り返したまゝ、そこに壺せ返ります。見物はすつかり勘平のこの動顛した氣持ちに同感することが出來ます。それは前の幕で、勘平が誤つて人を殺したことを知つてゐるからでございます。しかも見

物は勘平が知つてゐる以上に知つてゐます。勘平は誤つて人を殺したといふ自覺から、財布の縞目を見比べて、直ちに自分が親與一兵衛を殺したものと速斷してしまひますが、見物の方ではさうぢやない、勘平が殺したのは定九郎で、定九郎こそ與一兵衛を殺したのだ、勘平は偶然ながら親の敵を討つたやうなものだ。いえ、やうなものぢやない、實際親の敵を討つたんだといふことを知つてゐればこそ、勘平がぎよつとしたのを見て、それに同情するばかりでなく、早く本當の事が敎へてやりたくなります。えゝ、そんなに氣を揉むことはない！お前が親殺しでないことは俺がちやんと見て知つてゐる——と敎へてやりたいが、何しろ脚光の向うと此方とでは世界が違つてゐるから、何うするわけにも行かない。あんまり勘平が愚圖々々してゐますので、お輕までが「勘平さん、お前わたしを遣るのか遣らぬものか、早う極めて下さんせいな」なぞとせつつきます。仕方がないから、勘平も「かうなれば、そちや行かさなるまい」と據なくお輕を出してやります。お輕が泣きの涙で一文字屋の内儀に連れられて行つて、それで一肩濟んだと思つてゐると、さうは行かな

い。入れ代つて、狩人仲間のめつぽう彌八以下三人が與一兵衛の死骸を釣込んで來ます。それを見ると、姑のおかやは前に勘平が懷から財布を出して見比べてゐる處をチラと横目に見て置いたから、溜りません。與一兵衛を殺したのは婿の勘平に相違ないと、淺薄な女心から一途に思ひ込んで、若い優男の頭髪の毛を掴んで引摺り廻します。引摺り廻されても、勘平は又勘平で、自分が誤つて舅を殺したと思ひ込んでゐるだけに、一言の申譯もなく、じつと怺へてゐる胸の中の苦しさ。見てゐる見物はもう氣が氣でありません、この婆ア何にも知らずにひどい事をしやがる、手前間違へて後で後悔するなと云つてやりたいが、これも前申したやうに、野球場でないから、聲援するわけにも、敎へてやる譯にも行きません。そこへまた折惡しく不破數右衛門、千崎彌五郎の兩士がやつて來て、おかやの口からこの場の一伍一什を聞取つた上、「舅を殺して奪つたやうなそんな汚れた志納金は受取れない、その方如き不義の士が一家中から出たとあつては、その方一人の恥辱でない、亡君御尊靈の御恥辱なりとは知らざるか」と鋭い言葉で詰つた上、「かゝる事に氣の附かぬ汝に

てもなかりしに、いかなる天魔の魅入りしぞや」と硬軟兩面から攻め立てられては、勘平たるもの最早絶對絶命、しばらく〳〵と、席を蹴立てゝ歸らうとする兩士を留めて置いて、申開きはこの通りと、ずぶりと脇差を腹へ突き立てる外に取るべき道はありません。あゝ早まつた事をしてくれたと見物の心は、こゝで昂奮と緊張の絶頂に達するのであります。

では、そんなに見物が昂奮する原因はどこにありませうか。云ふ迄もなく、それは前幕山崎街道の場で、話の底が割つてあるからであります。さうでなくて、もし見物も舞臺の役者と同じやうに、前後の事情を知らなかつたとすれば如何でございませう。どうせ侍女のお輕と乳くり合つて、お主のお供をしながら大事の場にも居合はさぬ程の男だもの、金に困れば舅殺し位しかねないかも知れない、天罰だ、腹が切りたけりや勝手に切るが好いと、上の空で見てゐて、後になつて千崎彌五郎と一緒に、「鐵砲傷には似たれども正しく刀で割りし傷」と、腹を切つてから漸く合點して、あゝ、さうだつたか、そいつあ氣の毒をした、勘平濟まなかつた、と氣が附くやうぢや、誠に興味索然たるもので、それぢや芝

居になりません。

以上、私は大體に於て、舞臺上の反語を理解する處から、見物が事件の裏を見抜いて、結果を豫想するために、見物の心に不安と緊張を來し、それが芝居の面白く見られる所以だといふことを說明しました。實例は皆樣が一樣に御存じのものでないと困りますから、手近な忠臣藏を取りましたが、必ずしも日本の舊劇に限つたわけではありません、ソフオクレスやユーリピデスの希臘悲劇から、シエークスピヤやイブセン劇、さては近頃の新しい劇にも一樣に當て嵌るものでございます。實を申しますと、舞臺上の反語といふやうなことは希臘劇に端を發して、二千餘年のテストを經たもので、私の新發明でも何でもない、私はたゞ多くの人が受賣りしたものを、最後にこゝで受賣りをさせていたゞいたに過ぎません。（昭和七年一月「古東多万」）

犬に鼻を舐めさせた話

舊臘十二月の十日に鴻の臺下の江戸川樓で一高時代の級友會を催した。集まるもの總計十一人、文科出身だけに、市內女學校の校長二人、中學校長一人、文士一人、無職一人、精神病の醫者一人、某富豪華族の家令一人、法科へ逃げた連中四人の中には、滿鐵の理事を罷めた男一人、遞信省の局長を罷めた男一人、民政黨の代議士一人、辯護士一人といつたやうな割合であつた。

變り種は何といつても、姉崎博士の下に宗教學を卒業以來、毎日本は讀んでるが、著書一冊出すでなく、子供を作つた外にアルバイトは一つもない、五十歳になるまで一度何やらして金十圓を謝禮に貰つたことがあるだけ、自分で働いて金を儲けたことは嘗てない、一時は死んだといふ噂も立つた男。尤も、こんなのは餘程家に金でもなくちや眞似の出來

ない藝當だ。どうれで新潟縣の大地主である。

他に變態心理に興味を持つた揚句、四十過ぎてから改めて醫者になつた男が一人ある。この男何でも精神病にしたがる癖があるが、面白いことには、級友の中に正眞正銘のそれが一二ある上に、誰もそれに近い、これもそれに近いといはれると、どうもさうでないといふ證據が擧げられなくなるから不思議だ。一つはその時分文科へでも這入つて來ようといふ連中はいくらか狂人じみた所を先天的に持つてゐたらしい。

いろ〳〵話しが出た末に、一昨年あたり一寸警視總監になつたが、毎日の擧動が變だといふので、すぐに罷めさせられた男の噂が出た。この男は同級生ではないが、年度が同じだけに、私なぞも多少知つてゐる。精神病の醫者になつた男は、あれは何うしても瞞徹毒だ。今のうちにマラリヤ療法をしたらと、頻りに惜しがつてゐた。すると、滿鐵の理事を罷めて來た男は「さうかい、しかしあの男の擧動が變つてゐるのは、昔からだぜ」と云ひ出した。

その話によると、かれは一日滿鐵氏の宅を訪ねて來た。滿鐵氏は學生時代から犬が好きで、折々殘飯なぞくれてやるものだから、近所の犬が始終四五疋も集まつてゐた。それを見ると、總監氏はいきなり總監氏が訪ねて來た時も、やつぱり庭先に集まつてゐた。未來の緣先に兩手を突いて、つんと頭を前へ突き出しながら、集まつて來た犬どもに、鼻やら唇やら額やらをべろ〳〵舐めさせてゐた。尤も、警視總監が舐めさせたわけではない、學生時代の彼氏が舐めさせたのである。「が、いくら學生でも、又いくら犬が好きだからといつて、初めて來た家で、いきなりそんな眞似をして見せるなんて一寸變つてるぢやないか」と、滿鐵氏は結論を下した。

正に變つてゐる。これには流石の精神病學者も閉口して、「そいつはどうも困つたね」と頭を掻いてゐたが、「しかし某君としちや、そんな癖がある位なら、初めから法科なぞをやつて官吏になつたのが間違ひだよ。あれが文士にでもなつてゐて見ろ、天才の奇癖として、却つて大いに持て囃されたから」と出直したので、いづれも一緒になつて笑つてしまつた。

だが、何故「犬に鼻を舐めさせる癖」が文士には許されるが、警視總監には許されないか、そこが問題である。いや、問題でも何でもない、分り切つてらあな。だつて、警視總監は社會の公人でえらい人だが、文士なんて社會上の地位が極めて低いんだもの。さういへば、成程その通りだ。現代において自分のいひたいことを饒舌つたり、自分の感情の赴くがまゝに行動することを許されるのは、平生何處にゐるかともいはれないやうな、吾々下層階級の者に限る。少しでも人から注目されるやうな地位に立てば、もうそんな自由は與へられない。警視總監は警視總監として社會の要求するやうな態度を取つて、口でいふことは勿論、進退座臥、總べてそれに適はせなければ、忽ち失脚する。つまり自分を殺して個性を沒却するにあらざれば、現代の社會で出世することはまづ〳〵難かしいといふ結論になる。だから御覽なさい、現在公人として社會の上層に立つてゐる連中は、一人殘らずといつていゝ位、悧巧には隨分悧巧に出來上がつた、小人物ばかり揃つてゐるから。

藤沼現警視總監は私どもより二三年後の卒業生である。私の友人が私用で面會した時、

左翼を彈壓するのもいゝが、あんまり遣り過ぎて、かれ等の間に多くの英雄（ヒーロー）や殉教者（マーティアー）を作つたら、邦家の前途のために却つて寒心すべき結果になりはせぬか。基督教が歐羅巴を征服したのも、その昔羅馬の大圓劇場（コロセウム）で多くの殉教者を作つたのが原因だからねといふやうな意味のことを話して見た。すると、總監は「そんな事僕なぞの自由になるものか。一體君等は警視總監を何と思つてゐるか知らんが、他人に五遍頭を下げさせる間には、九十五遍位こちらで下げて廻つてゐるよ。君なんぞにや一日だつて勤まりやしないから」と答へて、笑つてしまはれたさうな。傳聞だから、私も事の實否は保證しない。しかし何だか警視總監の口から出さうな述懐だと思ふから、たゞ噂話としてこゝに掲げて置く。

（昭和八年一月「東京日日新聞」）

師弟の情誼

漱石先生の他界以來、私はあまりにしば〳〵先生について語り過ぎた——それも不用意に、思ひ着くがまゝに。省みて、何だか故人の靈を瀆してゐるやうな氣がしないでもない。もう止さう〳〵と思ひながら、今度も亦引請けてしまつた。何時も不用意に書くから、又その次ぎにも書きたくなるらしい。それでは際限がない。しかし先生は不用意といふことはあまり嫌ひでもなかつた——たくまず、飾らないといふ意味での不用意は。で、今度も亦不用意に書く。

舊臘九日の夜、故先生の法會が濟んだ後、私は鈴木三重吉君に導かれて、小宮豐隆君と共に或家に集まつた。私は雙鬢既に白く、小宮は半白、三重吉は白くはならない代りに大分天上が薄くなつた。三人共に顏を見合せて、悵然たるものがあつた。しばらくして、「兎

に角、われ〳〵は夏目漱石と同時代に生れ合せて、或期間直接先生を知り、先生と膝を交へて語ることが出來た。それだけは幸福であつたね」と、私は云ひ出して見た。

二人とも言葉なくして點頭いた。

「今になつて思ふと、僕は先生の生前」と、私は圖に乗つて語りつゞけた、「何を書くにも今度は一つ先生を感服させてやりたいといふやうな氣が附き纏つた——」

「そりや君はさうぢやつた」と、三重吉はすぐに口を挾んだ、「何ぞと云ふと、ドストエーフスキなぞ振り廻しやがつて……だが、おれ達にはそんな氣はなかつた。おれ達はもつと純な氣持ちで——」

「まあ待つてくれ」と、私も相手を留めた、「僕は今懺悔をしてるんだ。で、僕にはさう云つたやうな、いはゞおぼけなき氣持ちがなかつたとは云はれない。しかしこの頃はさうぢやない。今にして先生在さば、僕はたゞ先生に卑しまれたくない。この頃はたゞさう思つて書くやうにしてゐる。」

先生に感服させてやりたい！　私としては、これはやゝ露悪主義の言葉である。弟子として、たゞ先生に認めて貰ひたかつたのだ。私はたゞ認めて貰ひたさに先生に接近した。これも不純と云へば確に不純な感情である。が、私はもと〳〵一本立ちの出來ない「永遠の弟子」であつた。先生が亡くなられた時、私が一ばんまごついたのは、「今より後おれは一體誰を宛てに、誰に認めて貰はうと思つて書くのだ？」といふことであつた。當時私は既に三十六歳であつたのである。現今の文壇の士なぞと比べたら、全く幼稚なものだと云はなければならない。

が、齢知命を越ゆるに及んで、初めて「先生に卑しまれたくない」といふ氣持ちだけになつた。私としては一つの進歩である。

長谷川如是閑氏は新聞記者として、先生の同僚の一人であるばかりでなく、又先生の知己の一人でもあつた。頃日氏と同席した時、私は氏に向つて、

「あなたの許へは若い人達が集つて來るでせうが、漱石先生の許へ集つた連中の持つてゐ

たやうな氣持ちが、今の若い連中に多少でも殘つてゐるでせうかね」と訊いて見た。

氏はから〳〵と笑つて、

「そりや君、あの時分だつてあれは特別だよ。あんな師弟の關係は昔だつてありやしない」と、再びから〳〵と笑ひつゞけられた。

あの時分だつてない！　何でもないことながら、私は一寸面喰つた。あんな師弟の情誼は昔だつてありやしない！　實際、その通りかも知れない。私どもはたゞ自分達の顏を知らずにゐたばかりである。

如是閑氏の云はれるやうに、それが時代錯誤の現象であつたにせよ、又は舊時代の名殘りであつたにせよ、兎に角さういふ師弟の關係があつたとして、一體さういふ師弟の情誼は何處から生れたのか。勿論、故先生の人格の然らしむる所であつたのは云ふ迄もない。が、先生一人では師弟の關係は生じない。そこには又さういふ弟子があつたのである。

その點から見て、何時か吉村冬彥氏が何かに書いてゐられた話を面白いと思ふ。それに

據ると、先生が洋行から歸つて來られた時、吉村さんは先生を停車場に迎へてから、早速又先生の奥さんの實家に先生を訪ねて行かれた。時分時になつてお壽司が出たが、しばらくそれを突つついてゐるうちに、先生は思はず笑ひ出された。いはく、「先刻から見てゐると、君は壽司を喰ふにも僕の眞似ばかりしてゐるぢやないか。僕が海苔卷を取ると、君も海苔卷を取る、僕が卵燒きを喰ふと、君も卵燒きを喰ふ……」云々。どうも自分ではそんな氣もなかつたが、不知不識のうちに、矢つ張り先生の眞似をしてゐたものと見えると、吉村氏自身述懷してゐられる。氏はその當時熊本の高等學校から上つて來たばかりの田舍者(?)であつた。弟子の眞似に氣の附いた先生は勿論江戸つ子である。だから、江戸つ子が田舍者の缺點を目附けた滑稽な話としてしまへば、それ迄だが、その裏に何と言葉には云ひ表はせない師弟の情誼が溢れてゐることよ。師は普通なら弟子の極りの惡がるやうなことを平氣で云つてのける。が、その實師はそんな事まで自分の眞似をされたことが嬉しいのである、有難いのである。自分の嬉しく感じたこと、有難く感じたことを發表する

のに、却て相手が極りを悪がるやうなことを以てするのは、江戸つ子の悪い癖だと云へば云ふやうなものゝ、何だかそこに情人同志の痴話（私の誇張を許せ、誇張なしには何一つ云ふことの出來ない私だから、）とでも云ひたいものがあるやうな氣がして、私どもは健養の情に堪へない。

要するに、先生は寂しかつたのだ。洋行から歸つて、久し振りに妻子の顏を見て、尙且かうして他人に求めないではゐられない程先生は寂しかつたのだ。

私が兩三度目に本郷區千駄木町五十六番地にあつた先生のお宅へ上つた時、後から吉村さんが遣つて來られた。この前にも吉村さんが來合せてゐられたが、又今度もか。よく來るんだな！　それに先生ばかりでなく、お家の方々とも懇意のやうだと、一寸羨望の目を輝かしながら、私はそばで先生と吉村さんとの話しを聞いてゐた。話しの內容はすつかり忘れたが、別に大した話題でもなかつたらしい。そして、話しが途切れると、二人とも默つてゐられる。默つてゐても、別段窮屈ではないらしい。私がそばにゐることなど、二人

とも忘れたやうだ。私はもぢ〳〵しながら、先生と吉村さんの顏を等分に見較べてゐた。吉村さんは黑い蝶結びのネキタイを掛けてゐられた。今のやうに手で結ぶタイでなく、初めから結んだもので、兩端を項（うなじ）の邊で引掛けて、前はカラのボタンで留めるやうになつてゐるのだ。それがそのボタンを外れて、見る〳〵顎の下まで上がつて行く。吉村さんは氣にしてそれを下げられるが、又外れて上つて行く。又下げる、又上がる。何遍でも同じ事を繰り返すのだ。私は可笑しくなつたが、先生が同じやうに見てゐて笑はないから、私も遠慮して笑はなかつた。たゞ吉村さんの頸が圖拔けて長いのに氣が附いた。そのうちに奧さんが茶菓を持つて出て來られた。私は奧さんとは初對面だ。しかし先生の奧さんにしては年が若過ぎるやうに思つた。で、吉村さんの挨拶のしやうを見てゐて、自分もそのつもりで挨拶しようと思つた。處が、吉村さんは自分の前へ菓子皿を出されても、その長い首を一つ前後に搖振（ゆすぶ）つたばかりで、振り返りもせずに、先生と話しをつゞけて行く。私がまごまごしてゐるうちに、奧さんは引込んでしまはれた。その時の印象は、私が下宿へ戻つ

て即日先生へ宛て、書いた手紙に對して、先生から貰つた返事が殘つてゐるから間違ひはない。たゞ吉村さんの前齒が、「猫」の中の寒月先生のやうに、その時も一本缺けてゐたかどうか。缺けてゐるのは何度も見たやうに思ふが、その時見たかどうかははつきりしない。

私は何のためにこんな印象を書いたか。その時の私の氣持ちは全然私の主觀だから他人に通じようとは思はない。しかし、私はたゞ、もし故先生とその弟子との間に他に見られないやうな、特別の情誼があつたとすれば、その俑蛹を作つたものは吉村さんである。他は小宮、鈴木、野上、それから私にしても、皆それに倣つたものに外ならないと、たゞこれだけの事が云ひたかつたのだ。

「猫」の中にあらはれるのは、弟子としては寒月先生以前寧ろ苦沙彌先生のお友達だと云つた方がいゝ。もし先生の作品中に、先生の弟子に對する氣持ちの窺はれるものはと訊かれたら、やはり「三四郎」だと答へる外あるまい。三四郎の故郷福岡縣京都郡犀川村は小宮の故郷をそのまゝ取つたものである。しかし熊本の五高を出て、ぽつと出の田舍者として上京するあたりは、寧ろ吉村さんである。三重吉はあの中の與次郎に擬せられることを大層いやがるが、さりとて與次郎をすつかり三重吉から取上げて、あれは死んだ高須賀淳平だと云つてしまつたら、三重吉は寂しかろ。廣田先生の引越しを手傳つて、猫を籠へ入れて持つて行く途中小便をかけられるなど、三重吉として逃れられない證據もある。私自身も引越しの前に家探しのお供をして、石の門のある家を推薦して先生から叱られた。「新しい男爵のやうでいゝぢやないですか」は、その當時日清戰爭後で、旅團長が皆新しい男爵になつたからである。この點だけでは、私も三四郎と與次郎の中へ喰ひ入つてゐると云つていゝ。

が、私が本當に先生に書かれたやうな氣のするのは、寧ろ「野分」の中の高柳である。先生と私との關係は、廣田先生と三四郎や與次郎といふよりも、寧ろ道也先生と高柳君とに近かつた。それだけ暗いものがあつた。何日であつたか、先生は夕方晩く丸山福山町の私の下宿してゐる家の玄關に立たれた。そして、「これから飯を喰ひに行くが、君も一緒に

行かんか」と誘はれた。私は二言と云はずに應諾した。先生はその頃本郷にたつた一軒あつた洋食屋の眞砂亭に私を連れて行かれた。そこで御馳走になつて、それから切通しの坂を降りて、池の端を一周りして、彌生町から大學と一高との間へ出て來るまでの間に、私は妙に感傷的になつて、自分の一身上の事情を遂一先生に打明けた。私は今それを想ひ出しても顔が赧らむやうな氣がする。恩に狎れる——先生の方ではそんな打明け話までされようとは期待してゐられなかつたに違ひない。さう思ふと、實際今でも口を捩ぢ千斷りたいやうな氣がして、たまらない。が、先生は始終無言のまゝ默つて聞いてくれられた。默つて、辛抱强く！　私は先生のあの時の無言を感謝する——無言の同情を！

私は西片町のS字坂の上までお供をして、そこで先生と別れた——二人ながら何にも云はずに！　私はその時初めて無言の有難いことをしみ〴〵體驗した。

千駄木から西片町、間もなく早稲田へと、先生はだん〳〵居を移された。それと共に、先生は東京朝日新聞社に入つて、純然たる作家として立たれるやうになつた。私どもは木

曜日の夕方になると、極つて先生の書齋に參集した。定連の外に、珍らしい客の一人二人あることもあれば、ないこともある。話題は——どうもその時分弟子連があまり書かなくて、先生一人脂が乘つて、「虞美人草」「坑夫」「夢十夜」「三四郎」……と次ぎ〳〵に書いて行かれたのは汗顔の到りだ——で、話題はおのづと先生の作品に對する弟子どもの無遠慮な批評が多きを占めるやうになつた。先生もなか〳〵それに屈しないで、若い者と一緒になつて渡り合はれたが、たまには屑よく胄を脱がれることもあつた。その蟠まりのない對話が私どもには何とも云はれない程嬉しかつた。三重吉が籠に入れた文鳥を持つて來て、强ひて先生に飼はせるやうにしたのも、その頃のことであつた。で、そんな他愛もない雜談に夜を更かして、いざと一同が立ち上る時は、夜も十二時過ぎ、大抵は一時を打つてからであつた。未だ市電が今のやうに普及しない時分のこととて、それから四人連れで本郷まで歩いて歸る。傳通院前を脱けて、小石川初音町の溝のそばまで來ると、橋の袂に毎晩一軒のおでん屋が出てゐた。寒いからそこへ寄つて、又一しきり先生の噂や馬鹿げた話し

に市が榮える。野上君なぞは、染井の墓地の近くの植木屋に住んでゐたから、自宅へ着くと大抵鷄が鳴いて夜が明けたさうな。

私は前に先生と自由に話しをされる吉村さんを羨ましいと思つたやうに書いたが、もうこの時分にはそんな氣はお互に微塵もなかつた。そして、めい〳〵先生は自分のものだと思つてゐた。少なくとも、自分達共同のものだと思つてゐた。家族の方々の先生ではなくして、弟子どもの先生！　これは實にいはれのない話である。が、さういふ氣持ちが弟子どもの間にあつたことだけは事實だ。私どもは決して先生の家族を無視したわけではない。それ處か、人によつて程度の差こそあれ、家族の方々に對してはそれ〴〵親愛の情を抱いてゐた。それにも拘らず、先生はやつぱり自分達のものだといふ氣がしてゐた。そして、こんな氣持ちは一方だけで抱けるものでない。先生にも責任がある――とは云はないにしても、先生の方にもそれを許して置かれたやうな形跡がありはせぬか。

その當時私どもにはよく分らなかつたけれども、兎に角先生は家庭的に寂しい人であつ

た――と、私はたゞこれだけのことが云ひたいのだ。家庭的に寂しい人であつた、だから弟子どもがそんな氣持ちを抱くことも默つて許して置かれた。そして、それなればこそ、長谷川如是閑氏から「昔だつてありやしないよ」と云はれるやうな、師弟の情誼が生じたのではあるまいか。

與へられた枚數も殘り少なになつた。私は少し先を急いで端折らなければならない。

私どもの仲間にH君といふ宗教科出の男があつた。獨逸語がよく出來たが、よく出來る以上に自信の方が强かつた。馬面で反齒で、色が眞黑で、眼がぎよろりとして、男振りには何一つ取柄がなかつたが、それでゐて自分では菅原道眞の子孫だと稱してゐた。そして、着てゐた黑木綿の羽織の定紋を見せた。見せられた者は大概その梅鉢の紋所とH君の顏とをそつと見比べるのを常とした。H君は又相手が默つてゐるのを見ると、自分の言葉を疑はれたやうに侮辱を感じて、滔々とその由緒正しい系圖を述べ立てるのを常とした。なに、こちらはH君の系圖を疑つたわけではない、たゞ道眞公からH君に到る數十代の間に起つ

た顔面の變化に、かうもなるものかと、たゞ憫れて見てゐるだけである。

たしか先生が胃腸病院か、或ひは大阪の湯河病院かに入院中であつたと思ふ。家族の方方がどこかへ避寒に行かれた留守中、H君は獨身者のこととて先生の家の留守番に頼まれて行つたことがあつた。書棚の本は何を引出して讀んでもいゝといふ特權を與へられたので、H君は大喜びで先生の書齋に陣取つた。そして、その時分のことだから瓦斯煖爐の珍らしさに、汗をだく〳〵流しながら、朝から晩まで、起きるから寢るまで焚きつゞけた。その結果、煖爐一つだけで瓦斯代一ヶ月二十八圓を拂はせて、大いに奥さんを面喰はせたといふ珍談がある。この珍談はH君の性格を紹介するために一寸述べたまでで、いはゞ序曲のやうなものだ。私が聞いて貰ひたいと思つた話の本筋はこれからである。

或日――たしか先生が退院されて、自宅で靜養中、私どもが木曜日でも遠慮して出掛けなかつた時分のことだと思ふ――このH君が朝つぱらから先生をその書齋に訪ねて行つた。數回留守番をさせたことではあり、先生も快く面會されたが、H君の方でも氣兼ねはしなかつた。が、H君といふ人は話しの面白い方ではない。それに先生も胃が惡いから強ひて話しをするのが大儀でもあつたらしい。二人は顔を見合せたまゝむづら〳〵としてゐる間に、午飯の時刻になつた。H君は先生と膳を並べて午飯の御馳走になつた。午後になつても、H君は何を云ひ出すでもなければ、又何を頼みに來たといふわけでもない。たゞむづら〳〵としてゐる。先生も亦客を放つて置いて、自分は自分で勝手に本を讀むといふやうな、無遠慮なことをする人ではなかつた。その間にやつと夕飯の時刻になつた。H君は又先生と膳を並べて夕飯の御馳走になつた。

それが濟んでから先生は、例に依つて、醫師の處方によるいろ〳〵の藥を服まれた。藥を服んでしまふと、不圖想ひ出したやうに、「H君、僕はこれから一寸散歩して來るよ」と云ひ出された。先生はその時分、これも醫師のすゝめに從つて、一日に一度は屹度時間を定めて散歩をするやうにしてゐられたのである。「で、君はもつと遊んで行くなら行きたまへ。」から云ひ〳〵先生は立ち上られた。

「先生、散歩ですか」と、H君は吃驚したやうに先生の顏を見上げた。「先生が散歩されるんなら、私も一緒に出ませう。」

さう云ひながら、H君はあわてゝ先生の後から隨いて出た。先生も別段隨いて來るなとは云はれなかつた。かうして二人は一緒に早稻田の門を出た。

二人は榎町の通りを眞直に矢來の交番下まで來た。こゝを左へ曲つて江戸川縁へ出るのが、本郷の下宿へ歸る順路である。が、H君は別段さうする樣子も見えない。先生が櫻の洋杖を突いて、こつ〳〵坂を上り始めると、H君もその後から默つて隨いて行く。二人は寺町の郵便局の前を通つて、日のあるうちに神樂坂へ出た。神樂坂を降りて、濠端の通りへ出た。こゝからも本郷へは歸られる。が、H君はやつぱり先生から離れようとしない。先生は又牛込見附を這入つて、富士見小學校の前のだら〳〵坂を上つて行かれた。H君は影の形に添ふが如くに隨いて來る。それから二人は偕行社の角にある石の燈籠の下まで來た。こゝからはぽつ〳〵灯のともり始めた東京の下町が一目に瞰下されるのである。

その角まで來て、先生が一寸足を留められると、H君は何氣なくその儘五六歩九段の坂を降り始めた。先生はそれを見て、

「おゝ、君はそちらへ行くのか、僕はあちらを廻つて歸るよ」と云ひながら、內濠に添うて英國大使館の方へまはる寂しい道を杖で指された。

「え、あちらへお廻りになるんですか。ぢや、私もお供しませう」と、H君は又もやすぐに踵を返さうとした。

かうなつては、さすがの先生ももう敵はぬと思はれたのであらう。觀念して、

「H君、實は僕は一人でもう少し散歩したいんだよ」と、初めて明白に切り出された。で、やつとH君も合點が行つたと見えて、すご〳〵と一人で坂を降りて行つた、といふことである。

この話は私が故先生の口から直接聞いた話だから、私の覺え違ひでない限りは間違ひはないものと思つて頂いて宜しい。實際、H君もそこ迄先生に云はせるのはひどい。私も隨

分通じない方だが、H君と來たら又輪をかけて通じない男だから、この位の事は本當にあつたらうと思ふと、當人を知つてゐるだけに一層可笑しくなる。が、H君も單に通じないばかりでなく、先生となら本當に奈落の底までも一緒に散歩する氣でゐたらうといふことも察してやらなければならない。そして又先生はかうした通じない男が別段嫌ひではなかつた。笑つて話されたが、その時は迷惑でも、後では愉快な追想であつたに違ひない。この一笑話がちつとでも先生とその弟子との關係を説明する役に立てば私の幸福である。

（昭和八年四月「文藝春秋」）

「瀕死の白鳥」と「鷺娘」

——露國舞踊と日本の踊との價値批判——

今度來朝した露國舞踊家アンナ・パブロヴアの所演に就いては極端に矛盾した二つの世評が同時に行はれた。一はパブロヴア夫人の演出を「靈の藝術」であるとして、或は「言語に絶する」と云ひ、或は「舞踊の神である」と云ふやうに、所謂禮讃の辭を惜まないものである。これに反して、他は「なに、大したものでないよ」と、遠來の女流藝術家を白眼に見て、「あれは藝術ではない、矢つ張り見世物だね。成る程あの筋肉の鍛錬は驚嘆に値する。しかし支那の輕業師にはもつと恐ろしい奴が幾許もある」と云ふやうな、無遠慮な批評を下すものである。どうも前者は、新しい物と云へば直ぐ感激する、後れて感激することを恥とする若い人々が、やゝ興行主側の宣傳に乗せられた傾きがあり、後者はそれの

反動と見れば見られないこともない。たゞその反動側に立つ人々の間には、一角の西洋音樂通や、一流の劇研究家が多かつた。これがこの場合に於ける特異の事情であつたとは云はれよう。

ではこの褒貶二樣の世評のうち何れが、正鵠に近いものであらうか。

それは何れとも私には云はれない。私は妙な事情から前後三回ばかり帝劇の舞臺を見せて貰つたが、生れて初めて接する藝術、しかも音樂とか舞踊とか云ふやうな、固定しない、流動的な、瞬間的な藝術に對して、三回の實見が何程の發言權を私に與へてくれるものであらう。それに第一、舞踊の根柢と成つてゐる西洋音樂が私には分らない。いづれにしても私の判斷は甚だ覺束ないものである。たゞ日本在來の舞踊だけは、私も二十年來毎日のやうに見て來た經驗がある。勿論手一つ、足一歩動かす術も知らないが、見るだけなら、素人としては比較的多く見て來た方だと云はれよう。その舞踊の知識——と云ふのも嗚滸がましいが——に對して、所謂ルシアン・バレーが如何なる印象を與へたか、此方にあつて

先方にないもの、先方にあつて此方にないものは何か、若し日本の舞踊で先方に學ぶべきものがあるとすれば、それは何の點か。かう云ふやうな諸點に就いて、想ひ着くまゝに自分だけの考察を下して見たいと云ふのが、この一篇の主旨である。

高濱虛子氏は能狂言の見地からして、日本の能ではすべて下へ抑へ附ける。單に感情の表現ばかりでなく、足の運び樣一つにもすべて下へ抑へ附ける傾向があるのに反して、露西亞の踊ではすべて上へ〳〵と跳び上がる傾向があると云ふやうな意味のことを述べて居られたさうな。これは一寸面白い觀察である。日本の踊の方は、能程感情の表現に於ても控へ目がちなものではない。「あの人の踊は輕い」と云ふことが褒め言葉になつてゐるのでも知らるゝ通り、「動くこと」がその本體であるとも云はれよう。稀れには、露西亞の舞踊と同じやうに、跳躍を以てその生命とするものもある。「三社祭」の善玉惡玉の如きがそれだ。そして、肉體の運動の美を主眼とする西洋の舞踊が、常に裸體に近い形相で演ぜられると同じやうに、善玉惡玉も漁師の袢纏に脛當て一つと云ふ殆どそれに近い身輕な紛裝で

踊り拔かれると云ふのも、面白い一致ではあるまいか。

併し肉體の鍛錬と云ふことになると、西洋の舞踊と日本のそれとではもう段違ひである。迚も同日の談ではない。私はパブロヴァ夫人の一行が上陸してホテルに着くと、直ぐに猛烈な練習を始めたと云ふことを新聞で知つた。食物、睡眠、體重なぞにも綿密な注意を拂つてゐると云ふ噂も聞いた。そして、實際その演出を見るに及んで、成る程これだけ烈しく自由自在に肉體を使用するためには、平生それ位の注意を拂はなければならぬのは當然だと思つた。あの乳房の邊りの筋肉の微妙に顫動するさまを見よ。後向きになつて、兩手を水平に擴げながら、浪の形に上下する時のあの肩から腕、腕から手頸へかけての細やかな運動を見よ。「全く骨なしだ、蒟蒻のやうだ！」と云ふやうな惡口も、單に驚嘆を表す絶叫としては、その儀採用したくなる位のものである。成る程、一日でも練習を怠つたら、肉體の營養と休息とに、あるが上にも綿密な注意を拂はなかつたら、到底これ程自由自在に、一方から云へば猛烈に身體を使ひこなせるものでない。恰度野球の選手が一日でも練習を怠

つたら、投手が肩でも冷したら、明くる日は何うしても思ふやうな球を出せないと同じやうに。單なる遊戯（スポート）にして既に然りである。況んや舞踊は運動の美を主眼とする、少くとも肉體の運動を唯一の手段としてその志向を表さうとする一個の藝術ではないか。私は不幸にして未だ日本の俳優諸氏は云ふ迄もなく、舞踊を以て立つ人々の間に（能役者のことは私は知らない）、パブロヴァ夫人一行程自己の技藝に熱烈な注意を拂つてゐる人々をたゞの一人と雖も知らないのである。

或は云ふであらう、我邦の舞踊は所作振事が主である、輕業師ぢやあるまいし、そんなに肉體の鍛錬に勵む必要はあるまいと。成る程我邦の舞踊が振事を主とするものであると云ふ說は正しい。しかしその振事も肉體の運動を所緣として表出されるものである以上、すべての基礎なる肉體の鍛錬と云ふことは決して忽諸（ゆるがせ）に附せられ得る筈のものではない。私はまだその上にも考へる、若し聲樂家が聲の練習に依つて、常人には迚も出し得られないやうな高い聲、若しくは大きな聲を出すことが音樂上必須な事であるとすれば、舞踊家

が肉體の鍛錬に依つて、常人には迚も眞似の出來ないやうな運動、若しくは姿勢を取ることも舞踊の美を發揮する上に必須な事ではあるまいかと。かうは云ふものゝ、私は直ちに日本の舞踊家も爪先で歩くことを稽古しろだの、きり〳〵と十二三遍廻つた揚句、ぽんと爪先で立つことを習えろだのと注文する者ではない。たゞパブロヴア夫人の藝風を見て、一番先に氣附くことは日本の舞踊家に鍛錬の足りないことである、火の出るやうな稽古の見られないことである。役者は見物を呑んでかゝつて、一日の下稽古もせずに平氣で舞臺へ上がる。お師匠さん連の舞踊會も雨後の筍のやうに數だけは多いが、いづれも賣名や、勢力範圍の爭奪や、嫉妬や、排擠や、切符の押賣などに浚頭して、內容は毎もちやちな間に合はせ物ばかり、出し物の充實に心血を注いで、本當に稽古の積んだものを見せられるやうなのは、殆どないと云つても可い。日本舞踊の前途も隨分心細いものである。

再び云ふ、日本の舞踊家のパブロヴア夫人の一行に學ぶべきものは、その肉體の鍛錬である、火の出るやうな稽古である。舞踊の振や手に到つては自ら別問題たらざるを得ない。

私ども素人の眼にも感ぜられることは、パブロヴア夫人に依つて代表せられた西洋の舞踊には、踊の手の極めて少いと云ふことである。見てゐると、大部分無意味な跳躍や、足拍子や、爪先の歩行や、旋回舞が續いて、極り所へ來ると、ぱつと大理石の彫像に見るやうな美しい姿勢を取つて極まる。日本で云へば、一種の見えをするのである。それが毎も似たり寄つたりで、同じやうな姿勢が何遍でも繰り返されるのである。手の上げ方、足の開き方なぞも大抵は極まつてゐて、一つの短い小曲の中でも同じ型が何度となく繰り返して現はれて來る。はつきり數へてゐた譯でもないが、踊の手と云ふやうなものは、前後を通じて五つか六つしかないやうに私には思はれた。そこへ行くと、日本の踊の手は專門家に訊いたら八十種あるか百種あるか知らないが、殆ど比較にならない程澤山の振なり手なりがある。道成寺には、俗にあらゆる踊の手が具はつてゐると云はれるが、眞當面に踊れば五十分から一時間もかゝるあの長丁場の中に、同じ手は殆ど一つも繰返されてゐないと云つても可い。勿論、その間には、日本人の顏は幾人見ても同じ顏と云ふものは一人もな

いが、西洋人の顔はどれもこれも同じやうに見えると云つたやうな心理も幾分働いてゐよう。併しそれにしても、大體の感じの上で、迚も比較にならない程の差違があるやうに思はれるのは、何うした理由か、私はこの事實を說明して次の樣に云ひたい。

これを外面的に見れば、兩者の事情の差違は一目して明瞭である。西洋の踊は、殆どその悉くが腰の周りに羅の翼のやうなものを捲いたまゝ、裸體に近い扮裝で舞はるゝのに對して、日本の踊は長い袂の振袖を着てゐる。日本の振袖と云ふものは、殆ど踊を踊るためばかりにあんなに長くなつたんだと云つても可い位のものである。その外に扇子と手拭とが踊には附物である。この振袖と、扇子と、手拭とが何れだけ日本の踊の手を複雜にしてゐるかと云ふことは、一度でも踊を見た人の直ちに點頭かれる所であらう。さう云ふ七つ道具を枷に使ふものと、無手で裸體のまゝ踊るものとの間に、單純と複雜との差の生ずるのは自然の數である。が、これは餘りに外面的な觀察である。もう少し內面的に考察して見ると、西洋の踊がさう云ふ裸體に近い扮裝で舞臺に立つと云ふのも、主として肉體の無意

味な運動の美を表すことを目的としてゐるからではあるまいか。無意味な運動だからいくら肢體の美を發揮するために踊の手が分化した處で、それには自づから限界がある。どゝに彼方の踊の單調に流れる根本の理由があるのである。尤も、西洋の踊だつて無意味な運動の連續ばかりとは限らない。時には人間性情の表出もある。少くともパブロヴア夫人一行の舞踊には、その方面に出ようと努めてゐるらしい形跡がある。然も舞臺に現はれた所では、僅に喜びとか、恐れとか、勇氣とか、極めて單純な、原始的な感情の表出にとゞまつて、まあ日本の盆踊か、せい〳〵二十五座に近いものと思へば間違ひない。そこへ行くと日本の踊は——勿論舞踊の根源に溯れば、何處の國だつて喜びの餘り躍り狂ふと云つたやうな處から生れたものに相違ないが、現在ある日本の踊は——例の人形芝居から出てゐるだけに、一々の感情の複雜で微妙な陰翳までも肉體に依つて、委しく云へば肉體とそれを蔽ふ衣裳とに依つて表さうとした、極めて大膽な試みである。一言にして云へば人間表情の最も發達した形式である。これに加ふるに、例の物眞似——鳥の形だの浪の形だの

をその儘模倣した踊の手を以てしたものが、所謂振事の全部である。我邦舞踊の手の複雑にして千態萬樣なるは誠に故ありと云はなければならない。

實際、無生の人形に生命を吹き込む、眼も動かず顏の筋肉も動かない人形を使つて、ただその姿態の變化に依つて生きた人間の感情を表すことに成功した、昔の人形使ひの苦心と創意とは驚嘆するに餘りがある。その人形使ひの創意をその儘繼承して、それに人形には許されてない顏面の表情やら肉體のしなやかさやらを加味したものが我邦現在の振事である。そして、その振事は人間の感情を表す上に殆ど完璧に近い、少くとも德川時代の爛熟した人間情調を表す上には、何等間然する所がないと云つても差支へない。我邦の踊がその振事に於て世界に冠たるものであるとは、かねがね人の噂にも聞いてゐた。今パブロヴア夫人の演出を見るに及んで、つくづくその言葉の私を欺かなかつたことを悟つた。私は日本の振事を世界の誇りとするものである。

それから見ると、ルシアン、バレーの如きは振事としては全く幼稚なものである。意味

のない運動から意味のある舞踊に移らうとして、漸くその方面に曙光が認められたと云ふだけのものに過ぎない。かく感情の表出としては幼稚で單調であるだけに、帝國劇場に於ける演出に際しても、毎夜主なる出物として上演される二種の舞踊劇——我邦で云へば、「忠信」とか「靫猿」とか云つた程度の芝居がかゝつたものが——日本人の間には總體に評判が惡く、却て打出しに上演される小品——無意味な跳躍や、旋回や、主として肉體の運動の美を目指したものか、さもなければ歡樂や、夜の恐怖や、勇氣と云つたやうな、單純で强い感情を盛つたもの——が一般に好評を博したと云ふのは、當然過ぎる程當然な結果であらなければならない。

乍併無意味な肉體の運動にも、運動其者に伴ふ一種の美しさがあることは爭はれない。單なる音の連續に依つても立派な音樂が出來上るものとすれば、無意味な運動の連續からも當然立派な舞踊が生れる筈である。況してあの鍛錬に鍛錬を重ねた、生れながらに優秀な肉體で踊り拔くんだもの、それを見てゐる間だけでも、觀客が陶然として醉ひ心地になるの

は無理もない。で、若しこの無意味な運動の連續に一點の意義を投ずるとすれば、それは何うしても單純で强烈なものであらなければならぬ。そして、彼等の舞踊の性質から見て、陰性のものよりも陽性なものが妥當である。この意味から云つて、小曲の中でも「酒神の祭」と云ふのが私には一番心持ち好く見られた。それは私ばかりでなく多くの友人の意見でもあつたらしい。若い男女が幾組となく明るい天地の間を踊り狂つてゐる。やがて酒の神が一人の少女と手を連ねて出て來た、盛に跳躍旋舞し、時には高く女の身體を抱き上げて舞臺の正面へ持つて行つたりする。その行く道に花が撒かれる。花の撒かれる中を我を忘れて踊り狂ふ。たゞそれだけである。それだけではあるが、踊の手と踊の心持ちとがぴつたり合ふためか、前には無意味に思はれた跳躍旋舞が此處では生々躍動して、最後まで息をも繼がず見物することが出來た。「瀕死の白鳥」は、それとは反對に、陰性で、且寫實的なものである。パブロヴア夫人の得意の出し物だと聞くが、私にはそれ程に見られなかつた。なほこれに就いては後に云ひたい。舞踊劇の中では、「秋の木の葉」だけが割合に好

評であつた。が、これは木の葉の風に吹かれて散るさまを踊子の群でその儘大膽に模倣したもので、劇らしい筋も簡單に、比較的小曲に近いものであつた。從つて露西亞舞踊がその小品に於て優れてゐると云ふ最初の命題は動かされない。

で、結局我邦の舞踊がパブロヴア夫人から學ぶべきものは何か。私は、肉體の鍛錬を外にして、その他の點では殆ど何物をも見出し得ないのを憾みとするものである。殊に踊の手や振に就いては、先方こそ此方に學んで然るべきで、此方から學ぶべき所は毫末もない。前にも云つたやうに、日本の踊の振は人間性情の表出として完璧に近いものである。殊に靡爛した江戸文明の產物であるだけに、あの戀愛とまでは行かない、さながらの肉慾に近い或物——私はこれを色氣と云ふ言葉で表すより外に適當な言葉を知らない——それからその色氣に伴ふ恨みつらみと云つたやうなものの藝術的表出としては、世界に匹儔を見ない程の素晴らしい發達を遂げたものである。が、それは終にそれだけである。現在吾々の有つてゐる複雜な感情生活の表現として物足りないことは云ふ迄もない。では、何うし

たら可いか。すべての藝術はそれ自身に於て行き詰まつた時、外國に於ける同種の藝術に走つて、そこに何等か局面打開の鍵を與へられようとする。そして、大抵の場合何物かを與へられるのを常とする。然も踊ばかりは何物をも與へられない、何物をも與へられさうにない。

若し强ひて彼等に學ぶ所があらうとすれば、それは舞踊の單純化である。彼等の小品に見られるやうな單純化である。我國在來の舞踊は——舞踊と云ふよりも、その土臺になつてゐる俗曲は、大概有意味な言葉の無意味な羅列である。勿論さうするにはさうするだけの音樂上理由はあつたらう。又さうする事に依つて、そんな言葉の詮索を措いて一種の氣分を與へることも事實であるが、その言葉の一つ〳〵の意味に從つて振を附けて行く時、その振に意味のあるだけ、出來上つた舞踊にやゝせゝこましい感じの附隨するのは又已むを得ない。このせゝこましいと云ふのが我邦舞踊の弊所である。これは是非一掃されなければならない。すべての改革は先づその單純化に始まる。こゝに先鞭を着けた人があれば、

私はその着眼に同感する。併し西洋の踊や手までも漫然と取り入れようとする者があつたら、それはたゞ自己の愚劣と不見識とを曝露するに過ぎない。

最後に私は、彼我の長所を比較して、これ迄述べて來た私の言葉を實證するために、パブロヴア夫人の「瀕死の白鳥」とそれに似た題材を取扱つた我邦の「鷺娘」とを二つ並べて批判して見たい。

「瀕死の白鳥」は、見ないうちは、何か象徴的な意味でもあるものかと想像してゐた。行つて見ると、たゞ白鳥が死ぬ所をその儘寫實的に模倣した踊である。彈丸にでも中つたのか、最初垂幕の蔭からひよろ〳〵と出て來て、幾度も苦しげに蹲つたり、又伸び上つて羽搏きをしたりする。いや、羽搏きをするやうな振をする。最後に一度伸び上つて置いて、ぐた〳〵と崩折れるやうに翼をひろげて地に倒れたまゝ、眼を瞑る。最後に倒れる所なぞは、白鳥の死ぬ所は本當にかうもあらうかと思はれる程、寫實的に巧妙なものである。が、それだけである。それ以外に何物もない。白鳥が死ぬと云ふことに何か意味があれば知ら

ぬこと、若しそれがたゞ白鳥が死んだと云ふだけに留まれば、この踊にも何の意味はないと云ふ外はない。

パブロヴア夫人の舞踊は「靈の藝術」だと云はれる。何處が靈の藝術なのか、私どもには分らない。想ふに、西洋人はそれ迄意味のない運動を主とする踊ばかりを見せられてゐた。そこへ始めて、單なる寫實にもせよ、意味のある踊をパブロヴア夫人に依つて提供せられた。そこで驚嘆して俄に「靈の藝術」だなぞと云ひ出したのではあるまいか。これは餘りに穿ち過ぎた酷評かも知れない。併し日本の踊と西洋の舞踊との差違を明瞭に說明するためには、最も恰好な挿話のやうにも思はれるのである。

それから又、この前來た同じ露西亞の某夫人の「瀕死の白鳥」は、肩に白鳥の翼を着けてゐたが、そんな物を着けない所にパブロヴア夫人の見識があると云はれる。が、翼を着けないで翼と見せる位のことは、日本人に取つては何でもない。そこに我國の踊の特徴があるのである。パブロヴア夫人は、翼は附けないまでも、例に依つて腰に綿毛のやうな白

鳥の羽を捲いてゐる。我が「鷺娘」を見よ。鷺娘はたゞ白の振袖に黑繻子の帶をして、頭に綿帽子を被つたまゝ出て來る。それでもう立派に白鷺の聯想を見物に起させるではないか。

實際、「鷺娘」のあの着附は象徴的なものである。白の振袖に黑繻子の帶、綿帽子、白の鼻緒のすがつた黑塗の足駄を素足に穿いて、蛇の目傘を肩にしたまゝ、しよんぼりと雪の降る中に後向きに立つてゐる。あの出の姿を見ただけで、私どもはもう孤獨な寂しい野中の白鷺、その白鷺の精靈を想はせられる。森とした中に艶な所のある氣持ちが犇々と身に迫つて來る。眞個、象徴の力である。

日本の踊の着附も「鷺娘」のやうに成功したものばかりとは限らない。「鶴龜」の鶴も羽翼を背負つてゐる。「羽衣」の天女のそれに到つては、金や赤や靑でぴか〳〵した、見るも可厭なものである。それに比べて、能の「羽衣」が單に女の袿を松の枝に掛けたばかりで、いかに此世の物ならぬ天の羽衣を想はせるに力あるかを知る人は、必ず「鷺娘」の着附の

「瀕死の白鳥」のそれに何の位優つてゐるかを悟らなければならない。

私は今しばらく「鷺娘」に就いて語りたい。

「鷺娘」は固より鷺其者の寫實的な再現ではない、鷺の精靈が假りに女の姿をかりてこの世に現はれたと見るべきものである。或は鷺を嬉りて男に捨てられた女の修羅の妄執を表したものと見る方が一層妥當かも知れない。「吹けども傘に雪もつて」の唄の文句で、それ迄後向きに立つてゐたのが、前向きになつて、しづ〳〵と舞臺の正面へ出て來る。「つもる思ひは淡雪の消えてはかなき戀しとや」で、ちら〳〵雪の降る寂しい夕ぐれの空をしづかに見上げて廻る。それ迄は女の振である。が、「戀しとや」で再び後向きになつて、急に鷺の形をして見せる。そして、次の「思ひ重なる胸の闇」ではもう胸の妄執に燃える女の振に變つてゐる。それから進んで、「濡鷺のしよんぼりと可愛らし」で、雪の中に突き差した傘に兩手を重ねて、娘らしいあどけない振があるかと思ふと、次の合の手では鼓に伴れて羽搏きをして見せて、「迷ふ心の細流れ、ちよろ〳〵水の一筋に」と、水の面を覗き込みな

がら、兩手を袖に鳥の飛ぶやうな足取りで、さも心殘りのあるやうに少し反り氣味になつて廻つて行く。かう云ふ風に女の振の合間々々に、一寸づゝ鳥の形をして見せた方が、始めから終ひまで寫實的に鳥の眞似をする「瀕死の白鳥」なぞよりも、何の位白鷺の印象が深いか知れないと云ふことは、深く說明する迄もなからう。

更に進んで、「緣を結ぶの神さんに」からは、すつかり女の振に還つて、神に念願をかけるやうな、無智な、併し乍ら思ひ詰めた娘の色つぽい仕草がそこに展開される。あの有名な「須磨の浦邊に潮くむよりも、君の心がくみにくい、さりとは實に誠と思はんせ、繻子の袴の襞とるよりも、主の心が取りにくい、さりとは實に誠と思はんせ」の美しい、肉感的な美しい文句にも、手拭と長い袂とを枷に、溢れるやうな色氣に充ちた、濃艶な振が附いてゐる。實際、こゝら邊りは、文學と音曲と舞踊とを打つて一丸とした、江戸時代の藝術の最頂點に達したものと云はなければならない。それから又更に進んで、「緣と月日をめぐりくる〳〵、車傘」の邊りの振になると、もう漸くどろ〳〵の化物らしい凄氣が漂つて

「添ふも添はれずあまつさへ、邪慳の斧に先立つて、この世からさへ劍の山」で引き拔いて、遮二無二黑髮をふり解きながら、例の白地に火焰を表はした怨靈の姿になる所は、前の白と黑との寂しい着附との對照に於て、凄愴妖艶を極めた一幅の繪模樣である。そして、日本舞踊の最も得意とする壇場である。

故人團十郎の「鷺娘」は見たことがないから何とも云はれない。九女八の「鷺娘」も、私の見た時はもうよち〳〵として舞臺の上を彷徨いてゐるばかりであつた。私の知る限りに於ては、方今鷺娘を踊つて最も好くその氣持ちを出し得るものは、日本橋の六琴、踊りの方の名前では、藤間勘之助である。その持味から云つても、手腕の冴えから云つても、この一番に就いては一寸その右に出る者がないやうに思はれる。パブロヴア夫人のお土產に帝劇の女優の「眞間の手古那」だの、藤陰會の、「秋の木の葉」の眞似をした、一夜漬の變なものを見せて國辱を曝すよりも、何故この人の「鷺娘」でも見せてやれなかつたらうかと惜しい氣がする。少くとも相手をして、何物かを啓發させることが出來たらうに。

いづれにしても日本の「鷺娘」は「瀕死の白鳥」なぞよりも遙に藝術的價値の高いものである。その主題から云つても、振附から云つても、その象徵的意義から云つても、さうである。一個の完成した藝術品である。いや、「鷺娘」ばかりではない、日本の舞踊其者がもう何うにも手の附けられない、完成した藝術のやうに思はれる。少くとも江戸時代の產物として、その時代の音曲を所緣とし、その時代の情調を表す振事から出來上つてゐる以上、吾々がしひてそれに手を附けた處で、たゞ破壞を招くばかりで進步は期待されない。それは新しい三味線音樂の節附が悉く失敗に終つてゐるのを見ても、大抵想像される。吾吾が江戸時代の情調になり切れぬ以上、在來の日本舞踊は、能樂と同じやうに、たゞ在るものを在るがまゝに保存することに努めるのが、最も賢いやり口ではあるまいか。私が新しい舞踊の試演に多くの興味を繫ぎ得ない理由はこゝにある。

これに關聯して考へられるのは、舊芝居の所謂型物である。あれが日本の踊りと同じやうに人形芝居から分派した二つの支流であることは云ふ迄もない。で、若し日本の振事が

世界に比類のない發達を遂げたものであるとすれば、眼に訴へる劇としては、舊芝居の型物も、いかにグロテスクな所があるにせよ、同じやうに世界に匹儔のない發達を遂げたものと云はなければならない。そして、耳に訴へる戯曲でなければ劇でないやうに云ふのは、餘りに西洋かぶれのした固陋の見である。眼に訴へる芝居が吾々の要求に根據を有つてゐることは、大正の今日なほ各大劇場で在來のまゝの型物を繰り返して打ちながら、能く觀客を繋いで行く事實に見ても明白ではないか。勿論、私は新しい型物の出現を希望する。が、それが何うして出來るかと云ふことは、新しい振事の創作と共に、吾々に殘されたる至難の問題であらなければならない。

新しい振事の創作。それに就いてたゞ一つ明白なことは、それが何うしても在來の三味線音樂を土臺とするものであつてはならないと云ふことである。箏曲の如きは一層駄目である。新しい振事は、何うしても吾々の感情生活を十分に表し得る音樂を基礎として立たなければならない。それが西洋音樂であつても構はない。たゞその西洋音樂が十分に吾々

の所有となつて後、始めて新しい振事は生れるのである。然もその場合パブロヴア夫人の後を追ふことは、吾々の振事に對する眼が肥えてゐるから許されない。吾々は吾々で新しい振事を創作する外ない。その時、然り、その時眞實の意味に於て日本の新しい舞踊が生れるのである。（大正一一年一二月「女性」）

劇作術と『平將門』その他

「考へさせる劇」「うと〳〵と眠らせる劇」なぞも大いに好からうと思ふ。しかし考へさせるだけなら、若しくはうと〳〵と眠らせるだけなら、必ずしもそれを劇に仕組まなくとも可い。小說にしても、繪に描いても、お能を拜見しても、下手な謠曲を聞かされても、乃至五酌の催眠劑を用ふるだけでも可いではないか。この意味に於て、自分は劇を書くなら「劇らしい劇」を書くことだと思つてゐる。劇でなければ見られない味を持つた劇らしい劇を書くことだと思つてゐる。「考へさせる劇」や「眠らせる劇」はその後でも可い。處で、「劇らしい劇」を書くためには、何うしても劇作術（ドラマツルギー）を度外することは出來ない。尤も劇作術に適つたやうに書きさへすれば、劇作術の法則なぞ知らん方がいゝかも知れない。そんな物を知つて居れば、却て邪魔になる。が、兎も角そんな法則は知らんでも、實行の上では、

劇作術の示す法則に適つたやうに書き上げる必要はあらう。それでなければ、所謂「劇らしい劇」にはならぬのだから。

で、この意味から私は戲曲に對して、單に印象批評や、一般文藝的作品として見た批評ばかりでなく、もつと劇作術の上から見た批評が出てもいゝやうに考へてゐる。それが一向に出ないのは何うしたものか。

『平將門』が眞山青果氏の近來の傑作であることは云ふ迄もない。その當時菊池寛氏や生田長江君が激賞して居られたのも記憶に新しい所である。菊池氏はあの中の力强い會話を褒めて居られた。生田君はあの將門が作者その人を見るやうに、きび〳〵と躍動してゐる點を重視してゐたと覺えてゐる。生田君と同じやうに、往年の青果氏の人物なり性格なりを幾分知つてゐる私どもは、矢張りあの作者と將門とが一緒になつてゐるやうな、あのぶつきらぼうな、勢ひに乘じてはゐるが、どこか心（しん）に弱い所のある、それでゐてその弱い所を隱さうともしない性格に――一言にして云へば、平將門を通じて作者自身を描かうとし

た處に心を惹かれたものだ。そして、一般に世評の好かつたのも、意識するとしないとに係らず、そこにあつたらしい。

處で、これは一應も二應も感服した上の話であるが、それだけ感服して讀んでゐながら、何う云ふものか、讀んでゐる間にだん〳〵興味が散漫になつて、部分々々としては面白いが、全體としてどうも興味の集中がない。どこか物足りない氣がする。これは讀んでは面白いが、舞臺に上せたら屹度面白くないなと云ふやうな氣がして來た。勿論、青果氏は舞臺にかけては私どもと違つて苦勞人である。その苦勞人たる氏が何と思つてこんな板に乘せられないやうなものを書くのか。それとも、氏は在來餘りに舞臺にばかり關係してゐたので、純藝術的作品たる意氣を示すために、わざと板に乘せられないやうなものを書いて見たのぢやないかと迄邪推して見た。が、それなら實際餘計な意氣を示したものだ。板に乘せられるからと云つて、それが純藝術的作品でなくなる理由は一つもない。舞臺で見て面白くて、始めて戲曲は戲曲たる使命を全うすることが出來るのである。これ位のことの

分らぬ氏でもあるまい。で、邪推は邪推として、私は何日か機會があつたら、この作を劇作術の立場から詳細に批判し解剖して見たいと云ふ希望をその當時から抱くやうになつた。勿論、それはこの作を惡く云ふためでも貶黜するためでもない、却て『平將門』並びにその作者に敬意を表せんがためである。で、その事を嘗て『新潮』の編輯の方にも話したことがあるが、總じて雜誌編輯者の惡い癖？　として、籍すに時日を以てせられない。「書けと云つたら、さあ書け！」と云ふことになる。今度もお約束はしたもの〻、內實二三號延ばして貰ふつもりで悠然と構へてゐると、締切り前になつて何うしても書けと云ふことだから、もう原作を讀み返してゐる暇もなく、作者並びに讀者諸君に對して甚だ無責任の至りであるが、嘗て書かうとした計畫の構圖だけを述べて責任を塞ぐことにした。諒焉。

『平將門』を讀んで、部分々々には面白い、溜らない程面白い所もあるが、全體としてはどうも興味の集中がないやうに感じたものは、恐らく私一人ではなからう。當時の短評に

もさう云ふ說があつたやうだし、あれを讀んだ方は一般にさう感じられたやうに思ふ。では、その原因は何處にあるか。私はそれを所謂劇作術（ドラマツルギー）の立場から見て作者が筋（ハンドルング）よりも性格に重きを置かれた處にあると斷言したい。一體、作者はこの作で何を書かうとせられたかと云ふ點を考へて見るに、何うしても平將門といふ人物である。國司が政治を誤つたために、地方の豪族が擡頭して、漸く上司に反抗するやうになつた時代の雰圍氣を背景として、將門といふ一人物の全體を描き出さうとしたものであると見るのは、蓋し至當の見解であらうと思ふ。處で、作者が或歷史上の人物を取つて主題としたやうな場合には、歷史的材料に對する興味に眼がくれて、やゝともすれば筋（ハンドルング）の統一を破り易い。これは敢て眞山氏一人とは云はない。古來の大作家と雖も免れ難い通弊である。しかも筋（ハンドルング）の統一にして破れんか、舞臺藝術としての戲曲の失敗であることは最早爭はれない。

では、ハンドルングとは何ぞや？　と、開き直つて說明するのも、學校の講義めいて恥づかしいから廢めて置くが、兎に角劇には筋の統一が肝心で、一たび筋の統一が破れたら

もう看客の興味は散漫になつて、ぐん〳〵見物を引つ張つて行く例の緊張味、所謂サスペンスの感なるものも到底生じないものだと云ふだけは承知して貰ひたい。處で、それ程大切な筋の統一は、單に同一人物の行爲や苦痛を描いただけでは得られるものでない、これは劇作術の命ずる一番初步の法則であつて、しかも古來の偉大な作家に依つても往々にして破られ勝ちな法則である。それなればこそ、アリストテレスも「筋こそ第一である、最も肝要なものは筋である。性格は第二である」と喝破してゐる。私はハンドルングを筋と譯して置いた。この場合は筋で澤山である。我國では一にも性格、二にも性格と無暗に性格描寫を重んじて來た結果、性格描寫を度外した、筋ばかりで讀ませるやうな作は、一概に下等な作と貶してしまふ。が、私と雖も、いや、アリストテレスと雖も（と云つた方がいゝ）性格描寫を度外せよと云つた譯ではない、たゞ劇に在つては、性格よりも筋が肝心だと云ふのである。試みに思へ、筋ばかり重んじて性格を度外した芝居は、それでもまだ見てゐられる、時には面白く見てゐられる。これに反して、性格描寫だけあつて、全然筋

の通らないやうな作は迚も退屈で見てゐられないから。

前にも云つたやうに、私は今『平將門』を讀み返してゐる暇さへない。從つて確としたことは云はれないが、作者は將門の史實を檢べて見て、餘りに多くその材料に興味を持ち過ぎられたのではあるまいか。そして、將門の性格なり氣分なりを表はすに足る材料とさへ見れば、餘りに多くそれを取り入れられた嫌ひはなからうか。一寸見ただけでも、藤原氏の專横から民の疲弊、それを他所に見ながら飽く迄現實に、土に獅嚙み着いて生きようとする將門の心持ち、毛野川の水利に關して常陸源氏との爭ひ、上京して檢非遣使にならうとしたが、藤原氏から撥ねられた件、賴み甲斐のない伯父常陸大椽國香との關係、亂暴な三郎、學問好きな四郎などの弟どもに對する將門の氣持ち、上總の伯父の娘を盜み出して自分の妻にしたと云ふ東の君に對する氣持ち、從つて又その娘の許婚であつたと云ふ從弟の貞盛に對する氣持ち、それからこれは裏に隱されてゐる事件ではあるが、常陸源氏との爭ひから、それを留め立てした伯父國香の館を燒き打ちして、とう〳〵それを殺すに到

つたと云ふ、この作中での大事件、で、かく將門の勢威が張るに伴れて、それに手賴らうとする、若しくはそれを利用しようとする近隣の土豪どもとの關係、西國、南海、相模などの一揆動亂、偶然の事情から從弟貞盛に取つては父の仇になつたと云ふ將門の悔、常陸勢の逆襲に——上總の叔父どもが國香のために催した弔ひ戰に負けて、一旦死地に陷つた將門が獅子奮迅の勇を鼓して、終に押寄せた敵を鏖殺して、敵將貞盛を都に走らせるなど、將門が心ならずも勢ひに押されて、戰もすれば、戰に勝ちもする、そして、到頭關東八州に覇を稱するに到る迄の經路が逐次的に描かれてゐる。勿論、これに依つて、作者の表はさうとした將門の性格なり氣持ちなりはよく分る。が、どうも一つの事件と他の事件との間に必至的な原因結果の關係がない。全くないとは云はれないが、どうもそれが稀薄である。目立つものは、事件其者の因果關係ではなくして、あゝ云ふ事をした將門だから、かう云ふ事もしようと云ふ、主人公の性格なり氣持ちなりの上の連絡である。尤も、この作にも一貫した筋——事件と事件との因果關係の繫がり——と見做すべきものがないではな

い。即ち常陸源氏との爭ひから誤つて伯父國香を殺した將門が、兄の弔合戰のために押寄せた叔父どもの軍勢を引請けて、却てそれに打勝ち、威を八州に張つて、終に朝敵の汚名を蒙るに到つたと云ふ道筋である。が、これを主なる本筋として筋の統一を計るためには、もつと刈込むべき點が多々あるやうに思ふ。第一、それなら最初の水利の爭ひからして、あんなに長く低徊すべきものではあるまい。筋は寧ろ誤つて國香を殺した後から始まるべきものだと思ふ。それから歴史上の事實に拘泥する餘りに、將門が檢非違使を望んで撥ねられたことまで取り入れて居られるが、あれだけ土に親しんで、一家の安全といふことばかり念としてゐる將門が京師に出て檢非違使なぞの官職を望まうとは、何うしても考へられない。いくら將門が官職を望んだのではない、それに依つて本領安堵を計つたんだと云つても、それは詭辯だとしか受取れない。かうなると、第一高見王の曾孫たる將門をあれ程迄に土に根を生やした、生地の土豪にしてしまつたのからして、餘りに歴史を枉げるものではないかと云ふやうな疑ひさへ挿みたくなる。敢て歴史を枉げるなと云ふのではない、

餘りに史實に即し過ぎてゐるために、歴史を枉げた箇所が目立つと云ふ迄である。で、かくの如くごた〳〵して、讀者の注意を散漫にするばかりでなく、惹いては性格の矛盾まで來したのは、何に基づくか。要するに作者の過失は筋（ハンドリング）第一の代りに、性格第一で取り懸られた處にある。そして、性格を重んずる餘り、歴史的材料に興味を持ち過ぎられた處にあると云はなければなるまい。

成程、歴史上の人物が一生の間に遭遇した諸々の事件を説明するものは、その人物の性格に外ならない。そして、さう云ふ諸々の事件から反映するその人物の性格は確かに面白い。偉大でもあれば、複雜でもある。が、その人物の性格の面白さに興味を持つた瞬間に、作者は一種の係蹄にかゝつたやうなものだと云ふことを忘れてはならない。そこに作者の宿命があるのである。試みに思へ、歴史家の報告する諸々の事件は、その數が實に繁多である。それを悉く舞臺の上に演出することは無謀であるばかりでなく、實際に於て不可能だと云はなければならない。勢ひその事件全體の有する意味——即ちその人物の性格——

を少數の事件に含ませるために、その事件を改造する必要に迫られる。一度でも時代物の創作に從事して見た覺えのある人なら、さう云ふ意味での改造がいかに困難なものであるかを知つてゐよう。實際、それは思ひ半ばに過ぐるものがある。で、さう云ふ困難をして書き上げた結果、そこに出來上つた主人公の人物の歴史上のそれに比べて如何に小さく弱弱しいかには、自分ながら驚く。尤も、かう云ふのは『平將門』を指して云つてゐるのではない。將門は寧ろ歴史上茫漠とした、殆ど不可解に近い人物を取つて來たものだけに、現實の人物と比較して云爲される恐れは少ない。(それは寧ろ『出家とその弟子』の親鸞上人のやうな場合に、一層危險である。)それに青果氏の『平將門』は將門を通じて作者自身を描いた處に、作者自身の意圖は知らず、私どもには興味の中心點があるやうに思はれるから、これは除外例だと云はなければなるまい。が、いづれにしても、歴史上の人物、特に政事的、若しくは宗教的の人物を取つて來て、その全生涯を理想化するなぞと云ふことは劇に取つては餘りに大き過ぎる計畫である。青果氏も『平將門』を私鬪時代、叛逆時代

の二部曲にせられたが、人物に依つては、三部曲でも四部曲でもなか〳〵間に合ふものではない。そんな全生涯でなくとも、單なるその人物の一斷面だけでも、劇にはあり餘る程の材料を提供するものである。何となれば、歴史の終る所に劇は始まるので、歴史は單に骨組だけを提供するが、劇はその中に血と肉とを盛つた上に、いろ〳〵な色彩を施して、讀者の前に提供しなければならないからである。それだのに、歴史的事件を逐次的に表はさうとして、汗水垂らして足掻いてゐたら、何うしてこの使命を果すだけの餘裕が作者にあらうか。シラーはワレンスタインの最後の破綻だけを取つて材料とした。歴史から云へば、たゞあの人物の最後の幕だけである。しかもそれを描くに彼は三部曲を必要とした。處で、この名作さへ私には餘り面白いものとは思へない。一體、史劇には、讀んで、これはと飛び附くやうな作は餘りないやうに思はれるが、何んなものか。沙翁の『リチヤード三世』だつて、さうである。イブセンの物、巢林子の物(近松翁の作が史劇と云はれるか何うか知らんが、歴史から材料を取つたものには相違ない)皆さうである。坪内逍遙先生

の『桐一葉』や『牧の方』だつて、矢張り史實に捕はれ過ぎた嫌ひはないであらうか。

歴史から材料を取つた作が、史實に捕はれて、やゝともすれば筋の統一を缺く傾向があるのに反して、一つの觀念から出發した作は、必然の結果として好く筋の統一の立つた作が多い。何となれば、元來筋なるものが一つの觀念に依つて整理された事件の系列に外ならないからである。この點に於て、私はいつも菊池寛氏の作に敬服してゐるものである。氏の作は何れを見ても常にその筋が簡單で明瞭である。そして、簡單で明瞭であると云ふことは、筋の統一を計るために必須の條件であることを忘れてはならない。氏は自ら自己の執つた舞臺上の自然主義が劇壇を征服した、そして、自己の作は次々に脚光を見るに到つたと宣言してゐられる。所謂舞臺上の自然主義とはもつと好く氏の說明を聞かないと私には分らんが、それはそれとして、氏の作が何んなに斷片的な物までも次々に脚光を浴びて行つたと云ふことは、一にこの筋の統一が好く取れてゐる、從つて看客の興味を惹くと云ふ所にあることだけは信じて疑はない。尤も、氏の作には、時として餘りに簡單明瞭に

過ぎて、讀んでゐても、中途で讀者に「あゝ、もう分つた！」と思はせる、換言すれば、作意のある所を讀者にそこ迄行かぬうちに氣取られる恐れのあるものもないではないと云ふことは、先に本誌の上で「主題」に關する說を紹介した際にも指摘して置いた。最近又芥川氏編『文藝讀本』の中に收錄されてゐる『屋上の狂人』を讀んだが、一篇の作意が次男の口を藉りて云はせてある「狂人は狂人のまゝにして置くがいゝ、それが彼自身に取つても一番幸福である、なまじそれを癒してやつたら、彼は自分の憐れな境遇に氣が附いて、日本一の不幸な人間になるだらう」と云ふやうな意味の言葉にあることは爭はれない。處で、私はそれを讀んだ瞬間にかう思つた。「成程、それも一つの通俗的な眞理ではあるが、世の中には、たとひ我が子が正氣に還つたために、自分の憐れな境遇に氣が附いて、何んな不幸に陷るとしても、一度は正氣に還らせて遣りたい。そして人間並みにその不幸を味はゝせてやりたいと思ふ親がありはせぬか。それが寧ろ普通の親心ではないか。それを傍にゐる親も、その他の者も一人として氣が附かぬのは、餘りに不都合だ、餘りに作者の傀

偏になり過ぎてゐる！」と。つまり人生の幸福は幻影にあらずして、眞實を知る所にあると云ふ、これも極めて有り觸れた眞理ではあるが、しかし作中の次男よりは少し許り優しな眞理の別にあることを誰かに主張して貰ひたかつたのである。で、この眞理の存在に氣が附いた時、あの作に對する興味の索然として去つたものは、恐らく私一人ではあるまい。想ふに、これは主題（テーマ）を主とする作の極めて陷り易い短所である。そして、恐らくは簡單明瞭を主とする氏の作風に伴ふ一つの弊害とも云はれよう。が、これは氏の作中でも失敗に屬するものに就いて云つたのであつて、他の優れた作に於ては、主題まで持つて行き方の巧妙さやら、鮮やかな筋の統一やら、劇作術の上から見て無條件に模範とするに足ることは、こゝで私の言を俟たないであらう。

私はなほ劇の構造の上から『平將門』を一々解剖して見るつもりであつた。特にフライタークの構造の上から見た作品の二つの分類を籍りて來て、それにこの作を當て嵌めて、その得失を論じて見たかつた。フライタークは主人公が始めから能動的に働くものと、最

初は被動的で後になつて能動的になるものとの二つに分けてゐる。そして、前者の例には『マクベス』だの『アンチゴーネ』だのを擧げ、後者の例には『オセロ』だの『エヂプス王』だのを擧げてゐる。今將門に就いて見るに、他人から致されたり、勢ひに驅られたりして、心ならずもクライマックスまで持つて行かれる處、一見被動的な主人公のやうでもあるが、事實は最初から能動的に働いてゐるのだとも云へるし、又は最後まで一度も能動的には働かないのだとも云へる。つまりフライタークの分類のいづれにも入らぬ所に私の興味があつた。併し今頃フライタークなぞ持ち出すと、讀まぬ先から陳套だと思はれるだらうし、私もくたびれたから、こゝで罷めて置く。（大正一五年一月一五日「新潮」）

他を許す文學と許さざる文學

(一)

いはゆるイデオロギイをもつた文學とリアリズムとの關係について云爲される聲が、近頃私どもの耳にも聞えるやうになつた。イデオロギイについては、固より私は何にもいふ資格がない。けれども、リアリズムなら知つてゐるつもりだ。單に理論として知つてゐるばかりでなく、實際作品を取扱つた經驗からも知つてゐる。私もこれで文壇に三十年の小作人生活をして來た。小作人でも、三十年の經驗は私に何物かを敎へてくれた。その何物かを基礎として、近頃の新しい傾向に對して、自分の眼に映つたまゝを述べて見るのも强ち無駄ではあるまい。

リアリズムを描寫の方面からばかり見るのは、そも〳〵末だ。あれは平面描寫なぞといふことを唱へた田山花袋氏一派の自然主義であつて、リアリズムの本體はやはり材料の取扱ひ方にあると思ふ。ロマンチシズムが主としてその材料を演繹的に取扱はうとしてゐるのに對して、出來るだけ歸納的方法によらうとするものがリアリズムである。かう云つたばかりでは、何の事やら分らぬかも知れぬが、同じ實人生の事實を研究して一つの眞理、例へば同じ一つの人生觀なり社會觀なりに到着したとしても、それを作品の中に體現しようとする場合、リアリストは自分がその眞理に到達した經路に重きを置いて、讀者にもその經過を呑み込んでもらふために、最初自分が觀察を始めた點に立ち戻つて、それから自分が通つて來た通りの道筋を讀者にも步かせた上、最後に自分がつかんだと同じ眞理を讀者にも把握させようとする。材料の取扱ひ方が歸納的になる所以である。だから、それを讀まされた讀者は單にその眞理を敎へられるばかりでなく、作者がその眞理を發見するに到つた經路をも併せ知つて、成程と納得するのである。處が、ローマンチストはそんな面

倒なことはしない。たゞ自分の把握した眞理を有效に、明確に讀者の頭へ叩き込みさへすればいゝので、最初自分がどんな人生の事實を研究してさういふ眞理に到達したかといふやうな經路なぞはてんで問題としない。それよりも自分の持つてゐる眞理を闡明する上に最も都合のいゝやうな材料を勝手に取つて來て、それによつて一つの作品をでつち上げようとする。從つて自分が最初その眞理に到達するために觀察した事實と、作品の中に使つてゐる材料とが似てゐるか似てゐないかなぞといふことには頓着しない。この方法を取つても、うまく行けば好いものが出來るに相違ない。たゞその材料の取扱ひ方が演繹的であるとはいはれよう。

こゝに注意してもらひたいのは、前の歸納的方法を取る場合でも、作者は一つの眞理をつかんでゐるが、書いてゐる間はそれを知らざる眞似して、いや、眞似ではない、本當にどんな眞理に到着するか忘れて、成心なくして、たゞ丹念に材料を集めることに腐心しなければならない。そして、その材料から歸納した結果、つまりその作品が終つた時、讀者

と共に始めて一つの眞理に到達するといふやうにしなければならないといふことである。リアリズムの作品が誤つて無目的だなぞといはれたのも、恐らくこんな所から生れたのではあるまいか。

で、かういふ見地に立つて、近時のいはゆるイデオロギイをもつた作品に對する時、それがどういふことになるか、次にそれを檢討して見たい。

(二)

リアリズムは成心のない作風である。少なくとも、書いてゐる間は成心を拒絶する作風である。然るにイデオロギイなるものは既に一種の成心ではないか。いや、私にはイデオロギイを云爲する資格はない。が、少なくとも現在我が國のイデオロギイをもつた作品の多くは、成心をもつて書かれたものといつて好からう。それかあらぬか、どうもその材料の取扱ひ方が演繹的である、歸納的でない。たとひ歸納的であるにしても、その材料の集

め方に遺憾あることを免れないやうに思ふ。

私は曾て葉山嘉樹氏の「海底に眠るマドロスの群」といふ作を讀んで、その元氣のいゝ、きびゝ〳〵した文體に感服した。が、最後の「海と暴風雨だけが惡いのだらうか」といふ結論に達した時、これなら何も骨を折つて小說に書く必要がどこにあらうか。それよりも、あの元氣な口調で、「日本の資本家は乏しい資本で出來るだけ大きな利益を擧げようとするから、人間の生命を輕んじてボロ船に海員を乘せることを厭はない。だから、難船の率は日本が世界第一だ。かうして多くの人命が滅びて行くのは、果して海と暴風雨だけが惡いのだらうか」と、大きな聲で怒號しさへすれば、それで同じ效果が擧げられるのではないかといふやうな氣がした。それ程に、作者のいはうとしてゐられることが最初から分つてゐて、又分つてゐること以外に一歩も出てゐないのである。そして、作者はもしアメリカの資本家のやうに完全でコムフオータブルな船を造つて海員を載せたら、それで滿足してゐられるのだらうかとも、途中で考へて見た。讀みながら、それ程の餘裕が私にあつたの

である。

次に片岡鐵兵氏の「綾里村快擧錄」を讀んだ。これは前者と違つて、作者自身の持つてゐられる元氣や熱でなしに、事件そのものから滲み出して來る熱情があつた。私はそれに魅せられて讀んで行つた。が、あの中の金持が資本家として惡いのでなく、たゞの人間としても惡い奴に出來上つてゐるのがどうも氣になつた。云ひ換へれば、こんな奴はプロレタリヤに生れて來ても、どうせろくなことはしなかつたらうと思はれるのが物足りなかつた。といつて、私はあの郵便局長が漁師の妻を强姦したり取上げたりするのをいつてゐるのではない。あれは寧ろ資本家としての惡かも知れない。さうでなくて、あの田舍の小資本家どもが投資して捕鮑組合をつくつた時、最初から貧乏な漁師どもの採取權を取り上げることをのみ目的として、つまり詐欺を目的として取り懸つた仕事のやうに書かれてゐるのが、私には何となく嘘のやうに思はれたのである。勿論、私は實情を知らない。が、私どもの見てゐる目前の事實からいへば、いくら田舍でもそんな事はあり得ないので、事實

は綾里村でも近海ではもう鮑が獲れなくなつた。で、遠海へ乘り出す必要がある。遠海へ乘り出すには發動機船が要る。それには又金がかゝるといふところから投資の必要を生じて、そこに捕鮑組合なり捕鮑會社なりの成立を見たのではあるまいか。一たび會社の成立を見たとなると、獨立した貧乏な漁師がだん〳〵それに併呑されて行くのは自然の勢ひである。かくして綾里村の漁師どもは皆その採取權を會社に奪はれてしまつた。――つまり詐欺は目的でなく結果であつたといふやうに書いて貰ひたかつた。さう書いて貰つて、私どもは始めて成程と合點が行くばかりでなく、資本といふものの制縛が不可避的のものとして、ひし〳〵と身に迫るやうに感ぜられるのである。

これを要するに、「海底のマドロス」にしても「綾里村」にしても、作者は自分の持つてゐる眞理を讀者の頭に叩き込まうとするのに急なるのあまり、リアリストの態度を忘れて、ロマンチストになつてしまつた。そして、その材料を取扱ふ上にも、歸納的といふよりは演繹的方法を取られた結果、かういつたやうな破綻を生じたのではあるまいか。

(三)

これに反して、小林多喜二氏の「不在地主」はさすがに近頃評判の作者のものだけあつて、その材料の取扱ひ方がちやんと私のいはゆる歸納的になつてゐる。出來るだけ多くの材料を集めて、集められた材料を一つ〳〵丹念に描いて行くうちに、自然と作者の摑ませようとしてゐる眞理を讀者の方で摑ませられるやうに出來てゐる。私はまづそのどつしりと地面に足をおろした態度に感服した。

が、感服したにも拘らず、尙且この作に於ても、イデオロギイに捕はれてといつていゝかどうか知らんが、兎に角最初に一つの觀念を與へられてゐるために、やゝともすれば部分的には演繹的に流れようとする傾向の牢として脱けないものがあるのを見逃すわけに行かなかつた。演繹的といふのは、自家のアイデアを說明するのに、あまり御都合の好過ぎることである。例へば、岸野の工場へ遣られて、姙娠して村へ歸つた娘の、自家で虐待さ

れて、首を縊つて死ぬ所だの、七之助といふ村の青年が一たび都會の工場へ出て、勞働者の仲間に接すると、忽ち作者と同程度といつてもいゝ程六かしい勞働問題のセオリイに通曉する所など。もつと大きな所でいへば、物の兩面を見る——一面を見ると共に、決してその反面をも逸しないといふのが、リアリズムの作風の特長であるやうに私どもは考へてゐるのに、この作には、小作人のいくら働いても食へない一面は出てゐるが、他の一面は書いてない。地主の人非人の一面は書いてあるが、他の一面は略してある。尤も、この一面を見て、故らにその反面に眼を閉ぢると云つたやうな行き方は、ひとりこの作ばかりでない、凡てのイデオロギイをもつた作品に共通の病所のやうにも思はれるから、私はこの問題を提げて、その方面に理解のある某青年學者に訊して見た。すると、その學者の曰く、

「それは、あなたの云はれることは尤もだ。あなたから歸納的方法によつたものとして認められた小林君の作品にも、なほさう云つた遺憾のあることは、私といへどもこれを認める。しかし、あらゆる方面から細大漏らさず歸納の材料を集めるといふことは、實際としては出來得ない。在來のリアリズムの作品といへども、その材料を集める際には、必ず何等かの人生觀社會觀と云つたやうな一つの見地に立つて集めてゐる。例へば自然主義は多くの場合性慾の方面から人間を解釋しようとして、その見地に立つて歸納の材料を集めてゐたといふやうに。」

「成程」と、私は云ふ外なかつた。「確にリアリズムはマテリアリズムの見地に立つて、その材料を集めてゐました。」

「で、作をする上に歸納的方法を取るとしても必ず何等かの人生觀なり社會觀なりに據らなければならないとすれば、その時代を支配する哲學、例へばイデオロギイと云つたやうな、現在の社會組織に對する一つのシステマタイズされた自覺せる見解の下に、その材料を集めるやうになるのも當然ではありませんか。で、それが當然であるとすれば、現下のイデオロギイから見て、資本家は資本家であるが故に、搾取者として惡人である、勞働者は勞働者であるが故に、生産者として善人であると、さういふ風にして取扱ふことも出來

ませう。その結果作品が一面的になるも已むを得ないことではありますまいか」と。

私は唯々として退いた。

(四)

青年學者の云はれたことは私にもよく分つた。現在の社會制度の下に於ては、凡ての惡は社會組織そのものから生れるといふ見解からして、資本家は資本家であるが故に搾取者として惡人である。勞働者は勞働者であるが故に、生産者として善人であると見ることは、私にも十分承認が出來る。この原則に對して少しも異存はない。が、それならば、今のいはゆるイデオロギイの作者は、何故に資本家は資本家であるが故に惡人であり、勞働者は勞働者であるが故に善人であるといふやうに取扱はれないのであらうか。私の見るところでは、近頃の作家はどうもその逆に、惡人であるから資本家であり、善人であるから勞働者であるといふやうに取扱つてゐられるとしか思はれない。どちらでも同じ事だなぞとい

ふことなかれ！　たゞ惡人だから資本制度を利用して横暴を極めてゐるのでは、惡人の說明にはなつても、肝腎のイデオロギイの說明にも具體化にもなつてゐないではありませんか。私はその一ばん好い實例を片岡鐵兵氏の「綾里村快擧錄」に見た。小林多喜二氏の「不在地主」にも全然さういふ弊がないとはいはれない。

何故わが國のプロ作家諸氏は、前に擧げた青年學者も云はれたやうに、資本家は資本家であるが故に惡人であり、勞働者は勞働者であるが故に善人であるといふやうに書いて下さらないのであらうか。もつと悉しく云へば、最初から資本家は惡人、勞働者は善人といふやうに、善玉惡玉を決めてしまはないで、資本家はいくら善人で善い事をしようと思つても、資本家である限り、結局そのすることは惡であり、勞働者はいくら惡人で惡い事をしようと思つても、勞働者である限り惡い事はなし得ない、もし惡い事をしたとすれば、それはその人が勞働者でなくなつてゐる時だといふやうに、作中の人物を取扱つてもらひたい、さういふ見地に立つて歸納の材料を集めて貰ひたい。——これが私の注文である。

そして、さういふやうにして貰つてこそ、始めて私どもは個人に對する愛憎を離れて、現在の社會組織に對する批判の眼を開くと共に、その組織に内在する惡をしみ〴〵と痛感し得るのではあるまいか。

が、その個人に對する愛憎を離れるといふことが好くない。そんな事は少數の無力なインテリゲンチヤのことだ。我々はあくまで資本家を資本家として憎むばかりでなく、個人としても憎み、勞働者を勞働者として愛するばかりでなく個人として愛しなければならぬ。そして、大衆を驅つて我々と同感せしめなければならぬ。そのためには資本家を頭から惡人とし、勞働者を頭から善人と決めてかゝるのも已むを得ない。それが我々の戰法である、我々の文藝は闘爭の具であると云はれるなら、我又何をか云はむやだ。たゞさうなれば、近頃のイデオロギイをもつた作品なるものは、在來のいはゆる勸善懲惡の小說と少しも選ぶ所はない。いや、勸善懲惡の小說が善惡のカテゴリイを當て嵌めて、人間を截然と二つに區別しようとしたのに對して、それはもつと固定的な資本家と勞働者といふカテゴリイ

を當て嵌めて二つに分けようといふのだから、一層專斷的な、一層器局の狹いものとも云はれよう。さういふ作品が民衆の最も喜ぶ所だとすれば、それに對して、私は何とも云ふことは出來ない。たゞ勸善懲惡の小說が人間の一面のみを見て、勸善懲惡としても極めて力の弱いものとなつたと同じやうに、同一の理由からして、近頃の作品が闘爭の具としても甚だ力の弱いものとなりはせぬかを憂ふるばかりである。そして、その力の弱い所に氣づかれたればこそ、最近に至つて、事新しげにリアリズムとの關係が論ぜられ出したのではないか。

(五)

私は既に云はむとする所を盡した。が、近頃のいはゆるイデオロギイをもつた小說の特徴として、もう一つどうしても見逃せないのは、それが決して他を許さない傾向を持つてゐることである。自分と自分の仲間とは許すが、對手は決して許さないことである。これ

は闘爭の具としての文學にあつては當然のことかも知れないが、リアリズムの文學と比較し來る時、誠に面白い對照をなすものと云はなければならない。

リアリズムは常に物の兩面を見ることを特徴とした。物の兩面を見るといふことは妥協の始まりである。（物の兩面を見る人間に喧嘩は出來ない。）既に妥協である、從つて對手を許すことである。對手を許す位だから、どうしたつて自分の作中の主人公を許さずには置かない。この作中の主人公を許す――いかにも嚴正に取扱つてゐるやうな顏をしながら、結局、その主人公を許してゐるといふことは、大體においてリアリズムの作家の通有性ともいふべきもので、フローベルもさうであつた、モオパスサンもさうであつた、ドストエーフスキに至つては殺人者を許し、賣淫者を許し、いかなる邪惡でも吝嗇でも汚辱でも天下に彼の許さなかつたものは一つもないと云つていゝ。眞個、他を許す傾向の文學は彼に於てその最高潮に達したのである。私が一時熱情をもつてこの作家に傾倒したのも、それがためであつた。私ばかりでない、ドストエーフスキに愛着を感じた程の人々は皆さうであつたらう。同時に彼が生前闘爭を生命とする主義者の仲間から排斥されたのは、いろいろの理由があつたとは云へ、要するにこの他を許さずにはゐられない性向のためであつたといふことも、私はこの際考へずにはゐられない。

リアリズムの作家のうち、どうしても他を許すことの出來ない性向を持つて生れた作家が、私の知る限りでは、たゞ二人だけあつた。一人はレフ・トルストイであり、今一人は夏目漱石である。たゞ二人とも、他を許すことが出來ないと共に、自分をも許すことが出來なかつた。自分を許すことが出來ないために、トルストイは晩年ヤスヤナ・ポリヤナの自宅を出て、荒野の一孤驛に死んだ。漱石先生に就いては、まづ「それから」の代助を見よ、「彼岸過迄」の須永を見よ、「行人」の主人公を見よ、一として他を許さぬと共に、自分をも許すことの出來ない主人公の苦闘を描いたものでないものはない。「道草」は小宮君の評によれば、最早自他を許す人になつてゐるといふが、私のやうに後暗いことの多い人間は、あの主人公の前へ出れば、なほ肅然として襟を正さずにはゐられない。たゞドスト

エーフスキの作品のみが私を許してくれるのである。

私はいはゆるプロレタリヤの作家が他を許さざることを咎めない。たゞ彼等は何故他を許さざる反面に於て、自己と自己の仲間をのみ無條件に許さうとするのであらうか。現實に眼を閉ぢるの病所はこゝにも現はれてゐる。私どもが主義者の作品に飽き足らない根底は、實にこゝにあると云つていゝ。（昭和四年十二月「東京朝日新聞」）

醍醐味

私は子供の病後の養生のために、六月中旬から内房州保田の海岸に來てゐた。二ケ月は無事に過ぎたが、近頃になつて三人の男兒が三人とも前後して下痢を始めた。母親は罪をこの地の牛乳に歸した。成程、房州の牛乳は東京のそれに比して色が黄色い、密度が濃厚でない。そして、東京の牛乳はこの盛夏でも二十四時間位は平氣なのに、こちらのは三四時間でもう分解作用を始める。これ等の點から見ると、どうも房州の牛乳は劣つてゐるやうに思はれる。牛乳そのものに缺點はなくとも、少なくとも搾取後の處置法に缺點があるらしい。かういふ譯で、私も一應家内の説に贊成して、子供にも當分牛乳は飲ませないことにした。中にも、三歳の末兒は一日も牛乳なしで濟まされぬ處から、やむなく一人先へ歸京させるやうに取計らつた。

醍醐味

牛乳で腹を悪くしたものは、必ずしも私の子供ばかりではない。大聖世尊釋迦牟尼佛の如きも、腐つた牛乳を飲んで大腸カタルを起して、糞だらけになつて世を去られたと、ちやんと歴史に残つてゐる。涅槃寂滅なぞといふと、いかにも尊げて美しく、千古にわたつて萬人渇仰の境地だが、大腸カタルと聞いては、いくらお釋迦様でもお座がさめるが、これは出たらめではない。腐つた牛乳に醍醐味なぞといふ厳めしい名をつけて、弟子達にはお前達のやうな修行の浅い連中の飲むものぢやないといつて、滅多に飲ませず、地中に埋けて置いたまゝ、自分一人でちびり〳〵遣つてゐたものだから、とう〳〵下痢を起して、それが原因で死んだと傳へられる。兎に角牛乳は怖い。十歳に充たないいたいけな子供達が海水浴場で涅槃寂滅されても困ると思つたから、私も愚妻の主張に同意したわけだ。

しかしあれだけ不評判な、刑事上の罪人まで出した東京の牛乳よりも、房州のそれが劣つてゐるといふ點については、なほ一抹の疑ひを殘してゐた。況して市の當局者が房州から牛乳の大量輸入の計畫を立てゝゐると豫て傳へ聞くにおいてをやである。で、つまりこ

れは牛乳が悪いのでなく、處置法が悪いのだらうと腹ではきめてゐた。處へ、友人のA君が見舞ひがてら遊びに來てくれた。それは順天堂小兒科擔當のお醫者さんで、年こそ若いが、專門家のチヤキ〳〵である。で、早速牛乳の話を持ち出して伺ひを立てると、何の事はない、疑團立ち所に氷解した。A君いはく、それは冷い牛乳を飲ませたのではないか。正にその通りだ。上の兒童二人は海水から上がつて來て咽喉の渇いてゐるところへ、氷牛乳（冷藏庫で冷やした上に、氷をかき込んだもの）を一合づゝ三日間つゞけて飲ませた。末の兒はまさか氷牛乳ではなかつたが、他人の家にゐることではあり、ガスのない處から不精をして、牛乳を沸かさないで、そのまゝ飲ませたこともあるらしい。

A君それを聞くと、それは牛乳が悪いのではない、冷いのが悪いのだ。一體、房州あたりの生草を食つてゐる牛の乳は、東京あたりの枯草や穀類を食はせてゐるものに比して、密度も淡く、色も黄色い。が、滋養分には變りはない。それに牛乳は今の時候では三時間位放置すれば分解作用を始めるのが普通である。が、こゝら邊の清淨な空氣中にあつては、

先づ乳酸菌を生ずるのが普通で、乳酸菌は腹の中へ入つて、他の菌類を殺す力はあつても別段害になるものでない。整腸劑ビオフェルミンの如きは、この菌を應用して作つたものである。それだから、牛乳の多少酸つぱくなつたもの位は飲んでも決して害はない。うんと腐つて、他の菌の繁殖したものでも、大腸を冒すことはあつても、決して胃や十二指腸を冒すものではない。吐氣があるのは胃か、小腸でも上の方を冒されてゐるので、これはどうしても冷たい牛乳を飲んだせゐだと見做さなければならない。處で、蛋白質の冷えたのは胃や十二指腸に取つては恐ろしい。この間も、ミルクセーキの中毒だといつて、一遍に八人の患者を警視廳から送つて來たが、見ると、皆この冷たい蛋白質に遣られたので、吐瀉が烈しく、三日間も續いて、中には死にかけたのもある。つまり牛乳には中毒といふことは滅多にないので、たゞ冷たいのが好くないのだと。

聞いて見れば全くその通りだ。愚妻の如きも、一昨年あたり冷藏庫へ入れておいた牛乳を寢しなに飲んで、ひどく胃腸をやられたと白狀した。これに反して、腐つた牛乳からは

現にカルピスといふものを製造して世に行はれてゐる位だから、大した害はないに違ひない。たゞお釋迦樣の場合は特別だ。あれは餘程他の黴菌が繁殖してゐたに違ひない。それにお釋迦樣も大腸をやられて下痢したので、胃や十二指腸を冒されたのではないらしい。カルピスの如きも、他の黴菌を一切殺しておいて、新たに純粹の乳酸菌を繁殖せしめたものだと聞く。いづれにしても、牛乳の腐つたのはあまり恐ろしくないが、冷たいのが恐ろしいといふ事實は、吾々の生活に極めて密接な事柄でありながら、世間の人は私同樣あまり知らないらしい。これが私の匆々の間にこの一文を草するに至つた動機である。

が、これだけでは、どうしても文藝欄の原稿になりませんかな。では、お釋迦樣の涅槃の幻滅を說いた序に、もう一つ英雄の死について同じやうな例を擧げておきたい。これも最近德富さんの「國民史」の織田氏の部で讀んだ話だが、上杉謙信といふ人は英姿さつさうとして、疾風迅雷の如く、到るかと思へばまた忽ちにして去るといつたやうな、兎に角非常に敏捷な人のやうに少年時代から考へてゐた。しかるに、事實は大酒を飲んだ結果、

大兵肥滿のよた〳〵した男で、(遺物の鎧の胴を見てもわかるさうな、)北條征伐の前夜厠の中で卒中が起つて、全身不隨のまゝ、三日間寢つゞけに寢て死んで行つたといはれる。いづれにしても、上杉謙信と中氣とは、私どもの頭の中ではお釋迦樣の大腸カタルと同じやうに、どうしても一緒にならない。その他古今の著名の士で、世上に美しい死を傳へられてゐるものの中でも、好く調べて見たらこんな例はいくらもあることであらう。

(昭和二年八月「報知新聞」)

雅號考その他

堺枯川氏――枯川老と云ひたい處だが、老だけは遠慮しておく。今に小生自身も老と云はれさうな氣がするし、その昔漱石先生を初めて漱石老と云ひ出して、心からいやな顏をされたことを覺えてゐる。老と云はれるのは誰しも餘り好い氣持ちのものでないらしい。殊に枯川氏にはこの際大いに若返つて貰ふ必要がありますからな。しかし枯川氏とは、御當人の好きと嫌ひとに頓着なく云はずには置かない。第一枯川氏と云はなければ、小生は二十年前の親しみを感じない。御當人はおれが疾くに枯川といふ雅號を廢めたことを斷つて置いたのに、未だ枯川と云ふ奴があると云つて、何處かで大分赤くなつておこつてゐられたやうだが、そりや無理だ。元來名前といふものは、自分のものと云ふものの、あれは自分の都合のためにあるよりも、他人の都合のためにあるものだと自分は考へる。それに

親が一時の氣紛れで附けてくれた名前を、自分が選んで附けた名前よりも大切にする理由は何處にもないではありませんか。一時雅號を廢止することが流行つて、故人片山伸氏は天弦で賣り出したのを廢め、中村春雨氏は戸籍通りの吉藏に返られた。その外にも大分あつたやうである。私にはその氣が知れない。兎に角雅號なるものは、自分が好きで、考へに考へ拔いて附けた名前である。(さうでないかも知れんが、大體さう認めても好からう。)それを何ぞや、自分の趣味が變つたと云つて、勝手に廢められては、大きにハタ迷惑だ。小生などは米松といふ百姓のやうな、乃至藝者のやうな、立派に親の附けてくれた名前があるにも拘らず、一旦草平と名告つた以上、誰が何と云はうとも、たとひ雅號を附けてゐるものが小生一人にならうとも、死ぬ迄草平で通す積りでゐます。なに、反動的傾向の日本だ。今に又雅號がイヤになる程流行つて來ますよ。

雅號問題はその位にして置いて、小生は枯川氏には敎へを受けたとも云はれないが、人生問題ではいろ〳〵お世話になつてゐる。その枯川氏が先頃市會議員の候補者に立たれ

た。恰度その頃小生は腹膜炎で腹を切開して、長い間順天堂に寢てゐました。併しかう云ふ場合、口先だけで恩が返せるものなら返しもしたし、それに牛込區は小生二十年來舊住(?)の地ではあり、一つ應援演說でもしやべらせて貰はうと考へ、その旨枯川氏に通ずると共に恢復の日を一日千秋の思ひで待つてゐた。(一日千秋の思ひは應援演說のためばかりだと取られると、少しウソになりますがね。)處が、選擧の前日三月十四日になつても、退院どころか、寢臺から下へ降りることも出來ない。とう〳〵約束を果すことが出來ないで殘念な思ひをしました。(尤も、知らるゝ如く、氏は小生の應援演說などなくとも最高點で當選したのだから、一向殘念でもなかつたらうが、小生だけは兎に角殘念でした。)で、仕方がないから見舞に來る牛込區の住人を捕まへて、寢臺の上で應援演說をして僅に心遣りをした。中には、小生の意を體して、知人といふ知人へ悉く枯川氏のためにハガキを出した男もある。(その男などはヒドい、或候補者の運動者になつた親友から菓子箱を貰つて、菓子だけは喰つて置いて、ハガキは枯川氏のために出したのだから。何卒この男を檢事局

へ引張らぬやうにして下さい。)こんな事を云ふのは、なにも小生が氏のために一臂の力を盡したことを後になつて恩被せがましく云ふためではない。(考へて見ても、寢臺の上の應援などはあまり效果があるとは思はれない。)たゞ當時わが枯川氏の人氣はかくの如く素張らしいものがあつたと云ひたいためである。

處で、小生の本當に云ひたいことはこれからだ。いよ〳〵當選者が發表になつてから、小生の應援演說を聞いた連中が寢臺の側へ來て云ふには、「堺さんの演說の人氣は素張らしい。しかも或程度まで傍聽者が入ると、警官が垣を張つて、もう飽和狀態になつたから入れぬと云つて、來る者も〳〵追ひ返して了ふ。他の候補者の場合はいくらでも入れる癖に、そんな眞似をするから皆腹を立てゝ、『ナニ明日入れてやるから構はない』と云つて歸つて了ふ。妨害するつもりで却て援助したやうなものですよ」と。這般の事情はもう世間周知のことだから、私が改めて云ふ迄もない。しかし私の許へ來る奴も〳〵異口同音に「堺さんの演說を聞きに行く者は、皆相當の服裝をした知識階級ばかりで、第三階級か第四階級

か知らぬが、本當のプロレタリヤらしく見えるものは殆ど見當らない。彼等は聞いても面白くないだらうし、それよりは二圓でも三圓でも貰つた方がいゝ。それに開票の結果を見ても、堺さんの投票は皆相當達筆に書いてあつて、文字の書けないやうなものは一つもなかつた。つまりプロレタリヤは皆金を貰つて金權候補者に入れたし、堺さんを支持したものは大抵知識階級であつたと云ふ面白い矛盾を生じてゐる。一つは牛込區だからかも知れませんがね」と云つたものだ。私はそれを聞いて考へさせられた。考へさせられたばかりでなく、成程と思つた。現に私の寢臺應援を聞いて同感してくれた人々の中には、待合や料理屋の主人さへある。しかも彼等は會つて話しをすれば相當の紳士で、物の判る人達である。(さう云ふ營業者の中にも、物の判る紳士のあることは、先達て犧牲となつた山本宣次代議士の家が有名な割烹店であつたといふ事實から見ても、否定はさせない。)その人達は營業上いろ〳〵な勸說と壓迫とを受けながら、內實堺氏のために投票してくれた(と私は信じてゐる。)一體、この事實は何を語るものであらうか。

結論として、私は市會議員堺利彦氏に云ひたいのだ、「貴下は日本大衆黨員であり、そして、大衆のために盡力しておいでになる。それに異存は少しもない。乍併議會政治を是認して暴力を否定される以上、貴下を支持してくれるものは現在の變則な過渡期にあつては、眞のプロレタリヤでなく、貴下方から早晩亡滅すべき運命を有するものと宣言されてゐる所謂インテリゲンチヤである」と。

なほこの外にも書きたいことが三四項あるが、與へられた紙數も充ちたし、それに病後で勞れもしたから、他日の機會を待つことにする。

（昭和四年六月「文藝春秋」）

Situation から生ずる緊張味

僕は局面（situation）から來る興味が好きだ、劇でも小說でも、それから昔でも今でも。局面とは脚色（plot）の横斷面に過ぎない。局面に興味を有つのは、つまり脚色に興味を有つことである。どうせ脚色に興味を有つ位だから、僕の趣味は平俗だ。平俗な趣味は一般的にして且恒久的なるものだ。アリストテレスも云つてゐる、曰く性格がなくても劇は成立つ、しかし脚色のない劇はあり得ないと。まあ、この位根本的なものだ。根本的――つまり初步だ。初步で根本的で、一般的で恒久的な趣味を有つてゐる僕の主張に、なぜ共鳴者なり追隨者なりが一人もないのだらう？　あまりに一般的なせゐかも知れない。

その昔、さうだ、僕が朝日新聞の文藝欄を編輯してゐた時分だから、今から二十年前、丁度明治四十四五年頃のことだ。その頃は所謂自然主義の文學が衰頽期に入つて、どれも

これも平板單調な身邊小説に過ぎないといふ非難が高かつたから、僕はその弊を矯めるために、少し situation から來る緊張味にも興味を有つやうにして見たらといふやうなことを文藝欄の隅で提唱して見た。すると、當時の文壇に於ける耆宿森鷗外先生から、今頃 situation に興味を有つなぞは anachronism だとばかり、眞向からぴしやりと遣られてしまつた。近頃の人はあまり知らないだらうが、昔から鷗外先生の論敵に對する態度は、それこそ胥に聞えた凄いものでしたからね。何しろ相手は名だゝる學者だ。こちらは——今でもあまり本を讀まないが、その頃は一層無學だ。前に一寸引用したやうな、アリストテレスが僕の背後に附いてゐてくれることなぞは丸で知らない。僕も口惜しいには口惜しかつたが、「畜生！　思ひ遣りのない大家だな」と思ふばかりで、手も足も出ない。殘念ながら、その儘慴伏してしまつた。

慴伏はしたが、敢て心服したわけではない。自然主義の小説の平板單調を救ふものは、作者がもう少し situation に興味を有つ外ないといふ信念は變らなかつた。さうかうして

ゐる間に、菊池寛君が出て來て、「恩讐の彼方に」の一篇で天下の讀者圏を浚つて行つてしまつた。見ると、二十年の餘生を擧げて洞門を刳り拔いてゐる乞食僧を、年來尋ねる敵と知りながら討つことも得せず、共に手を扶けて洞門の開鑿に當るばかりか、いよ／＼それが拔けた時には、射し込む月光の下に老若二人が恩讐を忘れて相抱いて泣くといふ一場面は、要するに situation から來る緊張した情味を高調したものに外ならないではないか。おやと思つてゐる間に、今度は所謂大衆小説が擡頭して來た。大衆小説は要するに筋で讀ませる昔の通俗小説に外ならない。筋は plot である。卽ち situation から來る興味である。これでは宛然僕が云はうとして云ひ得なかつたことを時代の推移が代つて證明してくれたやうなものではないか。勿論、「恩讐の彼方に」は僕が書いたのでないから自慢にはならない。大衆小説が situation に興味を有つてくれるのもいゝが、あゝ一律一體のどれを見ても代り映えのせぬ月並の situation でも困る。が、少なくとも situation に興味を有つた小説の勃興は僕にとつて嬉しいことには違ひない。

鷗外先生には前後五六回しかお目に懸つたことはないが、先生に對しては、僕としては忘れ難い情味を抱いてゐる。先生が亡くなつたから攻擊するのではない、生きてゐられる間は云ひたくも云へなかつたんだといふことは、前に懺悔して置いた通りだ。今日先生在さば、僕は膝詰めで云ふ。先生も笑つて僕の言を嘉納されることと信ずる。

Situation は plot の横斷面であると云つた。もつと學問的に云へば、situation とは人物と事件との相互作用の結果で、その situation の解決が crisis（危機）である。例へば、關守が義經を捕へるために關を固めてゐる。これだけでもう一つの situation である。そこへ紛らはしい山伏の一行が通りかゝつた。第二の situation に移つたのである。關守は一行中の强力が義經らしいといふ疑ひをかけ、先達の辯慶がさま〳〵な手段でその疑ひを解かうとする。第三の situation である。それを見て、見物は果して山伏の一行が無事にこの關所を通られるかどうかと不安を抱いて、大いに緊張する。處が、關守は一行が尋ぬる亡命者であることを看破しながら、辯慶の赤誠に打たれて、素知らぬ顏で一行を通してや

らうと決心する。これがこの situation の解決である。僕が situation に興味を持つといふのは、畢竟その situation から生ずる緊張味を好ぶ意味に外ならない。多くの作者の中でも、それが自然であつて、同時に思ひも寄らないやうな situation を捕へて來て、私どもの感情を煽つてくれるのは、僕の知る限りに於ては、何と云つてもドストエーフスキを以て最とする。變つた situation と云つても、通俗作家のそれは凡ていけない。いくら變つてゐても、その裏のカラクリが見え透いては私どもの感情を動かすに足りないからである。僕は初めてドストエーフスキの「罪と罰」を讀んで、あの主人公ラスコリニコフが自分の罪を公衆の前に告白しようとして、先づその前に可憐なソニヤにそれを打明けようとする——主人公自身の言葉に從へば、自分一人では背負ひ切れなくなつた心の負擔を彼女にも半ば分擔させるために逢ひに行く、あの場面に到つて、昂奮のあまり幾夜も眠れなかつたことを記憶してゐる。僕をそれ程迄に昂奮させたものは、あの主人公と女主人公との二人が立たせられた局面——つまりその緊張した關係から來る pathos である。僕が situ-

ation に興味を持ち出したのは、全くこゝに始まると云つていゝ。

「罪と罰」があまりに舊いと云はれるなら、最近讀んだゴルスワージイの「墜落者」を例に取つてもいゝ。これは最近も最近、僕としては一昨日つれ〴〵の餘り手許にあつたこの書を取上げて、最初は讀んだり讀まなかつたりしてゐたが、だん〴〵面白くなるので、昨夜一晩がゝりで讀み上げたばかりだ。大體の筋を云へば、退職牧師の娘、妹三人もあり、或富裕な知事の家に縹緻望みで貰はれたが、夫婦の間に愛なく、因襲と體面とに閉ぢ籠められて、牢獄にゐる思ひ、別に世に容れられざる文學者あり、その說に動かされて、終に家出して生家に歸る。そこにも居たたまらずして、三日目にその文學者を訪ね、助言を求む。家は脫出したるも、素より職業婦人として自立の出來るやうな質の女でない。文學者は自分の家に保護しようと云ひ出すも、女主人公は「自ら與へずして取るに忍びず」と云ひて、とう〳〵その家を辭す。「與へずして取らない」とは、彼女が前夫に對して立てた誓言で、つまり文學者に對しても、その感化は受けながら、未だ愛を感ずるに到らないので

ある。で、三箇月の間洋品店の賣子として働くうち、友人に發見せられ、知事の家に連れ戻さるゝを恐れて、再び文學者に救ひを求む。永い流浪の間に氣も挫け、文學者を慕ふ心も生じて、今度は相手の云ふがまゝに、二人同棲することになる。が、それと知つた知事の方では、文學者に對して損害賠償の訴訟を起したので、それが拂へなければ、文學者は破產を宣告されるばかりか、その訴訟が評判となつて、彼は在來關係のあつた雜誌社とも絕緣せられ、收入の途も絕えようとする。彼は最初それを同棲の女に隱してゐたが、婆やの口からそれを聞き、更に元の夫からは現在の男の家を去つて、いづれかに獨居すれば、一生生活費だけは支辨してやると迫られ、吾々の女主人公は「死すともそれを受けず」と峻拒した上、終に男の不在の間にその家をも脫出することになる。これが三幕目の終りで、こゝ迄は別に大したことはない、たゞ吾々は女主人公が三界に身を容れる所のない窮境に陷れられたことを知るばかりである。が、四幕目は素晴らしい。四幕目は Derby の競馬場に近い "The Gascony" と稱ばれる料理店の hall で、吾々は前の幕切れから六箇月目

に再び彼女の姿を見出すのである。その間の彼女の流浪生活が前よりも一層切迫したものであつたことは想像するに難くない。彼女は給仕(ウエーター)に背を向けたまゝ、何一つ注文もしないで、ぼんやり卓子に凭つて頰杖を突いてゐる。彼女は勿論人目に立つ程の美人だ。いろいろな男がその顏を覗いて行く。彼等は勿論彼女を金で買ふことの出來る女だと思つてゐるのだ。とゞ一人の青年――これは競馬で大分儲けて來たと自分でも云ふ男だが、――この青年が何度も女の前を往復した後、側へ寄つて行つて、給仕に三鞭を注がせる。女は默つてそれを飲む。いろ〳〵話し掛けて見るが、餘りに女の樣子が素人臭いので、青年はやが「今夜が初めてか」と訊く。女は「初めてだ」と答へる。それから青年も同情して、「いろんな不幸に逢つて來たのか、」「淑女か、」「名前は?」といふやうに訊ねる。名前は勿論名乘らない。「いろんな難儀にも逢つた、數日間食はないこともあつた」と、女が呟くやうに云ふと、青年は吃驚して「ぢや、何かもつと固い物を召上れ、固い物を!」と、急に云ひ出す。それを聞いて、女が hysterical に笑ひ出すあたりは寧ろ凄愴だ。青年が金を與へよ

うとしても、女は例に依つて「わたしは與へずしては取らない」と答へる。なほ青年が同情の念から女の投げ出した手に一寸觸れた時、女はその意味を取り違へて、「今はいけない、後に」と云ふ。後にとは、既に死を決してゐるからである。青年が初めて drive にでも出ませうと、勘定を拂ひに行つてゐる間に、女主人公は文學者の家から持ち出した、彼が催眠劑として服んでゐた莫比(モヒ)の小罎の全量を仰いで死ぬ。これが大詰めだ。

思はず長い梗概を書いてしまつたが、僕の云ひたいのは、四幕目の女主人公と見知らぬ一青年との間に交される一見無意味に近い、何でもない會話が、彼等の置かれた situation の壓力のために、いかに意味の深い、悲痛な言葉となつて、ぴち〳〵活きて躍つてゐるか、それは僕の拙い梗概からでもほゞ想察されるであらうと、たゞこれだけなのだ。實際劇に於ては、その局面が切迫して來ると、何でもない日常の會話が、それだけ引離せば殆ど無意味に近いやうな言葉が極めて意味の深長な、時としてはそれを口にする人物自らも豫期しないやうな切實沈痛なものとなつて、見物には受取られるものである。そして、それが

劇の特徴でもある。が、必ずしも劇に限つたことではない。特にドストエフスキの小説には、往々にしてさう云つたやうな劇的場面を見る。僕はこの第四幕目を讀みながら、心の中では、同じドストエフスキの「地下からの消息」の中に描かれた主人公と或賣春婦との對話を想ひ出してゐた。たゞ「地下からの消息」にあつては、相手の賣春婦は極めて單純で、主人公をしてその複雜な心境を披瀝せしめる機會を與へてゐるだけであるのに對して、これは全然その逆を行つたもので、女の方は極めて複雜な心境にあるのに、男が却て單純で薄野呂で、何を云はれてものつそりしてゐるのを面白い對照だと思つた。

なほゴルスワージイで面白いと思つたのは、殆ど作者はこの幕四目を書くだけのために全篇の結構を拵へたかと思はれる程、この幕に力を入れてゐるに係らず、この幕には三幕目までの登場人物が、女主人公を除いて、一人も出て來ないことである。これには僕も一寸度膽を拔かれた。尤も「正しい裁き」の中でも、獨房に入れられた一人の囚人だけを出して、一語も白を云はせずに幕にする程の放れ業を演ずるこの作者のことではあるが。

（一九三一年七月一八日「古東多万」）

二つの相似たる脚色

凡て plot に重きを置く作家は、それが戯曲ならその劇場的效果を覘ひ、小說ならその大衆的效果を覘ひがちなものである。又さう云ふものを覘へばこそ、plot に重きを置くやうにもなるのである。で、plot に重きを置く結果は、どうしてもその作が理詰めになる。恰も詰め將棋に於けるが如く、最後まで理詰めで押して行くやうになる。これが本當に一分の隙もなく弛緩もなく最後まで押詰めて行くことが出來た場合には、その效果は全く甚大なものがあるに違ひない。例へば、獨逸表現派の作家 Georg Kaiser の（Die Bürger von Calais）を例に取つて見てもいゝ。

英吉利の軍隊に圍まれて萬策盡きた Calais の市民は、先人の築き上げたこの華麗な市を救ふために、恥を忍んで降を英國王の軍門に乞ふた。英國の王は、さらば六人の代表者

を出せ、その六人を屠ることに依つてこの市を助けようと云ひ出した。使に立つた市の長老は歸つてこれを市民に諮つた。立所に七人の志願者があらはれた。いづれも一命を市のために捧げようとする決死の士である。處が、要求せられた犠牲者は六人である。六人の犠牲者を必要とする所へ六人の犠牲者があらはれたのでは、問題はその儘片附いて、何のいざこざも起らない。Calais の光榮ある史實もさうであるさうな。處が、作者は七人の志願者があらはれることにした。さうなると、それぢや私一人は止めませうとは、衆人環視の間にあつては、他の志願者に對する見えからしても云はれない。いづれも、吾こそと進んで已まない。そこで鬮引といふことになる。今引く一本の鬮が自分の生死の岐れ目となる。それだけでも實に恐ろしい situation だ。尤も、自分の命は最初から捨てる覺悟で志願したには相違ない。それにしても、彼等にはなほ妻もある、子もある、老いたる親もある。彼等がその鬮を引く前に死ぬ以上の苦しみを嘗めたのは當然過ぎる程當然である。然も彼等は些の惡びれる所なく、いづれも犠牲者の鬮に當ることを冀ひつゝ鬮を引いた。處

が、引いて見ると、どれもこれも當り籤ばかりで、空籤は一本もない。最後に長老自身の手に殘つたのも當り籤であつた。鬮引はもう一度遣り直されなければならない。つまり死に優る苦しみが引延ばされただけである。一同は再びさわつき出した。彼等に取つて、死ぬことは左程苦しくない、それよりも死ぬか生きるか決定しない、その不安のつゞく方が一層耐らないからである。

が、長老の考へは別にあつた。彼の見る所では、自ら進んで死を志願した人々と雖も、未だ本當に死を覺悟してゐるとは思はれない。見えや名譽心、縱しんばそんなものではないにしても、一時の客氣に促されたものでないとは何うして云はれよう。何處かに自ら欺いてゐる所がある。その證據には、死を免れる一人が未だ決定されないからと云つて、そんなにさわ〳〵騷つくではないか。市民全體のために犠牲になる——さう云ふ尊い名譽を荷ふためには、そんな中途半端な決心であつてはならない。そのためには、もう一度死よりも強い苦しみを嘗めて、更に出直して來る必要がある。依つて、鬮引はもうこれ限りに

して、明日の朝六時迄にもう一度城門の前に集まつて貰ひたい。一番後れて來る一人だけを除外して、後の六人が揃つて約束の刻限までに英吉利の軍隊へ出向かうと、改めて宣言したのである。

で、翌日の朝になると、長老を除いた六人の志願者は吾勝ちに城門の前に集つて來た。めい〳〵口にこそ出さないが、命助かりたさに一人他に後れたと云はれてはならないと、恥を思ふ心がこの期に及んでも尙强く働いて、彼等の足を早めたのである。處が、六時が近づいても長老一人は未だ遺つて來ない。さては彼こそ命惜しさに闘引にもあんな trick を使つて、後れて到る者を除外すると云ふやうな宣言をしたんだなと、決死の人々もそろそろ不平を口に上せ始めた時、晨朝の鐘が緩やかに鳴り出した。そして、その鐘の音と共に、一挺の棺が九十歳にも餘る、それこそ口も利けないやうな、よぼ〳〵の老翁に守られてそこに着いた。棺の中には、今朝明け方に自殺した長老の亡骸が眠れる如く横はつてゐた。遺書と見られる紙片には、たゞ「吾は一人先に行く」とのみある。あゝ長老は行かれ

た、長老は吾等に先立つて行かれた。かうなればもう一人も助かる者はない。六人の志士は皆打沈んだ、午併朗らかな氣持で、城門をさつと開かせながら、しづ〳〵と死出の首途に着いた。

以上の梗概でも略察せられるやうに、作者 Kaiser はこの作を終ひ迄理詰めで押通してゐる。最初六人の犧牲者を要する所へ七人の志願者が出た——それも、五人出た後へ兄弟が同時に出たことにして、極めて自然らしく拵へてはあるが、その點が何うやら拵へ物らしく見えるばかりで、自餘は五分の隙も弛緩もなく、極めて自然に最後まで押して行く。その手際は實に鮮やかなものだと云はなければならない。

處で、私はこの作を讀んで、いや、讀んでゐる最中から何うしても R. L. Stevenson の "The Suicide Club" を連想せずにはゐられなかつた。恐らくはこれは私一人ではあるまい。英文學の讀者は、こゝに掲げた私の梗概を讀んだだけでも、必ずや Stevenson のあの怪奇な傑作を想ひ起されたことであらう。いかに世紀末の神經衰弱時代であつたとは云

へ、倫敦の眞中に自殺を欲する人間が集つて club を設けるなぞといふことが、實際の世の中にあらうとは思はれない。併し一たびさう云ふ club の存在を假定すると、この話の中へ出て來る Malthus 老人のやうな臆病者で、自殺する氣なぞ毛頭ない男が、單に恐怖を弄ぶといふ人間に許されない強い情熱の昂奮を味はふために、わざ〳〵こんな club に出入する心理も首肯かれる。いや、單に首肯かれるばかりでなく、何うかすると讀者自身も Malthus 老人のやうになりはせぬかといふ錯覺を生じて、思はず慄然とする。つまりこの作はそれ程に人の心を掴むやうに、いはゞ自然に、理詰めに出來てゐるのだ。こゝに私どもは兩者の相似を見ずにはゐられない。殊に圖引で人の生死を決すると云ふやうな、頓狂と云つていゝか輕薄と云つていゝか、奇想天外、いづれにしても人間性を蔑視した行き方は、何うしても我が Stevenson の獨創であると信じたい。私は敢て Kaiser の作が Stevenson を模倣したものだとは云はない。併し Kaiser が "Die Bürger von Calais" を書く前に "The Suicide Club" を讀んでゐる以上、彼がこの作から暗示を得たことは拒まれないやうに思ふが、何んなものであらう?

こゝにもう一つ我が Stevenson から暗示を得たらうかと思はれるやうな作に、Emile Zola の "Germinal"（一八八五年）がある。私は proletalia 文藝の旺盛になつてから、最近もう一度この書を讀み直して見た。そして、日本の作家——或ひは諸外國の作家を引包めてもよい——に依つて物されるやうな、百の proletalia 小說も五十年前に書かれたこの一作に若かずといふ斷案に到着したものである。但し私は同盟罷工を描いたものとして、いかにこの作が優れてゐるかを今こゝで冗々しく紹介してゐる暇を有しない。私の云はんとするのは、あの死のやうに冷刻な露西亞生れの虛無主義者 Souvarine の手で用水の水を炭坑の竪坑へ引いて、炭坑の破壞が企てられるや、底からの汎濫に依つて逃場を失ひ、坑道の天井へ追ひ詰められた男女三人、この三人の三角關係に就いてである。

三角關係といふ言葉は何時頃、何處の國で始まつたか知らない、多分、獨逸あたりで、"Werthers Leiden" が全國の男女を風靡した時分から始まつたのではないかと思ふが、い

づれにしても三人三つ巴になつて爭つて、三人ともその渦中から脱することが出來ない、そして、最後に三人ながら身の破滅に終る、これが三角關係の定法である。尤も、その渦中から逃れられないと云つても、逃れないのは當人達のわが儘だ。凡ての戀がわが儘であるが如く我儘である。戀さへ斷念すれば、何時でもその渦中から脱することが出來るのだ。處が、若し戀を斷念しても、何うしても逃れることの出來ないやうな絶體絶命の立場に置かれて、しかも尙三角關係の嗤み合ひを續けなければならぬ男女があつたとしたら、何うであらう？　恐らく彼等の嗤み合ひは一層絶望的に、一層獸的に、殆ど正視するに堪へない位死物狂ひになる外あるまい。しかも Zola はその死物狂ひの爭ひを正視して、瞬き一つしない。そして、急がず遽てず、悠々としてその一擧手一投足を最後まで丹念に描寫して行く。眞個、この作者こそ驚くべき怪物、讃仰すべき巨人と云はざるを得ない。

概略を云へばかうだ——

本篇の主人公 Etienne は失業して北佛蘭西の炭坑地に來つて、坑夫 Maheau の家に身

を寄せるやうになつた。Maheau は働き盛りの坑夫ではあるが、家には六十に餘る老父の外に子供が澤山あつて、いくら働いても生計はあまり樂でない。そこで長女の Catharine を始め十三四になる Jeanlin といふ男の子も炭坑に入つて、荷車の後押しをして働いてゐる。老父も役には立たぬが、一生を坑夫として働いて來たと云ふので、會社の情けで爐の番人にして貰つてゐる。處で、かね〳〵 Catharine に思ひを寄せてゐる Chaval といふ壯佼があつた。女の方ではそれ程にも思はない。殊に Etienne がわが家に同居するやうになつてからは、兎もすればそちらへ心を惹かれ勝ちであつた。その傾向を見て取つた Chaval は耐らなくなつて、無理に奪ふやうにして、Catharine をわが家へ連れて行つて同棲するやうになつた。女の方でも、それ程に思ふ男の心に絆されて、兩親の機嫌は好くないながら、(兩親、殊に女親は働き手の長女に逃げられては、差當り米櫃に影響するから機嫌が好くないのである)、その儘男と同棲をつゞけてゐた。

一方 Etienne は目に文字のある所から、追ひ〳〵坑夫の中でも勢力を得るやうになつた。

そして、共産主義鼓吹の雜誌や書物に讀み耽つてその感化を受け、終に坑夫の間に同盟罷工を策するに到つた。勿論、Etienne なくとも、坑夫の生活は近年頓に苦しくなつて、資本家の搾取はいよ〳〵甚しく、暴動の勃發はたゞ時の問題であつた。Strike は終に決行された。そして、Etienne はその leaders の一人となつた。實際、その當初に於ける彼の聲望は隆々たるものがあつた。かうなると、彼の戀敵である Chaval は勢ひ資本家側の犬にならざるを得ない。彼は Etienne と喧嘩に托して、潛に相手を刺さんとしたのを、Catharine のために隱し持つたる短刀を見露はされて、逆に Etienne のために取つて押へられたこともあつた。又資本家の一人の買收に應じて、數百人の坑夫と共に坑に入つてゐる處を、同盟罷工側の坑夫のために竪坑の elevator の鏈を切つて落され、已むなく腐りかけた坑道の梯子——それは幾千段となき梯子を登つて、妻の Catharine と共に命から〳〵逃げ出したこともある。その頃から彼は坑夫の間に全く人望を失つて、誰からも相手にされなくなつた。しかも彼はそれを Etienne 一人の罪に歸して、何時かは報いる所あらんと、

深く心に決すると共に、妻の Catharine を虐待した。Catharine は到頭堪へ切れなくなつて、兩親の家に逃げ戻つて來た。

その間同盟罷工側は「吾等にパンを與へよ」と絶叫して、飢餓に瀕した女子供の行列を作つて、大示威運動も遣つて見た。が、會社側は頑として折れない。罷工が永びくに伴れて、坑夫側はいよ〳〵苦しくなるばかりだ。leaders どもに對する怨嗟の聲も生じて、指令は仲々その通りに行はれない。そこへ乘じて、會社側では、好餌を揭げて裏切者を入坑させようとする。又それを阻止しようとする坑夫もあつて、終にその間に血を見るに到つた。銃火は放たれた。いよ〳〵暴動だ。兵隊が繰出されて、それ〴〵炭坑を守護する。かうなればもう萬事終れりだ。Etienne の壯圖空し矣。Maheau の家では主人が坑口の競合ひで銃火に斃れてからといふもの、家の中は全く闇だ。賣れる物は賣り盡して、鍋まで賣つても、もう食ふ物のない日が幾日もつゞく。Catharine は母親の顏を見るのが苦しさに、或朝、何人も目を覺さないうちに、こつそり起き出して、一人入坑しようとする。その外

にパンを得る道はないのだ。入坑すれば、坑の中には Chaval が待つてゐて、彼女を見たら叩きのめすに相違ない。それを冒して迄も、彼女は入坑しようとは決心したのだ。先刻から物音に目を覺してゐた Etienne も、共に起きて來て、Catharine の悲愴な決心を見ると彼も涙含ましくなつた。彼は同盟罷工の失敗に氣を腐らしてゐた。もう野心も何もない。Catharine と二人何處か野末の果ての小舍にでも棲んで、一緒に生きて死ぬ外に何の野心もなく暮したら、さぞ幸福だらうとも思つて見た。そして、到頭「Catharine、俺も一緒に行く！」と云ひ出した。

こゝに露西亞生れの虚無主義者 Souvarine が登場する。彼の經歴からして不思議なものだが、こゝに紹介する餘白がない。たゞ彼はこの度の strike を最初から冷眼に見てゐた。罷工側が勢ひが盛になつても喜ばなかつたと同じやうに、それが衰へても悲しまなかつた。彼は一擧に炭坑そのものを破壞しようと決心してゐた。で、昨夜の間にその仕掛けをして置いて、今朝はたゞ一本の栓を拔くことに依つて、全炭坑内に濁水を氾濫させることが出

來るやうにした。そして、坑口に立つたまゝ、入坑する坑夫どもを屠牛者が自ら屠る牛の數を數へるやうに數へてゐた。その内に Etienne と Catharine の姿を見て、彼も驚いた。強ひて歸れと云つて見たが、相手は歸らない。と云つて、その理由を打明けるわけにも行かない。彼は默つて二人の姿を見送つた。

竪坑から水が流れ込んで來た。驚破（すは）！ とばかりに驚いた坑夫どもは、吾勝ちに籠に乘つて elevator で引上げられた。が、その間に竪坑の一部が崩れて、籠が通はなくなつたばかりか、見る〳〵竪坑全部が埋まつてしまつた。逃げ後れた者は悲鳴を上げて四散した。が、逃げるには逃げても、この地下の坑道から遁れ出づる道は殆どないと云つていゝ。たゞ一つの望みは、今は廢坑になつてゐる隣の炭坑へ坑道が續いてゐる。そこから遁げ出すことが出來れば出來るのだ。が、二十年來捨てられたまゝになつてゐる炭坑だから、果して坑道が閉塞されずに通じてゐるか何うか分らない。併し希望はその外にないのだから、取殘された三四十人の坑夫どもは、皆吾勝ちにそちらへ向つた。Etienne も Catharine の

手を引いて、カンテラの光を便りに、遮二無二坑道の中を傳つて行つた。Chaval もその中に交つてゐた。が、坑道は多岐である。何時の間にか別れ〳〵になつて、後には Etienne と Catharine と二人だけになつた。馬の斃れる所がある。十年來坑道の中のトロッコを運搬するに用ひられて、死なければ日の目は拜めない宿命を荷つた馬であつた。が、畜生ながら命は惜しいと見えて、底から氾濫する水に追はれて、あちこち坑道の中を駈け廻つてゐたが、坑道が崩れて狹くなつてゐた所へ、大きな胴體がつかへて身動きが出來ない。そこへ押寄せた水に呑まれて、馬は到頭そこに命を墜す。Zola はこの馬の最期を殆ど人間のそれのやうに興味と同情とを持つて委しく描寫してゐる。かくの如き獸類の死を描いた凄慘な光景は、私は嘗てこれを Tolstoy の "Anna Karenina" の中の競馬に傷いた馬の死に見たばかりだ。自然主義の描寫の見本としては、全く二幅對の絶唱である。

馬の最期を見た Catharine はたゞもう動物的恐怖に襲はれて、「自分を連れて逃げてくれ！」と叫ぶ。Etienne は彼女を抱へたまゝ、腋に達する冷い水の中を渉つて、更に一階

高い所へ登つた。向ふの隅に微かな灯が見える。行つて見ると、それは Chaval が休んでゐるのだ。もうこゝで坑道は全く閉塞して、何處へも行かれなくなつてゐるのだ。彼等はこゝで又戀敵と再會したのだ。Chaval は途中で死んだ坑夫の角燈を奪つて、二つ角燈を提げてゐた。が、油を儉約するために、一つは消してゐた。辨當に持つて來た食糧も、他人のを奪つて、三つ四つ持つてゐた。しかも二人の姿を見ると、斷じてこのパンは汝等に分たないぞと宣言して、一人で少しづゝ舐めるやうに喰べてゐた。こちらの二人は疾うに食料は盡きてゐる。空腹は刺すやうだ。Chaval は Catharine に向つて「こゝへ來い、お前にだけ分けてやる！」と云ふ。Catharine は身を震はせた。Etienne は女を妨げまいとして、立つて歩き出した。あゝ、こんな生の望みの絶え果てた大地の腸の中で、再びこの女を廻つて二人の死物狂ひの爭鬪が始まつた。女は後へ生き殘つた者に屬する。若し自分が先へ死んだら、再び相手の所有となるのだ。

かくしてその一日は過ぎた。二日目になると、Chaval は女の側へ摺り寄つて、最後の

パンの片を女に分けてやつた。女は痛ましげにその一口々々を呑み込んだ。Chaval はその返禮として、一口毎に女に接吻をさせた。戀敵の目の前で、女に對する自分の支配力を確めようとする頑强な嫉妬心から出た行動である。女は疲れ切つて、男のなす儘に委せてゐた。が、Chaval が圖に乘つて、女を兩腋に抱き緊めようとした時には、「放して、放して！　あんまり酷いわ」と泣くやうに呟いた。Etienne も兩脚をわな〳〵顫はせながら見守つてゐたが、堪へ切れなくなつて、「放せ、放してやれ！」と叫んだ。「何だ、お前の知つたことぢやねえだ。そこ退いて居れ！」と相手も吼鳴つた。Etienne は齒を咬ひ縛つて「放せ、放さぬと絞め殺すぞ！」と叫んだが、その聲には本當に殺し兼ねない意氣が籠つてゐた。Chaval も思はず飛び退つて、「なに、今度は俺の方が遣つつけてやるぞ！」と唸つた。その瞬間、Etienne はそれこそ本能に驅られて、そこらの岩を引剝して相手の頭に放りつけた。相手は避ける暇もない。腦漿は飛び散つて、敢なく命は絶えた。Etienne は茫然自失してゐた。が、Catharine が思はず聲を上げるのを聞くと、「おゝ、お前は此奴を

殺されて口惜しいか」と睨みつける。女は涙が咽喉に塞つて、聲が出ない。よろ〳〵と前へ蹌めき出ながら、男の肩に縋つて、「さ、私も殺して、殺して！　二人で一緒に死にませうよ」と叫ぶ。

その後の二人の生活！　一旦 Chaval の死骸を竪坑へ落してやつたが、水の增すに伴れて、死骸は再びそこへ浮び上つて來た——恰も二人の側を離れまいとするやうに！

私は論文を書く積りで、あまりに長く梗概を書いてしまつた。併しこの凄慘な三角關係の物怖ろしさは、主として三人が逃れることの出來ない situation に置かれた所から來てゐる。situartion や plot の面白さを紹介するためには梗概を傳へる外ない。百の私の言說よりも、梗概の方がより强く私の云はむとする所のものを傳へてくれるからである。處で、私はこれを讀んだ時、かゝる恐ろしい場面、かう迄切迫詰つた動きの取れない situation を構成することは、精力のあり餘る偉大なる天才者 Zola にして初めて出來ることだと感じた。斷じて他の追隨を許さぬものがあるとも信じた。處が、さうでない。さうでな

いことが私の愛する Stevenson を讀むに到つて分つた。

私は "New Arabian Nights" を御多分に漏れず最初の "The Suicide Club" とそれにつづく二三の物語だけ讀んで自餘は永い間讀まなかつた。これは一つは最初教科書で讀んだせゐかも知れない。最近思ひ立つて、終ひ迄讀んでしまふ積りで "The Pavilion on the Links" を讀みにかゝつた。處が、これが似てゐる。勿論、同盟罷工を描いたものでも何でもないが、切迫詰つた、動きの取れない境遇に押詰められた三角關係を描いたものとしては、正に "Germinal" と好一對をなすものである。私は今英米文學者の讀者に對して、もう一度 "The Pavilion on the Links" の梗概を繰返さうとは思はない。それに、この作では、一人の女を爭ふ二人の男は無智な勞働者ではない。いづれも教養ある紳士であるだけに、その爭ひもそれだけ modifiy されて來る。乍併差迫つた死を前にして、――この作では、女主人公の父親が銀行家で、伊太利祕密結社の金を預つてゐたが、それを使ひ込んで、軍艦を持つた結社の會員どもに追はれ、兼て女主人を愛してゐた男の別莊に逃げ込

んだことになつてゐる、――二人の男が一人の女を死物狂ひに爭ふ所は軌を一にしてゐる。二人の戀人の立場や氣持もいくらか Chaval と Étienne とに似てゐる。自分の優越を示すために、一方が一方の見てゐる前で女に接吻する場面もある。が、そんなに似てゐるにも拘らず、私は Zola が Stevenson の作から暗示を得たものとは思はない。その點は Kaiser の場合とは餘程違つてゐる。が、似てゐることは爭はれない。そして、Zola といひ、Kaiser といひ、あの雄大な構想を得る前に、吾等の R. L. Stevenson がちやんとそれと同じやうな構想を得て、既に世の中へ發表してゐたといふことは、流石に脚色の王と呼ばれるだけあつて、吾等が英文學徒として痛快に感ずる所である。私はたゞそれだけのことが云ひたかつたのだ。

一體、一人の新しい性格、前人未發の性格を捕へ來つて、これを自作の中に表現するといふことは、作者として望ましい功績には違ひない。が、それと同じく、一つの未だ曾て文學に現はれない situation を設けて、これを作中に盛るといふことも、同樣に作家とし

て望ましい功績だと、私自身としては云ひたい。從來はあまりに性格に重きを置かれ過ぎた。私に云はせれば、眞の性格は特定の situation の中に置いて、初めて現はれるものである。が、それ等の所論はいづれ他日の機會を待つことにしたい。

（昭和七年七月「新英米文學」）

芝居の中の偶然

お馴染の『忠臣藏』殿中松の廊下で鹽谷判官高貞が高ノ師直の理不盡な侮辱にたまり兼ね、小さ刀を引拔いて、おのれ師直たゞ一打ちと斬りつけたが、加古川本藏のために抱き留められて果さず、その身は切腹、代々の城地沒收となつて、これが四十七人の義士の敵討となるそも〳〵の濫觴でございますが、苟も一國一城の主、殿中に於て鯉口三寸くつろげれば、その身は切腹、家は斷絶位のことは知らぬ筈はない。それを知つてゐながら、殿中をも憚らず師直に向つて斬りつけたとすれば、判官樣にだつて、どうしても堪忍ならぬ殘念無念な理由があつたに違ひない。その理由、つまり判官樣が師直に斬りつけるに到つた動機を與へて、見物に成程さうか、あれぢや判官樣が國も家も忘れて斬りつけるのも無理はないと、から思はせるやうにすることを劇作法では motivation と申します。つまり

見物に『成程と受取らせる』意味に外なりません。これは劇を書く上には極めて必要なことで、この motivation が十分でないと、見物は默つて見てゐませんから、芝居は成り立たないことになります。ですから判官様の場合でも、實錄ではたゞ淺野内匠頭の江戸家老安井、藤井の徒、田舍侍にして江戸の情僞に通せず、主人内匠頭が勅使饗應の役目を仰せつけられたに際して、高家の筆頭吉良上野介に賂ふことを怠つたために、あんな騷動が持ち上つたんだといふことになつてゐますが、それでは内匠頭まで如何にも世間見ずの短慮な殿様になつて、やゝともすれば見物の同情の薄らぐ恐れがあるから、『忠臣藏』ではもう一つ鹽谷判官の内室顏世御前に對する師直の無態な横戀慕を持つて來て、それに依つていくら溫厚な判官様でも刀を拔かずにはゐられないやうに仕向けてゐます。これなぞも motivation を十分にしようといふ作者の用意と申して宜しいでせう。

處で、可訝しなことには、この殿中刄傷の場で判官様が師直に斬りつけようとして、白刄を振上げると、いきなり衝立の蔭から加古川本藏といふ變な男が飛び出して來て、背後

から抱き留めますね。それがために判官様は僅に師直の額を傷つけたばかりで、あまりの無念さに手に持つた白刄を放りつけますが、それも師直の背中を斜に斬り下ろしただけ、致命傷ではございません。尤も、あの時師直が殺されてしまつては、肝腎の『忠臣藏』がふいになりますから仕方もありませんが、兎に角加古川本藏が判官様を抱き留めたといふ事實は、それから『忠臣藏』が生れるか、それとも立消えになるかといふ一大事件でございます。それにも拘らず、何うしてあんな男があの場合うまい工合に衝立の蔭なぞに隱れてゐたのか、『忠臣藏』の作者は少しもその動機を與へてくれません。尤も『忠臣藏』位たびたび上演されるものになると、見物の方でも馴れつ子になつて、判官様が刀を振り上げさへすれば、本藏が來て抱き留めるものと、前から承知してゐますからいゝやうなものゝ、考へて見ると不思議です。こゝは何うしても、本藏が伴内に賄賂を使つて、主人桃井若狹之助の身を案ずるあまり、殿中に入り込むには入り込んだが、向うから來る貴人の影――それは師直でも判官でも宜しい――を見て、陪身の身を恐れて、わざと衝立の蔭に身を隱

した。すると、その前で師直と判官とのいざこざが始まつたので、出るにも出られずその儘隠れてゐたといふやうなことにでもして貰はぬと、少なくとも私どもには納得が行きません。或ひは『忠臣蔵』も元はさう云ふ場面を見せたものだが、近頃はそれを省略するやうになつたのかとも考へられます。

かう云つたやうな motive を與へられない突發事件を劇作法の上では偶然（chance）又は暗合（coinsidence）と申します。偶然や暗合は、この場合のやうに、劇の始まりのうちに――つまり劇がだん〳〵複雜化して行く段階の間に見せられるのは未だしも我慢が出來ますが、一旦劇が解決に向つてから後に見せられては、迚も見てゐられません。例へば或名妓が箱根に滞在中洪水に逢つて、同宿の或若い學士に助けられた。それがために、二人の間に戀が成立して、幾多の曲折を經た後、とう〳〵目出たく結婚するに到つたとします。これも偶然から出發したものですが、こいつは一向構ひません。處が、それと反對に、次のやうなことになると困ります。例へば新婚の密月旅行に出た新郎新婦が箱根に滞在中や

はり洪水に逢つて、新婦は幸ひに助かつたが、新郎は却て死んでしまつた。泣く〳〵歸京した新婦は、身も世もあられぬ思ひで、失戀の淵に沈んでゐる。こゝ迄は宜しい。處が、一度滿洲に戰爭が勃發して、どうせ生き甲斐のない身と、若い未亡人は特志看護婦を志願して、卒先してかの地に渡つた。この未亡人は勿論死ぬべき運命に置かれてゐます。作者はこれを死なせて宜しい。が、併しこれを死なせるために滿洲で狼に喰はれて死んだとか、雷に打たれて死ぬと云つたやうな手段を用ひたのでは、何うしたつて見物が承知しません。そこは何うしても彼女の自ら進んで身を置いた境遇、もしくは彼女自身の性格によつて死ぬやうにして遣らないと、劇にならんので御座います。つまり彼女が粉骨碎身、わが身を忘れて傳染病に罹つた兵士を看護してゐる間に、自分もそれに感染して死んだとか、野戰病院が暴戾な支那兵に襲撃されて、彼女も傷病兵と共に命を落したとかいふことにすれば宜しいので、劇の解決に偶然を使つてならないと申したのは、こゝの事で御座います。

以上は劇の脚色の上に motivation の必要を力説したのですが、motivation の必要は必

すしも脚色ばかりではありません。人物の性格の上にも、背景の上にも、小道具の上にも、勿論對話の上にも必要になつて參ります。例へば、こゝに或人物が一つの危機（crisis）に際して、それ迄知られなかつた性格の一面をあらはすとしますれば、その最も極端な例として、『義經千本櫻』のいがみの權太のやうに、惡から善に移ると云つたやうな場合に、見物をして、成程あゝ云ふ人間があゝ云ふ境遇に立つたとすれば、あゝもならうかと點頭かしめるだけの用意が必要であることは云ふ迄もありますまい。背景にしましても、近頃スキーが流行るからと云つて、矢鱈にスキー場を背景に使ふが如きは、適當なる motivation を缺くものと云はなければなりません。小道具の例を取りますれば、臺所を背景にして、甲乙二人が云ひ爭つてゐる間に、だん〳〵喧嘩が大きくなつて、あり合ふ出刄庖丁を取つて、甲が乙を刺し殺したとします。この場合出刄庖丁が臺所にあることは分りますが、もしあり合ふ鐵砲を取つて相手を射殺したとすると、一寸合點が行き兼ねます。これを見物に納得させるためには、その家の子息が兵隊にでも行つてゐて、隣村まで實彈射擊の演習

にやつて來た休憩時間を盜んで一寸生れた家へ走り寄つたが、兩親が畑に行つてゐると聞いて、そこに鐵砲を捨てゝ置いたまゝ、畑の方へ駈け出した留守の間に起つた事件だとしますれば――これもあまり巧くはないが、一應は納得が出來ませう。

一時安來節が流行した頃、新派の芝居では何でもかんでも舞臺の上で安來節を唄はせなければ、見物の承知しなかつた時代があつたと聞く。そんな時代が本當にあつたかどうか知りませんが、兎に角場當りといふやつは、適當な motivation を缺く入れことの意味に外ならんので御座います。去年でしたか、歌舞伎座でお輕勘平の道行の場が出た時、阪東三津五郎の鷺坂伴内が多勢の花四天を連れて出て來て、いはゆる野球ぜりふといふ奴で大向ふを唸らせたことがありました。始めの方は忘れてしまひましたが、一ばん終ひの『勘平返辭は何と〳〵？』と詰め寄る處で、『勘平チェンジはバットバット？』と云つてゐたやうに記憶します。これなぞは寧ろ御愛嬌の方ですが、田舍へ參りますと、私なぞの到底想像にも及ばぬことがあるさうで御座います。昔から源の義經はわが國の男の中の人氣者で、

いくら野球の選手に人氣があると云つても、迚も義經の人氣には敵ふまいと思ひますが、奥州へ行くと、さすが衣川の柵のある地方だけに、彼の人氣は一層盛んなものがあると申します。或年江戸の役者――いづれ三四流以下の下つ端連でせうが、『忠臣藏』を持つて奥州へ地方巡業に出掛けたことがありました。そして、或田舍町の小さな小屋にかゝつて、いさ蓋を明けようといふ前になつて、興行主の座主が座頭の前へ來て、『どうか一つ義經を一枚芝居の中へ出して欲しい』と云ふのです。戯談ぢやない、吾々は『忠臣藏』を持つて來たんだ。『忠臣藏』の中へ義經が出せるものぢやないと斷つたが、こちらは興行主、なかなかそんな事ぢや退却しません。『何しろこの地方は義經びゐきだから、義經が出なきや土臺見物が寄り附かないと云ひ張るのです。成程見物が來なけりや役者ばかりぢや芝居は打てない。そこが小説と違ふところだと、フライターグの劇作法にも明記してあります。そこで座頭も弱つてしまひましたが、そこは田舍廻りでもしようといふ役者のことですから膽の据わつたもので、『宜しい義經を出しませう』と請合つてしまつた。

で、何んな事をするかと當日見て居りますと、例の殿中刄傷の場で、師直の出て來る前に少し間がありますから、あそこへ義經を出さうと云ふので御座います。たゞでも出られませんから、床のチョボを使つて『鍬形打つたる御兜、小櫻縅しの御着長、金の采配手にしたる九郎判官義經公、しんづしづと立ち出でたまひ』と云つたやうな文句につれて、その通りの服裝をした義經が金襖の前へ出て參りました。さて出ては參りましたものゝ、何にもすることがありませんから、舞臺の上を二三遍ぐる〳〵廻つてゐます。そこで又チョボが氣を利かして、『さしたる用事もあらされば、一間へこそは入り玉ふ』といふ文句を附けた。その文句につれて、この義經公澄ましたもので、又もやしづ〳〵と襖の蔭へ這入つてしまつた。その後へ師直が出て來て、例に依つて、『おそい〳〵、鹽谷判官の出仕おそい！』と、判官樣を取つちめたと云ふことで御座います。

こいつは本當にあつたことかどうか、何しろ落語家から聞いたことですから、眞僞の程は保證し兼ねますが、これなぞも立派に motivation を缺く場當りの一種だとは云はれま

せう。こんなのとは反對に、motivation の最も巧い作家は、古今を通じてイブセンが第一だらうと、私としては信じてゐます。あの『鴨』だの『幽靈』だの、一度讀んだ位では前後の關係がよく分らない。何遍讀んでもその度毎に新しく發見する所がある位、その關係が緊密に繋がれてゐます。イブセンの次はゴルスワージイでも御座いませうか。

（昭和七年一月「文藝春秋」）

偶感二三

最近ヂェイムス・ヂョイスのユリシーズを飜譯してゐる。たま〳〵英國の南阿戰爭、つまりアフリカの南端トランスバールに於ける和蘭系のボーア人が大統領クリウゲルを盟主として英本國に反抗した時の噂が出てゐる。丁度それは十九世紀末から二十世紀の初頭へかけての出來事で、私が一高の入學試驗をパスした折柄であつた。入學試驗には及第したものゝ、新聞でボーア軍の記事を見ると、昂奮してたまらない。田舍の家から千圓ばかりの金子を取り寄せて、南アフリカへ渡つて、大統領クリウゲルの下に從軍しようかといふやうな途方もないことを考へてみた。そんな夢みたやうな計畫は先輩に遮られてわけなく棄てたが、それでも七月中旬及落の發表後、すぐ出せと云はれてゐた一高の在學證書を九月まで出さずに打棄つておいた。が、當時は學校も應揚なもので、受附子が自分一個の考へ

では受取れない、校長の意見を聞いて來ると這入つて行つたが、すぐに引返して來て、今度だけは受取つておくが、これからこんな事があると、すぐに退校させるぞと一應叱つた上、私の在學證書を取り上げてくれた。あの時受附子が取り上げてくれなければ、私は本當にトランスバールへ行つてゐたかも知れない。尤も、その方が早く人間一人の片が附いてゐたことでせうがね。さう思ふと、つまらない事ながら私は思ひ出す度に妙に考へさせられる。ヂエームス・ヂョイスがボーア人の叛亂をその中に取り入れてゐるのは恐らく彼の年齢が私とそんなに違はないところから、私と同じやうに、いや、アイルランド人として私以上にこの事件に興味を抱いたためであらう。年齢の共通、興味の共通。

一高在學中、私は馬場孤蝶先生に勸められて初めてツルゲーネフのルディインを讀んでみた。そして、それ迄ローマンティックな夢ばかりを文學の本體だと考へてゐた私は、初めて自然主義文學の堂奥に參して、豁然として眼の前に別天地が開けたやうな氣がした。昨日の自分は最早今日の自分ではない。俺はもう日本に於ける限られたる數の眼の明けた藝

術家だといふやうな自信を生じた。實際その當時ツルゲネフを讀んでゐるものは、長谷川二葉亭、上田敏、平田禿木、戸川秋骨、馬場孤蝶、田山花袋、島崎藤村、柳田國男の諸氏を外にしては、學生では小山内薫君と私位のものだつたから、日本に於ける十人の指の中に入つたやうな氣がしたのも無理はない。小説一冊讀みさへすればもう十人の一人になれるのであるから、妙なものであつた。

因に云ふ、夏目漱石先生はずつと後から私が強ひてツルゲーネフやドストエーフスキを讀ませてあげたのである。先生はツルゲーネフもドストエーフスキも讀まないで、讀んだと同じやうな氣持ちが分つてゐたんだから、全くこの人に敵はないと思ひましたね。

同じくヂョイスのユリシーズの中に、カランドリーノこそは男が子を孕むといふことを信じた最初の人間だといふやうなことが出てくる。カランドリーノはボッカチオのデカメロンの中へ再三出てくる有名な快男子（？）である。從つてデカメロンを讀んでゐないとヂョイスの云つた意味はよく分からない。そこでヂョイスの意味だが、そいつは一寸こゝ

でも御紹介いたしかねる。いつかも鎌倉發の電車に乘つてゐると、横濱から乘込んで來た二人の若い紳士がしきりにデカメロンの中のカランドリーノを問題にしてゐる。「どうもカランドリーノといふ奴は面白い。友人兩三名から病氣だ病氣だと云はれて、自分も本當に病氣になつたやうな氣がして來て、醫者に診て貰ふと、お前は姙娠したんだと云はれる。生れつき子を產むやうに出來てゐる女でさへ、いざ出產となると、あんなに苦しむのに、男が子を產むとしたらどれ位苦しいことだらう？　一體產むにしても何處から產むんだ、ああ弱つた、弱つた！」と歎息しながら、細君を摑へて、お前が惡い、お前が……と肝腎な處で缺字になつてゐる。それが話の落ちらしい。そこまでは話の段取りも面白く、いつそ滑稽に出來てゐるが肝腎の落ちが分らないので全く弱つてしまつた」と、丁度品川へ着くまでその話で持ち切りであつた。

私はデカメロンの譯者として二人の前に坐つて、この話を傍で聞きながら、全く搔つたいおもひをした。成程あすこは缺字になつてゐるからお分りにならないのは尤もだ。折角

自分の譯書を買つてくれた人が肝腎の處で分からないとは、何ともお氣の毒だ。敎へて上げたいが、衆人環視の中で、私はデカメロンの譯者ですと名乘るのが、私には何となく憚られた。で、もぢ〳〵してゐる間に、電車は新橋驛に着いて、二人はそのまゝ降りて行つた。あゝせめて住所でも聞いておいたらと、今でも殘念に思つてゐる。

電車の中で敎へてあげられなかつた私は、こゝでも披露するわけには行かない。それは縛られた口であり手である。